女鑑

（毎月二回[illegible]發行 明治二十四年八月創刊 [illegible]第三種郵便物認可）

第拾參年第拾壹號
（明治三拾六年六月一日發行）

口繪

私立東京女學校開校式
赤堀峯翁米壽園遊會
京都等持院
清國蘇州風景
故戸田忠太夫翁の筆蹟

重要目次



地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候

尚ほ注文御案内書は御一報次第御送り可申上候

一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候樣奉希上候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

女鑑 第拾參年 第拾壹號 目次

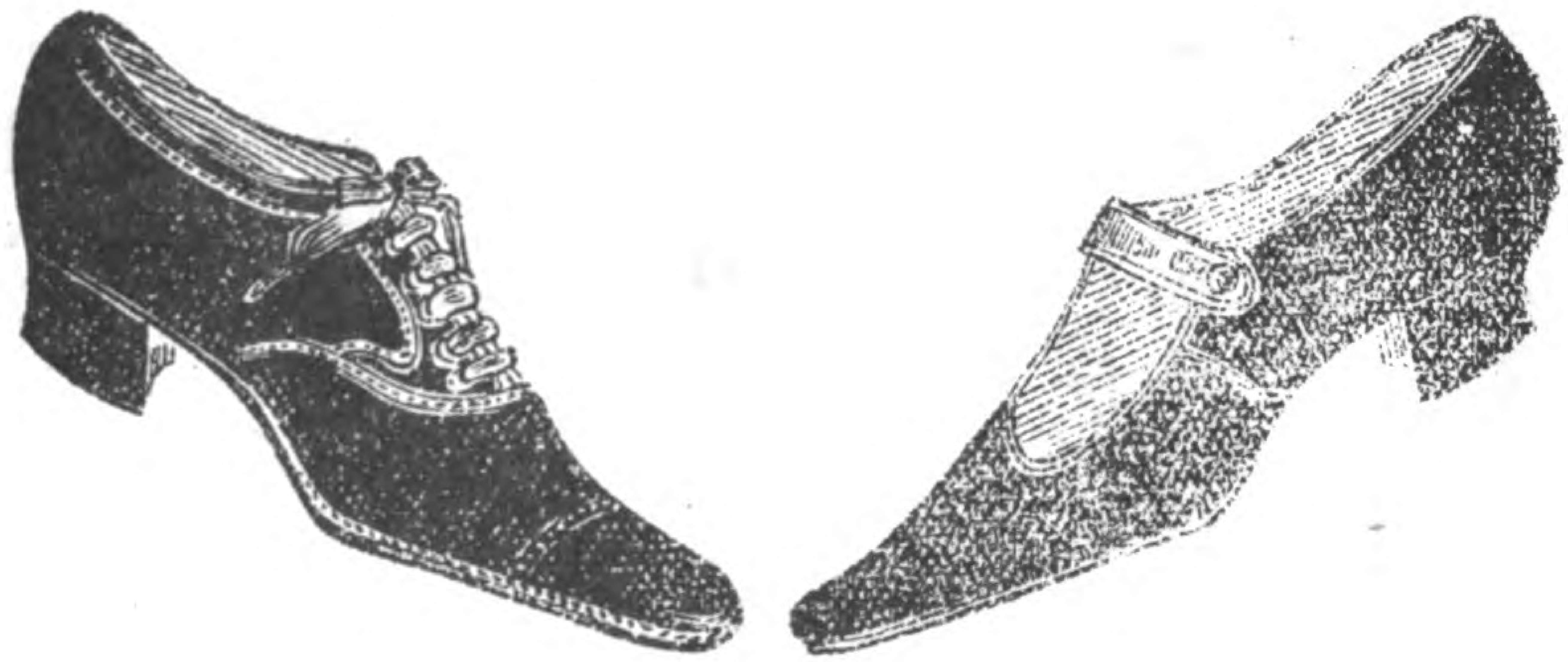
定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行　金三拾錢
半頁　金八圓
一頁　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓
（色刷は特に御相談に應す）

明治三十六年五月卅一日印刷
明治三十六年六月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊索一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人　並木貝雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

各女學校御用靴製造



守田商店

東京市神田區裏神保町壱番地

◎年中半ゑり帯揚類

半ゑりは御婦人様方の最も御風采を保持す品なれば第一地色又は意匠に御注意肝要に存上候

夏は中形ゆかた地品々

粋て人から

◎御まげ入（ゆきとも形）

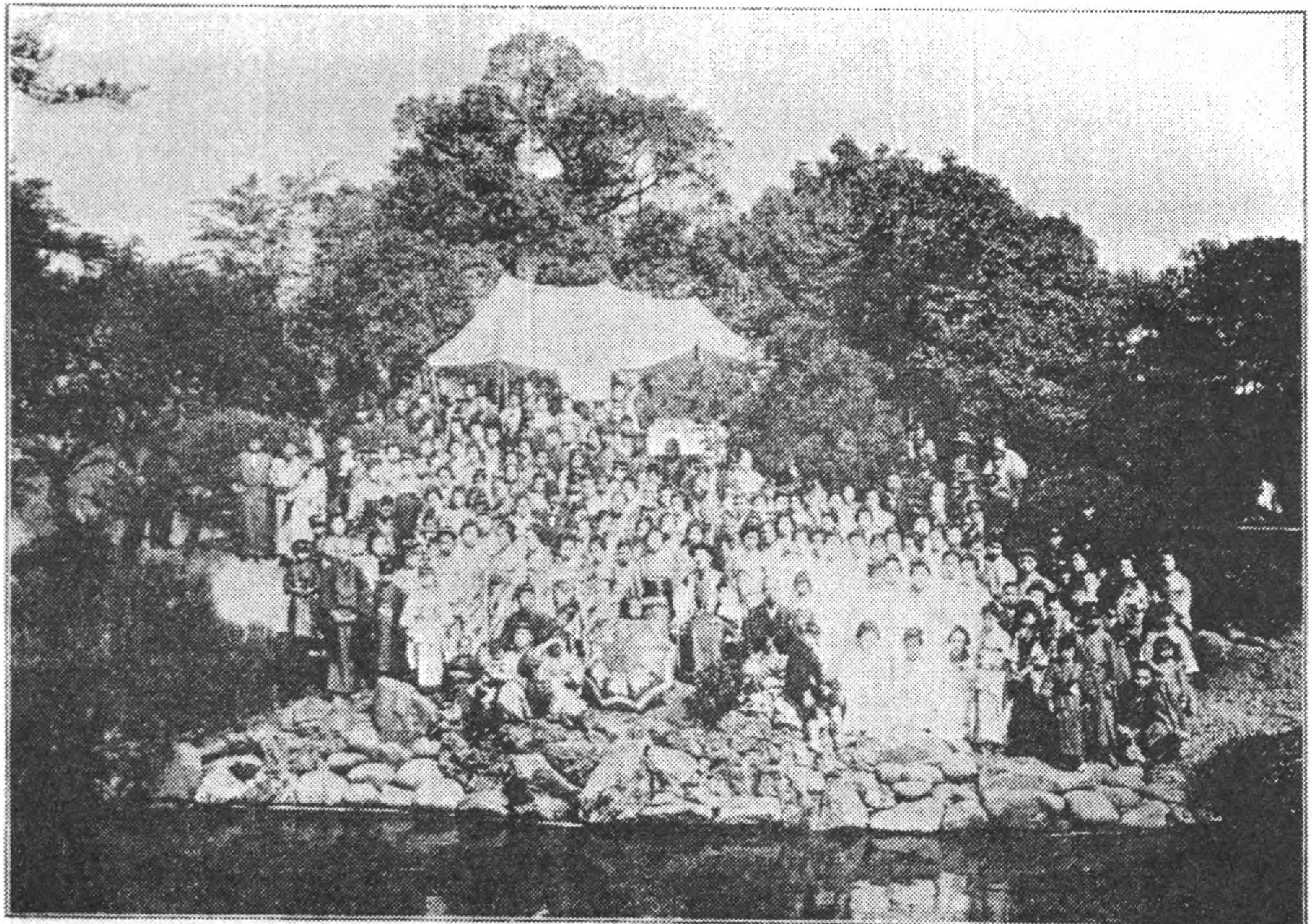
御小うり

芝櫻田本郷町

芝公園勸工場久保町　ゑりきん



私立東京高等女學校開校式



赤堀峯翁米壽園遊會

足利尊氏木像



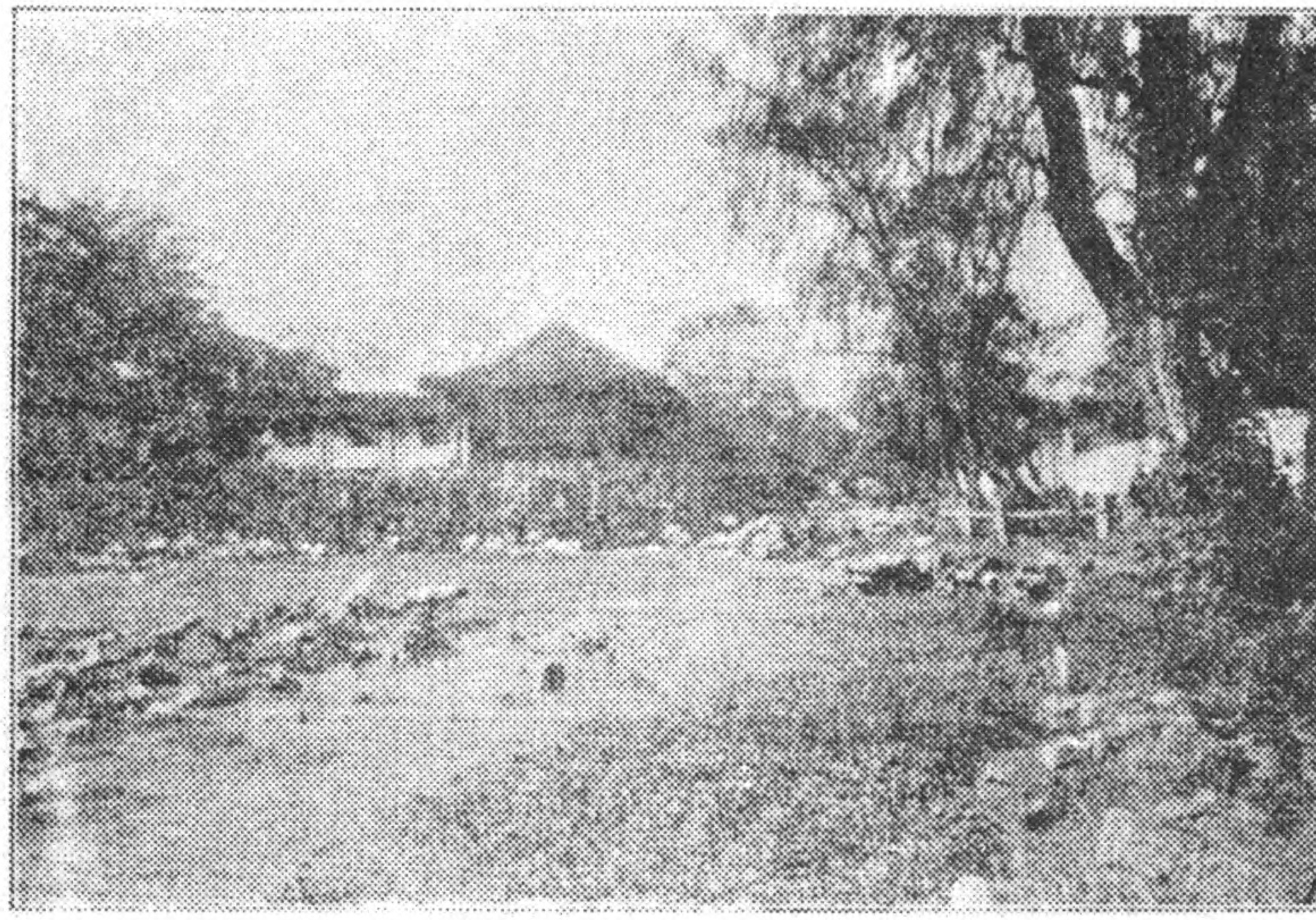
喚子鳥　　　尊氏

人もなきみ山のおくのよぶこ鳥
いく聲なかは誰かこたへん



西京等持院庭園

清國蘇州風景



蘇州城內滄浪亭の蓮池（其の一）



（其の二）

遊春野

[illegible]

[illegible]

國の[illegible]

[illegible]

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

傳染病研究所、養生園
東京病院其他各病院御用

ARBOS.

專賣特許 アルボース劑

コレラ、赤痢、ペスト等の傳染病を恐るゝ者は消毒用として日常アルボースを使用せよ又しつひぜん田蟲等の皮膚病にも霜やけあか切等の凍傷病にも有効なりとの世評高し

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同卅五斤入金二圓●石鹼大形金十三錢、同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地

扇橋製藥株式會社

驚林軍醫總監發明

りうまちす根切
梅毒根切

複方克快丸

半劑試み

大効なければ決して服す可らず

●五劑三圓五十錢二劑一圓五十錢送四錢

五年十年長病一二劑服し全快す

複方克快丸は其効驚くべし克快丸に三倍す

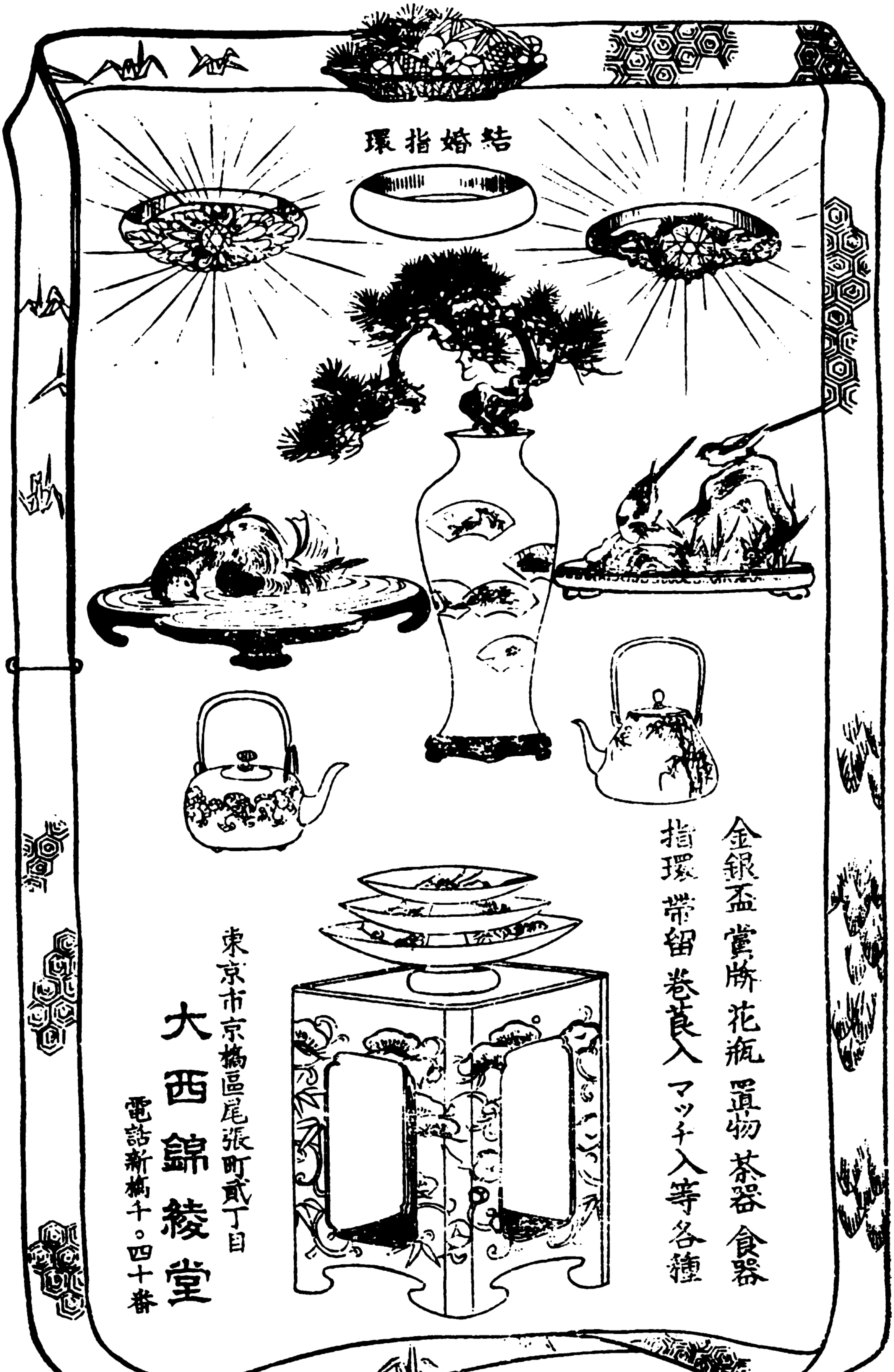
責任調劑…順天堂合資會社長…植木彌一

本店 東京市淺草區なみ木町
支店 大阪市高麗橋松屋町通

順天堂合資會社

全快禮狀時に新聞掲載す……一劑七十五錢半劑卅五錢

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



女鑑　第拾參年第拾壹號

家庭の藏書

家庭の伴侶として、書籍を備ふるの必要なることは、予輩屢々之を説けり。家庭に於ける諸般整理の任務を以て、重に主婦たるもの丶責に歸するものとせば、書籍備附のこともまた主婦の須らく心がくべき、家庭要務の一なりといはざるべからず。

趣味高き娛樂と、實際の有益を兼たる書籍が、家族快樂の種子として、また實際日用上缺くべからざる者として、家庭に備へ置くの必要あるは、言ふまでもなきところなるに、吾國の家庭には、藏書を以て、必しも備置かざるべからざるものなりと心得居るもの丶甚だ稀なるは、予輩の遺憾とする所なり。

勿論學者、大家先生の家には、幾千萬卷の內外古今の書籍を藏して、小書籍館とも見るべ

きものを有するものなきにあらず。されど此はたゞ篤學の志より、或は學問上の要用より、蒐集したるものにして、予輩の謂ゆる家庭の藏書といふものと其の性質を異にせるのみならず、縱ひかゝる大家學者の藏書をも、なほ家庭の書籍なりとするも、其他中流以上の家庭には、書籍を有するもの甚だ少なく、偶々之れあるも、家庭の必要として、之を藏するものは、甚だ稀なるが如し。是れ恐らくわが國家庭に於ける缺點の一なるべし。

楣間の額には數百千圓の價ある古畫を懸け、床上にも數十百金を費やしたる古瓶を安置するは、概ね中流以上一般の習俗なり。室内の裝飾としては、是等の古畫、古瓶もまた必ずしも無用といふべからざるは、勿論なれども、家庭の必要よりいへば、無くてならぬ程のものにはあらず。若し之に代ゆるに書籍を以てせば、その娯樂も、實用も遙に之に優るものありて、家庭日夜の樂も、常に新なるを得べく、朝夕受くるところの實益もまた尠なからざるべし。況んや室内の裝飾として之を見るも、書棚書架の稍々美麗なるものを用ゐなば、古畫、古瓶に比して、一見寧ろ優るも、劣るなきに於てをや。況んや又た一個の高雅なる古畫、古瓶を購ふの資を投

じなば、幾十卷の興味ありて、裝釘又美麗なる書籍を求め得べきに於てをや。

若し來客ありて、主人若くは主婦の之と延見する時に、楣間の畫と、床上の瓶花とのみならで、架上の書籍、棚裡の雜書も、抽出するに任せて、自由に閱覽するを得せしめば。客をして倦ましむるの憂もなく、談話亦自から高尙となりて、會晤の間に興味の生ずるを覺ゆべし。茶を勸め、烟草を供し、又は菓子を饗應するのみにては、未だ以て注意深き主婦が、來客を遇する所以の道なりといふべからず。

讀書の好癖に乏しき吾が國の家庭に於ては、碁、將棋、花牌、抹茶、挿花、琴、三味線の類は、昔より尤も流行したるものなり。是等の諸遊戲も家庭の樂を資くるが爲には、必要なる場合なきにあらず。隨つて來客を待遇するにも、時としては應分の用を爲すとなきにあらずと雖も、若し讀書の樂をも是等遊戲の中に加へなば、啻に家庭に高尙なる趣味を加ふるのみならず。來客に對しても、諸遊戲以外に一種高等なる雅興を催ふさしむることを得べきあり。されば讀書の習に乏しき我國民には、家庭に讀書の好癖を生ぜしめて、自然に書籍と相親むの習慣

を起さしめんことを要す。是れ啻だ家庭の娯樂と實用とに就てのみならず。品性修養の上に於ても、人格陶冶の上に於ても、頗る必要且有益なればなり。

野卑なる娯樂、劣等なる遊戯もまた娯樂たり、遊戯たるには相違なきも、今日中流以上の家庭に容るを許すべきものにあらず。野卑なる娯樂には、多くは杯盤狼藉の伴ふあり、劣等なる遊戯には往々淫猥媟冶の風習を助長するものなきにあらじ。而して尚ほ内に厭かざれば之を外に求め、相伴うて、落語、講釋、義太夫より、最も野卑なる浪花節、源氏節などの興行物に向ひて、一時の快樂を買はんとするに至るは、また自然の趨勢ならざるを得ず。是れ豈に眞成に家庭の幸福、快樂を保持する所以ならむや。

西哲の語に、室に書籍なきは體に精神なきが如しといへり。眞に味ある言なりといふべし。一家の主婦たるものゝ室の精神たるべき書籍を備ふるの心懸けなかるべからず。又た書籍は少年の食物、老年の樂にして、繁榮を裝飾し、危難の逃避所となりて之を慰諭し、家に在りては快樂の種子となるともいへり。是れまた宜く服膺すべき名言ならずんばあらざる也。



論說

女子教育に於ける希望

東京女子高等師範學校教授　野口保興君

左に掲ぐるは私立東京高等女學校開校式に於て演説せられたるを速記したるものなり

吾國の女子の教育と云ふものは。勿論昔から無いのではないのでございまして、唯其施し方女子教育と云ふもの丶方針が矢張り其の時々に變じて來たのであります、今日の高等女學校などで施す所と較べて見れば、昔のは大層違つて居りませうが、併ながら女子の教育と云ふ事はそんなに日本で新らしいと云ふのではないのであらうと、存じます、其事は長くなりますから略しまして、明治になりましてからも、明治七八年頃でありましたが、女子の教育と云ふものが、明かに歐羅巴風、亞米利加風などに則つて來るやうになりました、それで今から十四五年前に於ては大層それで衰微して來ましたけれども、さう云ふやうな盛衰のありましたのは、矢張り女子教育の必要を或る時代には感じたり、或る時代には必要を感じなかつたから盛衰が起つたのではなくして、教育と云ふ事が必要でありましても、詰り世の中の事情に合ふやうにすべき所をしなかつたと云ふやうな爲に起つたのであらうと存じます。

今日は數年以來女子の教育と云ふものが段々盛ん

になりまして、さうして女子の高等教育と云ふやうな事も段々開けて行きつゝありますのは誠に喜ばしいのでございまして、從つて玆に當校の新設を見るやうになつたのも甚だ喜はしいことでありますが、唯玆に私が聊か希望として述べて置きたいと云ふのは、先程から段々御話もありましたが、女子の教育を施しますに、世間普通の言葉で申すと、或は保守主義を取るが宜いとか、或は進取主義を取るが宜いとか云ふことを申すやうに聞いて居りますが詰り保守と云ふのは、如何なる意味で保守と云ふのであるか、又進取と云ふのは如何なる意味であるか、之をそれ〳〵主義として申しましたならば、大層違つたやうに考へますが、それは、結局女子の教育の必要から申したならば、世の中に立つて、どの方面から見ても、役に立つやうな婦人が出來ることが、肝要であらうと思ひます、それであるから形に於ては、名を附けることが、出來ませうが、結局はどの方面に立つても、役に立つやうな人間を造らうと云ふ考が宜からうと思ひます、何故ならば一方に於て非常に學科の智識が有つても、其智識が唯文字になつて仕舞つたり、書物にある事が唯分るだけの事にあつて仕舞つて、之を實際に施すことが出來なければ役に立たぬことにある、唯智識だけが殖えたのであつて、眞の役に立つ所のものにならない。其他例を擧げて申すと長くなりますから畧しますが、結局は役に立つやうな者を造らないから、それで社會が不平になつて、どうもそれでは役に立たないと云うて、教育者に對して種々注文をしなければならぬ、又學校に出して置いても學校へ出した結果として、其子供が大きくなつても家に取つて役に立たないやうな者が出來れば、滿足を表

することが出來ない、即ち役に立つ者を造るか、造らぬかと云ふのでありますが、さて此役に立つと云ふ事は、簡單ではあるけれども、之を分解して見ましたならば、非常に複雜な事であるので、又人間の性質から申しても分業と云ふやうな事が既にあるのでありますから、普通の敎育は大體を造るのであつて、特別の技能とか云ふやうなものは、中等敎育として成立つて行く所の高等女學校と云ふものに望むべきものでないと思ひます。

所が又一方を見ますと技藝に偏すると云ふやうな事があつて、圓滿なる人を造ると云ふことは困難と思ひますが、是等は一つには今日の女子の敎育に付て最も注意すべき所は、一方に餘程進步して居る所の男子の方の敎育に較べましてそれと全く同一になつて行くと云ふやうな所がありはしないかと云ふことを憂ふるのである、何故なれば同じ中學校と云ふやうなものが、男子の方にもありますが、之を女子の高等女學校と較べると、普通敎育の上から云ふと同じでありますが、男子は先へ行つて專門的の仕事を多くしなければならぬ者でございますから、其要素を造る所である、女子の方は其意味が別でありまして、今日其精しい事を申せないのは殘念でありますが、女子の方は大層違ふのである。

それで男子の中學校に於て高等の普通敎育を授けるのと、女子を高等女學校へ入れて高等の普通敎育を授けるのは、自ら歸着する所を違へなければならぬので、それを種々の點から同じ様にすると云ふの弊がありはしないかと思ふのであります。

幸ひにして本校の校頭となられ、又それ〲職員となられて御盡力になる方は、女子の敎育に付ては多年經驗を有する方でございますから、敎育を

すると云ふ事に付きまして、男と女と同じ樣に敎育すると云ふことが無いと云ふのは申すまでもありませぬが、敎育の歸着する處を申しましたならば、男は男らしく敎育しなければならぬ所があつて、女子はそれと一樣にならないやうにと希望して居る、即ち今日此の開校に當りまして聊か希望と申すのは、抱負を以て多數の有要なる生徒を御養成になつて、さうして一方に於ては當校の隆盛を御計りになり、又一方に於ては社會に對して多くの幸福を與へられるやうに希望するのであります、時間も無いことでございますから是で御免を蒙ります。

（終）

觀劇と其利害

前田長太

觀劇の可否論は、劇の良否を區別したる上ならでは定め難いけれども、吾曹は今茲に此の如き事を論ずる遑あらず。世間の演劇を目して十把一束皆惡なりと云ふは、酷評の譏を遁る能はざれども、概して言へば、多く皆有害なりと云ふも、强ち過當の言矯激の論にはあらざるべしと思考す、世の好劇家には甚だ氣の毒の感なき能はざれども、吾曹は此の方面より觀劇の道德上極めて有害なることを斷言極論せんと欲す。

此點に就き吾人一個の私見を開陳するときは、好劇家必ず曰はんとす、彼何者ぞ演劇の何者たるかを解せずして漫に之が利害を論せんとは、盲者の議論にあらずして何ぞやと、吾曹は此の如き非難を避くるが爲に、古來聖賢の之に關する敎戒的言論を引證して、吾人の宿論を主唱せんと欲する者なり。

時の古今、洋の東西によりて劇にも種々の別あれ

は、皆同一の筆法を以て論ずること能はざるは勿論なれども、吾曹は本邦現時の演劇に適切なる議論をのみ引證せんと欲するものなれば、此點に就ての非議も容易く避け得らるゝものなり。

此の如き前提を措きて、愈々是より好劇家の逆鱗に觸るゝ議を吐かむかな。

世には觀劇よりも道德に有害のものはなし。劇場に於ては罪惡が一種の快味を帶びて人心に侵入するものなり。余は此の娛樂に就き自家の弱癖を自白す。(好劇家の一人なりと云ふ意なり。)然るに劇場に入るときには家庭より携帶し往きたる道德を純潔に持歸りたる例なし。收めたる素行の中何かは亂されたるなり。避けたる惡事の中何かは再來したるなり、嗚呼吾何をか言はむ、其の歸り來れる時には一層貪慾家となり、一層僥倖家となり、一層淫奔家となり、否尙一層殘忍刻薄者となるの實を認めぬ。蓋し人々の中に在りたるの結果なり

(セチカ)

婦女子の大好物は觀劇なり。彼等の多くは多感の動物にして知識の極めて薄弱なる者なり、高尙深邃の議論を聞くの耳もなければ、大家の名篇雄作を讀むの力もなし、唯役者を品評する口あるのみ演劇を觀る目あるのみ、此一事以て觀劇は大人君子の快樂とすべきものにあらざるを證す可し。女子は何處に於ても女子なり。己の貞操淑德を犧牲に供して迄も觀劇の好奇心と示貌の誇負心とを滿快にせんとす。二千年前の昔羅甸の詩人は既に語て曰く『見物するが爲に往くにあらず見物せられんが爲に往くなり、彼處は貞操淑德の有害所なり』(オヴイジウス)吾曹も亦曰はむ、劇場は彼等の美貌美服の展覽會なるが故に、多く此に誘引せらるるものなりと非耶。

役者は河原乞食なり、正人君子の堂奥に上ぼすべきものにあらず。彼等に取る所ありとすれば、其の才能に在り、決して其藝能にはあらざるなり。名優と雖、之を廟堂には入らしむ可からず、閣臣にして之に狎るゝは、賛す可きにあらざるなり。大哲フラトンの如く强民ラセデモニア人の如く之を國境の外に遠く放逐するを酷なりとすれば、少くも警察力を以て之を狹隘の範圍内に閉込めざるべからず、彼等は婦人の玩弄物なり、藝娼妓と何ぞ選ばむ。名優と雖之を重ずるは不可なり、宜しく見ぬ振すべきなり。カルリピデスは希臘國中の名優なりき。一日アゼジラウス王の鹵簿に邂逅す一行に列して王の眷顧を得んと欲す。王顧みず、彼忍ぶ能はず、大膽にも進み出でゝ『陛下、臣を知り給はずや』と云ふ。王一瞥して曰く『汝は役者のカルリピデスにはあらずや』と、唯是のみ。彼呆然たり。一國第一流の名優に對しても、此の如くして足る、何ぞ其餘を費さん。

觀劇の害は摸倣より來るもの多し。而して模倣は婦人小子の特性なり、彼等には自發と創作の心なし、單だ見て學ぶのみ、目學の耳學よりも速なるは人の皆知る所なり。愚俗と婦女子は劇場を以て一種の學校とす。豈啻愚俗婦女子とのみ言はむや相當の知識ある者にして尙且劇場は勸善懲惡の學校なりと云ふ者あり。然れども其實は貶德汚行の學校なり。之が實行的敎員は彼の俳優なり。愚俗と婦女子は好んで之が生徒となり、俳優の演ずる所否敎ふる所を見て感嘆す。然れども記せよ、感嘆と摸倣とは相去る一步のみ。人は其の感嘆する處のものを直に模倣する者なり。婦人と兒童に至りては、尤も然りとす、是に於て乎觀劇の害なるものは生ず。昔者希臘にテスピスなる者あり、

虛僞架空の小說を劇に演ず。老フロン叱て曰く、咄、爾は此の如き虛妄を公衆の前に演じて耻ざるかと。テスピス曰く、之を娛樂的に演ず、何の不可か之あらむ。老豪漢憤然蹶起杖もて大地を打撲しつゝ語て曰く、然り、今之を娛樂的に演ずると雖、若し吾人にして之を賛し之を許さんか、日ならずして之を人事の實際に於て見るに至らん云々と。

誰か毒を膳に混ずる者あらん、蜜若くは其他の人口に快きものを以てするは是れ自然なり。サタンは亦此の如くす。劇場人の耳目を悅ばしむるものを取りて以て之に死因の大毒を混ず。彼の勇ましく、彼の正しく、彼の優にやさしく思はるゝ所のものは、是れ實に毒々しき蝦蟇の口より流れ出る蜜の如きものなり。其の快味を喜ばんよりは其の危險を恐れざるべからず。(テルトリアヌス)

嗚呼是れ大テルトリアヌスの言なり。彼れの言はいつも獅子奮迅の勢あり。之に次で古來の賢聖は孰れも皆演劇征伐の急先鋒となりたるものなり。彼のキリプストムスの如きは眞先きに其の雄辯の鋭鋒を觀劇の父老に向けて曰く『我都府の頽敗せるは其罪青年指導者の惡に歸せざる可からず、年老て尙且兒戲を樂みとするあらば、曷ぞ放蕩無賴の青年を純潔の性行に回復するを得んや。多年歲月の道を步み、頭上に白雪を戴きつゝも、尙且無味の演劇を脫する能はずんば、爭で其の子弟、臣僕、隣人の彷徨せる者を矯正訓戒叱責するを得んや。夫子自らも年老て此點に彷徨しつゝあればなり』と。家庭の父たる者宜しく此言を味ふべし。其子女の觀劇を許すとは、嗚呼是れ何事ぞ。甚しきに至りては自ら之を携へて芝居見物に出掛る者すらあり、咄々怪事と云はざるを得ず。

凡そ醜行惡德にして劇場に演ぜられざるもの之あるか、之を以て觀客の歡心笑聲を買はんとは噫、(クレメンス、アレキサンドリヌス)

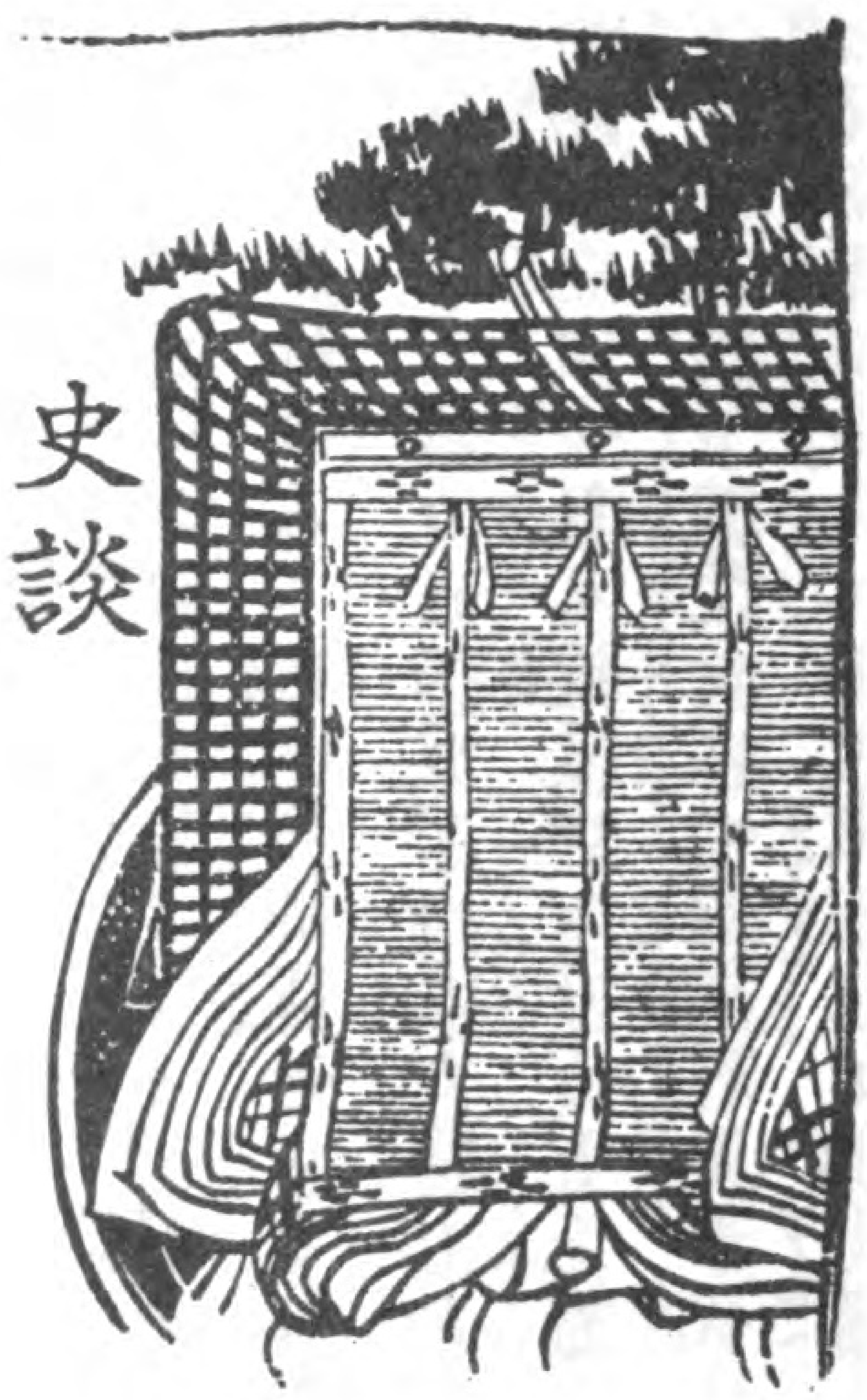
人或は曰はん、宗教家の觀劇を禁じたるは、劇外の危險物の爲と劇の敎外的の爲のみと。吾曹は之が反證としてボッスエ、フエネロン、グルフセ、ラシーヌ等の言論を引用するを得。唯紙幅の許さゞるを奈何せん。彼のルーソーは嘲弄的に語て曰く、嗚呼良學校なる哉劇場や、通學の靑年子女に金戒玉訓を授く………と。

『演劇は無かりし情欲を起して、有し情欲を温む』と、流石は文筆家なり。『劇場は罪惡と敗德の學校なり』とは五十年間劇作に從事したるリッコボニの言なり。此は經驗の上の言葉なり。

社會罪惡の大半は演劇之を敎ふるものなり。戀愛、淫行、密通、盜賊、殺人、謀反、反逆、失望、自殺等十指數ふるに遑あらず。眞に是れ罪惡と敗德の學校なるを見るなり。

記して爰に至れば、世の父兄たる者をして其の子女子弟を觀劇に導き若くは之に觀劇を許すの如何に危險有害なるかを悟らしむるに足らん。歐洲にても地方民人の都府に登るや、親族朋友は之を都府の劇場に携へ行かずんば、最大快事を供するを忘れたるが如き心地すと云ふ、人情何處も同じ。宜なる哉田舍漢の江戶見物に來れるや、花街と劇場を見ずんば、上京第一の目的を缺き、見物第一の要所を見落したるが如き感をなせるや。然るに此の二ヶ所は丁度道德上最大の有害の製造場なること如上の所說之を盡せり、蛇足を添ふるの必要なきが故に、姑く玆に觀劇論の筆を投ず。(完)





玉輿記（つゞき）

須藤鳴門

越後少將忠輝母儀

家康公の九男松平上總介忠輝は、後に越後の少將と申ける、母堂は遠州金谷の產なり、其の素姓を尋ぬるに、元金谷の商人に嫁しけるに、此女美人の聞え世に高く、其名隱れあらざれば、爰に金谷の代官何某と云者、彼の女に想を懸け、呉竹の世の憚りをも顧みず、如何にもして奪取らばやと思ひけれども、其謀ならざれば、所詮かの夫に難題をいひかけ、死罪に行ひ、其の財產を悉く沒收してかれが、妻子を揚り者に爲し、然る後豫ての思ひを遂げ、寵愛せんとぞ巧みける、既に官威を弄し、無理非道なる事を云かけ、遂に之を害し去る、彼妻夫科なくして害せられければ、無念骨髓に徹り、この讐を報ぜずに置くべきやとて、無念に堪へ兼ね、三歲なる女子を懷にし、密に逃れて濱松に來り、家康公に訴へけるは、我夫何の科なきに殺されしとぞ、無念に候　間御慈悲を以て御詮議あそばされ下され候へと、直訴をぞ致しける、即右の代官第に手代庄官等を、悉く濱松へ召上けられ、一々糺明に及ぶの處、彼夫に聊も過失なけれども、偏に其妻を奪取るべき奸曲治定して彼の代官をば死刑に行はしむ。

かくて彼の女房は、召つかはせられ、其名を於茶阿と云ひしが、御行水の役を勤められけるに、いつしか家康公御手を付けられ、男子出生あり、其後又平產ありて、以上二人誕生せり、其内にて色黒くして、容貌惡しき若君をば捨させられけるを、皆川山城守私かに之を養育して、其名を辰千代と稱し、又一人の御連枝を、於萬と申してありしを、時に長澤家嗣なく、既に斷絶に付て、その名跡にと家康公思召され候なり、然るに辰千代七歳に及びし時、山城守は長澤の家老と申談し、辰千代を以て長澤の名跡にと思ふより、始めて辰千代へ對面なされける、家康公御覽せらるゝや否やすなはち曰く、さりとては、つらたましゐ、其儘三郎が幼稚立に少しも違はざりけりと上意ありしとぞ、さて其後下總佐倉にて四萬石辰千代に下されて、後又信州川中島へ十八萬石にて御得替となりたりける。

津輕越中守後の奥方

津輕越中守信政は、奥州津輕郡弘前城主にて、四萬二千石を領す、されば、信政本妻卒去に依て、妾を以て奥方と爲したまふ、これ亦例少なきことなり、此妾出生は、牧野備後守成貞の知行七萬三千石の内、二萬石は相州愛甲郡に在り、同郡四谷村の名主川島市兵衛といふ者あり、即その娘なり、市兵衛子供多く、長男は五郎左衛門、次男は市太夫、その次の娘は、同郡猿ケ島村の名主大塚左内の弟數馬の妻となる、其妹は、江戸に出で奉公致けるに、器量人に勝れ、巧笑百媚なる風情あり、初より津輕家へ妾として聘せらる、終に二人の子を產み、とやかく、年月を送りける程に、本妻の嫡子平藏信重、後年出羽守に任ぜられ縁邊の義仰せ付らるゝ處實母は、先年病死す、然

れば今度の祝言に、母儀なくては叶はずとて、彼妾を以て越中守の奥方なるを申付けらるゝに付、其の規式ありて、即ち奥方に直りたり、故に出羽守御袋分なり、誠に斯様なる果報も澤山には、よも有まじと也。

松平長門守母儀

爰に防州の住人、杉次郎左衛門と云ふ者、同國兒玉元良の女と婚姻を結ひ、既に入輿あるべき日に至りければ、國主毛利右典厩輝元、内々この由を聞き玉ひて、中途に待ちうけ、この娘を奪はれけり、この娘美人たるの由、たゝに隣里郷党に聞えしのみならす、近國までに流布せし故なり、杉次郎左衛門誠に心外に思はれけるが、輝元氣遣に思はれしや、彼の杉を討ちたりとぞ、松平長門守秀就、毛利日向守就隆の母儀にて、此腹なり。

大隅守島津久光母儀

島津家に、大混亂ありしこと、世人の知る者稀なり、維新の事にも、多少關係あるかと思はる大事なり、何んとなれは、島津家に松平薩摩守重豪と云ふ人あり、從二位中將までになり玉ひ、隱居して榮翁と號す、其子薩摩守齋宣正四位上中將になりたり、隱居して溪山と號す、其子齋興從三位宰相にまでなり玉ふ、其子薩摩守齊彬從四位中將になり、後從二位權大納言の贈位官を賜はれり、この齊彬は齊興本腹の子なり、次に大隅守島津久光といふあり、是妾腹なり、一說には久光は嫡子なり、夫故に次男となり、齊彬は實は次男なれども、本腹ゆゑに嫡子になりたりといふ、久光の實母を由良といひて、高輪邊舟宿の娘なり、此由良性質嫉妬ふかくして奸智あり、齊彬公は、性温恭忠順、賢明にして大度斷あり、天下の英傑、實に近世最第一なるべし、尊王は勿論、幕府にもよく恭

順を盡くし、一家の事には困却したり、されど喜怒顏色に見るゝとなし、實に英雄と稱すへし、彼の由良なるもの常に齊彬公を密かに殺害し、久光公を以て家督とせんことを常に懇願せり、夫故に薩摩齊彬公の一党あり、久光公の一黨あり、常に軋轢して國亂やます、久光公も之を知るや否やは計り難し、齊彬公殊の外心痛、併しながら曾て顏色の憂苦あるを見す、故に我の女を將軍家定公の御臺所となさんとすること起れり、蓋しこは齊彬の獨考也、この譯がらは、初めに老中阿部伊勢守正弘と齊彬公と密談あるより起り、德川家達卿養祖母天璋院是なり、これ齊彬公の子にあらず、實に入り組みたることゝもなり、そは表面に二ッあり、實に二ッあり、第一の表向は齊彬公の初め嫡子の時國へ參りたり、其時若氣の事とて、次の者に手をかけられて、一女を生めり、是天璋院なり、第二の表面と第二の實は、天璋院は次の者に手をかけて出來たりし女にあらず妹を內實養女として出せりといふ、末家の女を養女になせしことは秘する所なり、此天璋院を我子として將軍家定公の御臺所としたることは幕府の威權を借りて、前述せし由良并に久光を壓倒し、其黨を鎭定せんため、一ッには我一身の藩屏護衛となさんとする故なり、松平春岳此天璋院一條に付ては、島津の爲に頗る盡力せし由也、齊彬公病死も、世人いふ毒殺なりと、されど、こは虛說歟、幕府を慕ひ保護せしことも、齊彬公を以て第一とす、亦幕府を怨嗟することも、薩州を以て第一とすと思はれたりとは、春岳公の言なり。

抑本篇揭ぐる所は、德川幕府時代に於ける、全盛なる武家閨門の一斑にして、當時上は將軍列侯より、下は大夫士庶に至るまで、家富み財豐かな

らん者は、一般に側室侍妾を蓄へ、或は外妾圍者を置き、需要あれば供給起るは、經濟學の原則に違はず、女子も自から之に應する敎育を受け、或は舞蹈或は音曲、所有遊藝を仕込まれ、所謂御奉公に上り、まゝ北の選に當りて、御部屋樣と崇められ、御新造樣と尊ばれ、長閑に月日を送られたる者珍らしからず。こは明治の初の頃までも、その遺風存し、今の貴婦人たちの中にも、浮き川竹の流れより、おみ足を洗ひたまひ、何爵夫人、何々夫人と唱ふる御方もすくなからず。是れ等玉輿夫人達は、琴「オルガン」よりも三味線太皷をめでたまひ、法談說敎よりも演劇寄席を好ませたまひ、唱歌より端歌といふ嗜好故、その形容風儀も華奢艶冶にして、おのづとその令孃姫御前方も、いつしかその氣風に感化せられ、ことの外に氣輕にて、色々の批評なんど、げに拙からざる者多きやに見ゆ。されば今日貴族上流社會の家庭に於て、高尚なる家庭敎育を望まんは、尙は以て容易の業にあらず。先つ今日の女子にして、主婦たり親母たる曉を待て、始めて眞成文明的敎育の曙光を放つべき歟。今日の妙齡女子の責任は、通常人の思ひ到らざる所において、責任は有ぞかし。皆よく心したまひね。（完）

マリー、テレス、ルイズ

石川野花

殘忍暴戾を極めたる佛蘭西大革命の光景は、世界の歷史に淋漓たる鮮血の汚點を留め、後人をして長く戰慄せしむるが中にも、ラムバル家の妃マリー、テレス、ルイズが蒙りたる慘狀の如きは、悲

酸もまた殆んど極度に達したるものといふべし、而してルイズの毅然たる忠節は、古への忠臣義士に比して、多く讓るところなく、凛然として後世を照らすに足るものあり。

ルイズは王族なるサボア、カリグナン家の姫君にておはし、千七百四十九年チユリンにて生れしが、天質嬋娟として、玉をも欺くばかりなるに加へて、才智の勝れたるのみならず、心ばへ最と優しかりければ、兩親の寵愛もまた大方ならざりけり。十八歳の時ラムバル家に嫁ぎたるが、程なくその夫を喪ひて寡婦となりぬ。されど美人の聞え高きルイズは、時の佛蘭西王ロイス十五世より結婚の申込を受けしが、宰相チロイセユルの故障に逢ひて、遂に皇后の位に上るを得ざりしは寧ろルイズの幸とこそいふべけれ、そはロイス十五世は淫蕩放逸なるのみならず、其齡もまた五十歳以上の老年にてありたればなり。

かくてルイズは其後ロイス十六世の皇后たるマリア、アントニーに仕へて、その寵を得しかば、一たび宮中女官の長たるべき旨を命ぜられしが、程なくポリグナツグ公爵夫人の爲め此の位置を奪はれしも、公爵夫人は薄情にも革命の起りしとき、皇后を捨てゝ獨り走り行きしかば、忠實なるルイズは、復職を命ぜられ、再び宮中に伺候して、皇后の左右に侍べるべき身となりぬ。然るに革命の騷動愈々劇しく、帝をはじめ、皇后の御身の上も甚だ危うく見へければ、ルイズは皇后に隨ひて、密に宮中を遁れ出でんと企てしも、皇后はベレンナに於て、革命黨の爲に捕えられ給ぬ、ルイズは一時獨り英國に逃れしも、皇后を懷ふの情止み難くて、また佛國に歸り來り、皇后と命運を共にして、自ら進みて危憂を分ちしは、感ずるに餘ありとい

ふべし。かくてルイズは長く皇后の傍に侍べるを得ずして、ラホルスの囚獄の中に幽閉され、皇后に奉侍して朝夕を共にするを得ざるに至りたる、心の中や如何なりけむ。

千七百九十二年九月三日の朝は、その前日の夜に犯されたる逆殺の大罪惡の叫びの聲を聞きつゝ明け放れぬ。此の朝、ルイズは殘忍にして血を好める法官の前に召喚されたり。前夜の慘状は明かに此の法廷の中に名殘をとゞめて、テーブルの周圍には憐れなる死骸横はり、衣の血に染りたる、腕の刄に傷けられたるなど、一見身の毛も竪つ許りなりき。やがて法官はルイズに向ひ、民黨に反對せる者の企謀に就きて知りたることを陳べよと迫りぬ。ルイズはかゝる企謀につきては露知るところなしと答へしかば、さらば自由と平等とを愛し帝と皇后と王族とを惡むとの二ケ條を誓へといふ。深宮の中に生育ちて、露をも厭ぶ女郎花の、かゝる嵐に如何でか堪ゆべき、淋漓たる鮮血の尚ほ乾かざる中に、靑鬼赤鬼にも比べつべき法官のおそろしき有樣を見て、ルイズは氣も弱り果てん許なりしが此時我と我氣を取直し、斷乎として妾は自由平等を愛することをば誓ひ侍らむ。されど帝と皇后等に背けとの事は誓ふを得じ、そは妾の心ならねばなりと答へぬ。あゝルイズが忠義の心の如何に勇ましく強かりしよ。なみ〳〵の女性ならむには、氣撓み、志折けて、ひたすらその身の全からんことをのみ計るべきに、たゞ一言が生死の分目なる此の塲合に當り、大義の爲に身命を擲つの覺悟をなせしぞ、哀にもまた殊勝なれ、法官へベルトは斯くと見るより、それものどもと指揮せしかば、情を知らぬ獄卒ども猶は血に厭き足らずやありたりけん。忽ちルイズを捽つて押へ

群る死體の上を引づり行きて、法庭の外に伴れ出しぬ。繊弱き女性の爭で此の苛逆に堪へうべき。ルイズは氣も心もはや亡ふ許りありしが、劍光一閃さと迸しる血烟と共に憐れやルイズの體軀は地に委して、芳魂遠く天に上りぬ。

獄囚の門前に群れる見物の中に、婦人最と多かりしが、此の婦人等も亦た自由平等の說に醉ひて、血を見るを以て樂とせる殘忍無賴の輩なりしかば、ルイズの屍體を見るや、その衣を剝ぎて赤裸となし、種々の無禮を加へし後、四肢を切離して、その足部の關節を、大砲に詰め込み、空に向けて發砲し、また首を切り、心臟を取り出して、高く鎗の先きに着き上げ、又たその無殘なる體軀をば荒繩に結びて、市街を曳き廻はしぬ。多くの婦人等之に隨ひて、或は腕、或は手足などの斷片を示しつゝ歡喜して、練り行く樣、其の慘狀殆んど名狀すべからず。

かゝる殘忍を縱まゝにするも、尙は滿足せずてや。暴徒はルイズの首をば、皇后アントニーの囚はれ給へる囚獄の窓に指上げゝり。幾年の久しき間、友垣として最と親しく、侍妃として最と忠實なりしルイズの斯く變り果てたる姿を見て、如何に御袖を絞り給ひぬらむ。されど皇后の御運命も嵐の前の花と同じく、やがて散りぬべく定りたれば、後れ先だつも、束の間にて、其御心は早や手を携えて、天の靑々たる樂園の裡に行き給ひしなるべし。

（をはり）

貞操なる妻は良人をして、純潔秀美なる愉快を感ぜしむ。彼女の容貌は最も美麗なる花園の如く、彼女の精神は最も有益なる書籍の如し。　カウレー



學藝

通俗土佐日記（第十六回）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

三十日雨風吹かず、

○雨風吹かず　とは雨降らず風吹ずといふにて、上を略せるなり、是は雨も降り風も吹くべき空模様なるに、降らず吹かずといふ心なれば固とより天氣好しといふべき日にはあらざるを思はせたるなり、

海賊は夜行せざるなりと聞きて、夜半ばかりに舟を出だして、阿波の水門を渡る、夜中なれば、西東も見えず、男、女、辛く神佛を祈りて、水門を渡りぬ、

○海賊は云々　海賊は夜中は徘徊せずと聞てといふなり、是れを以ても、此の日記中の海賊に關することは總て假設したるにて、全く女の所爲たることを思はせんが爲めの方便と知るべし、何となれば、海賊は夜中徘徊して人を劫かすが常なればなり、要するに好天氣に乘じて片時も早く舟出せんとせる折柄、此の邊は嘗て海賊の徘徊したりし地なれば、其れに託して舟出したるらしく搆へ成したるにて、如何にも女々しげに書きたるなり、

○阿波の水門　は鳴門附近なるべし、此の下に辛くなどあるを以て思ひ合はすべし、

○辛く　とは俚言のどうやらかうやらといふ心なり、此の詞は水門を渡りぬの上に冠らせて解すべし、渡りぬの副詞なり、神佛を祈りては挿入文なり、

寅卯の時ばかりに、野島といふ處を過ぎて、谷川といふ處を渡る、

○寅卯の時ばかり　とは大凡の推測なり、今の午前四時過ぎなりしなるべし、

○野島　は奴島とも書けり、太平記には武島とあり、淡路國に屬し、土佐泊より五里許隔たれり、

○谷川　和泉國にあり、下文の灘、黑崎、箱浦小津、石津等皆和泉國なるべし、

斯く急ぎて、和泉の灘といふ處に到りぬ、今日、海に波に似たる物なし、神佛の惠み蒙れるに似たり、

○和泉の灘　とは和泉國の近海なり、灘は總て航し難き處なれば、二月五日まで此處に泊れり、然して前に和泉國まで平安に願ひたつといへるを以て察すれば、先づ一安心し得たるなり、下文に今は和泉國まで云々とあるを以て思ふべし但し下文は此の灘にて數日を費し、且つ暴風に遭ひしことなどあり、

○波に似たる物なし　波は固とより無きことを思はせたるなり、

○神佛の惠み云々　是れ前に度々神佛を祈るといふことありしが、其れに照應したるなり、然かも明白に神佛の惠なりといはゞ、己れの信仰厚きが故に斯かりしと誇るに當れば、態と斯く似たりと書けるなり。

今日舟に乘りし日より數ふれば、三十九日になりにけり、今は和泉の國に來

ぬれば、海賊物ならず、

○今は　俚言に最早といふに同じ、

○海賊物ならず　海賊は南海より此の邊までの間を徘徊するなれば、今は心安しとの心を物ならずといふなり、物ならずとは假令來たりとも恐るゝに足らずとの意なり、海賊終に來らざりしは固とより假設なればなり、扨て、此處までの舟路、難處多きが上に海賊の噂さへありしが、此處にては雙肩の重荷を卸したる如く安堵せしなり、而して下文復た風波の艱みありしを記せるを見れば、一つ遁れて又一つといへる如く抑揚となれり、

二月朔日、朝の間雨降り、午の時ばかりに止みぬれば、和泉の灘といふ處より出でゝ、漕ぎ行く、海の上、昨日の如くに風波見えず、

○午の時　は正午なり、

○和泉の灘といふ處より　と此處に復た殊更に記したるは、此處に連日舟を止めたるが故に耳立たせんが爲めなり、

黑崎の松原を經て行く、處の名は黑く、松の色は青く、磯の波は雪の如くに、貝の色は蘇芳にて、五色に今一色ぞ足らぬ、

○黑崎　和泉國日根郡に在り、

○雪の如くに　の下白くを省き、蘇芳といひて赤といふことを思はせたり、

○五色　に一色足らぬは黄なり、

○此の邊り、天氣の好きを喜びて、心長閑なるを思はせたる書き樣やがて下文波高ければ止まりぬといふに照應せしめたるなり、

此の間に、今日は、箱の浦といふ處なり、

綱手引きて行く、斯く行く間に、或る人の讀める歌、

玉櫛笥箱の浦波立たぬ日は海を鏡と誰か見ざらむ

○箱浦　是れも日根郡に在り、

○綱手引きて行く　の綱手は船を挽き上る繩なり、此の海濱淺瀉多きが故なり、

○玉櫛笥　は箱の枕詞なり、而して下に鏡といひて映照せしめたり、

○一首、説明するまでもなし、唯海の靜かなるが爲め、日頃に無き嬉しさを言外に思はせたるを思ふべし、

又舟君の曰はく、此の月まで爲りぬることゝ、歎きて苦しきに堪へずして、人も言ふことゝて、心遣りに言へる、

引く舟の綱手の長き春の日を四十日五十日まで我は經にけり、

聞く人の思へる樣、何ぞ只言なると竊かに言ふべし、舟君の辛く拈り出して、善しと思へることを、得しもこそしへとて囁めきて止みぬ、

○舟君は　紀氏を指せるなり、

○此の月まで云々　正月中は兎も角、二月までなれるを歎けるなり、

○苦しきに堪へずして　は表面は、舟中案外の日數を費したる苦しさに堪へずといふにて、實は例の土佐の任の歎きを籠めたるなり、

○人も言ふことゝて　の言ふは歌のことなり、即ち人まねをするとの心を、記者の女の、傍らより嘲りたる詞として書けるなり、

○心遣りに云々　心遣りとは苦しさに堪へざる心を晴らさんとて讀めるといふなり、成る人と

のみ多く記しては、却つて馬脚を露はす恐れあれば、斯く間々舟君の作歌もありたるらしく記せるなり、
○引く舟の云々　引く舟の綱手のとは、長きといはん爲めに冠らせたるなり、綱手のは綱手の如くといふ心なり、
○長き春の日を　とは長き春日には、短日の頃の二日分をも一日にてせらるゝものなるにとの心なり、
○四十日五十日　十二月廿一日より二月朔日まで四十一日なるを斯く讀めるは、大數をいへるにて、又一つには苦悶の間に過ぐすは、一日千秋とさへいへるが如き心地せらるゝものなればなり、
○我は　と殊更に讀めるは、大凡世人舟滯りて數日を費せるもの多からんが、我ほどの目に遭へるものはあらじとの意なればなり、故に此の詞は聲を強めて誦むべき程の者なり、
○一首、土佐の任の爲めに、歸路まで斯く苦しめるなりとて、深く身の不幸を歎きたるなり、其心中察するに、餘りあらん、
○何ぞ只言なる云々　の何ぞは俚言の何ぜにの心なり、歌を讀むと言へば相應の詞遣ひあるべきものなるに、此の舟君は何ぜに斯く只言をいふにやと怪しみ嘲けりたるにて、只言とは日常の物言ひの如きをいふ、歌の讀み樣粗雜にて、歌のことを知らぬ由を誹りたるなり、然るに此の歌、決して只言ならず、但し自ら批難しては、謙辭らしければ、之れを聞きたる人の誹れる體に記者の女の書けるものとしたるなり、
○舟君の云々　此の以下は、舟君の歌を餘り甚だしく誹るを、記者の女、傍ら痛くいと惜しく

思ひて、其の訴れる人を制する詞あり、上の批評にて既に舟君が下手の歌讀みなるが如く爲し了れるも、尙は自らの謙辭なりと人の見んことを恐れて、却つて其れを庇護する詞を添へたるなり、用意周到變化自在なるを思ふべし、

○拈りて　とは出で難きを強ひて出すをいふ、

○善しと思へる言を　とは舟君の自ら此の歌を善き歌と思へる樣なるをいふなり、

○得しもこそしへとて　のしへは諸說紛々として歸着する處なけれども、先づ強ひ言へのひといとは畧し易き音なれば、此の二音を省きたるなるべしとの說に從はん、即ち外に言ひ樣もあるべきにようも左樣に強ひ言ふ　、どうも左樣には言はれまじきにとの意なり、此の強ひを誣ひの意に見るも亦通ずべし、

○つゝめきて云々　つゝめきをさゝめきとしたる本多し、之れに從はゞ、小聲にて言ふと解し得べし、されどつゝめくに從はゞ、繼體記に交戰をつゝびたゝかふと訓したる心にて、舌戰することをいふものと思はる、さすれば此處のは舟君の歌なれば、現につゝびはせねどつゝぶ樣にせしをめくといひしなるべし、

俄かに、風波高ければ、止まりぬ、

○風波高ければ　といへるは、前の雨風吹かずの類にて、風吹き波高ければといふを省きたるなり、非常の好天氣より俄かに此の慘憺たる天候となりたるなれば、心中の詫しさ察するに餘りあり、

ほと〳〵の節あれはこそくれ竹の
なほきもたのむかひはありけれ
人おほきひとのなかにも人そなき
ひとになれひとひとになせひと

和歌評釋 小倉の色紙（つゞき）

神田中學校講師　中川愛氷

三條右大臣

諱は定方、内大臣藤原高藤の二男なり、延長二年正月大納言より、右大臣に任ぜらる、其家三條にありしゆゑ、三條の右大臣と稱す、承平二年八月年六十にて薨ず、從一位を贈らる、

名にしおはゞ逢阪山のさねかづら
　人に知られでくるよしもがな

○名にしおはゞとは强助辭なり、名に負うて居る通り、すなはち名の通りならばの意、
○逢阪山の　近江と山城の國境にあり、前句を逢とう、
○さねかがら、蔓草の名、葉は冬も靑くして夏花咲くもの、俗に美男葛といひ又五味子の稱あり、こゝにては名にし負はゞを受け、結句くるにかけていへり、さねは小寢にて、さは發語なれば寢る事をいふ、
○人に知られで、ではずしての約語にて、他人に知られないでの意、
○くるよしもがな　よしはすべに同じく、がなはがの助辭に、なの感動詞を添へたるにて、あれかしと希望するの意、
この歌、御撰集戀部に「女のもとへ遣しける」とあり、
○一首の意　逢阪山のさねかづらといふ、其の名のとほりで、逢ふといひ、又は寢といふ如くになれば、何とぞして人に知られぬやうに、來るしかたもがなあれかしとなり、

家政學大要講義（つゞき）

磯部武者五郎

（十七）諸室雜作

家屋内諸室の種類は左の如し

玄　關　客人出入の都合よき樣に作るべし

應接室　玄關の次にて裝飾は簡單に爲すべし

客　室　相當の裝飾を爲し庭前の景色を添ふべし

二の間

三の間　共に客室に附屬せる室にして客を接待するに便利なる樣に作るべし

茶　室　點茶の室にて茶道の師に聞き作るべし

書　齋　主人の居間なり

部　屋　主婦老父母子女僕婢の室なり主婦の宿は各室に便利なる處に占むべし

寢　室　通常は部屋を以て充つれども富貴の家にては別に設けて安眠に適せる場所を占むべし

茶の間　食堂にして臺所と主婦の部屋に近き所に設く

化粧部屋　納戸湯殿に接近せる所に設く

納　戸　家屋内に於ける物置きなり

臺　所　十分清潔にて水はけのよろしき樣にすべし

土　藏　乾燥なる土地と空氣の流通よき處を選びて建つべし

物　置　臺所に接近する處に設くべし

湯　殿　臺所及び井戸に近く設け風の至らぬ處を選ぶべし

厠　雪隱のことなり規則に從ひ不潔なき樣に建設すべし

（十八）諸室建築上の注意

（一）我國は地震多き故三階以上は建てざるを可とす、且衛生上にても三階以上に住む人は健康に適せず、

（二）玄關は門より遠からざるを可とす、

（三）書齋はなるべく二階、又は離れ座敷を可とす、

（四）土藏の周圍は日光の能く映射する所にて喬樹のなき處を選ぶべし、

(五)臺所は西南に向たる方へ入口を開くべし、

(六)厠の傍には樹木を植ゑ、日光を遮り不潔物の發散を防ぐべし、且つ上下に窓を明け置くべし、

(七)多數の室ある處にては暗室なき樣に注意すべし、

(八)各室の間取を都合よくせんとならば、充分に地所を要すべし、地所の形細長く又は三角形の時は間取を充分にすること能はず、故に先づ地所を選ぶことを要す、

(十九)　雜作

雜作とは敷居、鴨居、欄干、疊、障子、戸棚の類其他家屋に附屬して先づ人の住まはるべき程に爲したる具一切を總稱するなり、

(二十)　門墻　庭園　井戸

(一)門の種類は左の如し、

門
- 唐門、樓門 ― 神社佛寺に多く用ふ
- 四脚門、上土門、冠木門、長屋門、潜門、洋風門 ― 普通の家に用ふ家屋の建築に應じて相應せる門を選ぶべし

(二)墻は家の外圍となりて家を保護するものなり、其の種類は垣根と塀とあり、これにも又各種あり左の如し、

塀
- 石塀、煉瓦塀 ― 外觀美なり費用多く市街地に適す
- 土塀　市街はずれの處に適す
- 板塀　市街地にても何れにても適當にて且費用少し通常の家には拍塀を最も可とす

垣根
- 鐵柵　費用多く市街地に適せり
- 木柵　角柵と丸太柵となり角柵は費用多し
- 竹垣　矢來垣四つ目垣、建仁寺垣等なり、建仁寺垣を多く用ゐる
- 生垣　杉、要冬青、枳殻、檜葉を植ゐて用ふ市街地に適せず

家庭

(三)庭園は日本風と西洋風とあり、日本風の庭は築山泉水を設け風致は運動に適せず、西洋風の庭は遊歩園植物園等の如きものにて運動に適す、

地面廣き處は座敷の前には日本風の庭を設けて高雅なる風景を添へ、更に空地を遊歩園に爲し、ロンテンス、クリッケットなど爲す場所を作るべし又樹木及び蔬菜を植ゑ込む場所をも定めて遊歩に適する様にすべし、

(四)井は厠芥溜湯殿に接近せざる所を選びて掘るべし井戸側は石、又は木にも造るべし、井戸流しは木造にて水流のよき様に爲すべし井戸には屋根又は蓋を爲して、塵埃及び不潔物の落ちざる様にすべし、

（未完）

己れを知る人は亦他人を知る　英國俚諺



婦人の心得

土肥羊次郎

◎今日の日本婦人社會には、隨分泰西の學問にも通じ、事情にも明るく、從つて一種の秀高なる理想を抱持する方も、甚だ尠からぬ事であらうと察する、併し彼國の社會には、夫れ々々の習慣制度あり、我國の社會には、亦た夫れ々々の習慣制度

があるので、强ち內を捨て外に趨り、直に英米の家庭や、婦人を以て、銘々の理想目的とすることは、頗る迂愚の話である、我國も今日の所では、法律上に於ける女子の權利も認め、所謂る個人權なる者が、頗る重く遇せられるに至つたが、實際數千年來の惰力的勢力、即ち家を本位とし、父子の關係を本位とするの習慣は、今ま尙は牢として拔くべからざる樣である、左れば無暗に一足飛びして、夫婦あつて始めて家庭ありと云ふなる、英吉利や亞米利加の風儀を慕ふて、己れも斯くこそ有り度きもの、斯くあらざるべからざる者とリキムは、到底空中樓閣の沙汰で、云ふべく行ふべからざる所である、否な、啻に行ふべからざるのみならず、强て斯る突飛な考を以て、從來の家庭を改造し、總て理想と一致させよう抔とすると、忽ち風波、一門に荒みて、離婚の別居のとお祭が持ち上る、何とか此の邊は充分注意して、矢鱈滅法に理想の新奇高尙に走らずに、敎育の効力と、家庭の平和とが、調和包合の出來得る樣に、當人も當人を仕込むものも、相持ちで篤と心得て貰ひたい。

◎どちらかと申せば婦人と云ふ者は、男子に比すれば、一層優美でシトヤカな特質を備へて居る、言葉を換えて之を評するに、女流の本領本色は、美的であつて曲線的である、而して又た男子に比較して見ると、一層忍耐の德に富み、至つて彈力の强いものである、故に婦人の任務にしては、マア〱理想の女權のとさわがずに、沈着て天凜の特得的本質を充分發揮するに力むるが肝腎だ。

◎眞正に劍道の極義に達した士が、暗夜路に何者に出逢ふとも、決して未練不覺を取らぬと一樣で、矢張婦人も平素よりして、禮儀作法の心得が深け

れば、如何なる場合、如何なる場所に接するも、飽くまでしとやかに、飽くまでけだかく他から尊敬を受け取りこそすれ、決して見下らるゝ樣の事がない、即ち禮儀作法なる者は、婦人が此の世の活戰場に馳驅するに、最も缺くべからざる甲冑である、若しも此の甲冑を被るなしに、赤裸々と丸で心得なく、漫然社交舞臺に面を出すと、意外の事で失敗を取り、大に赤恥さらす事がある、縱令又た赤恥さらさぬまでも、少しく改まつた場所に出ると、何となく心落ち着かず、始終ザワ〳〵胸とゞろきして、譯もなく氣おくれ肩すぼんで、些少のたのしみも感ずる事が出來ない、同じ人間の立場から見たならば非常に損な話である。

◎併し乍ら記者の主張する禮式は、唯だ單に倘古一點張りに、小笠原流とか、伊勢流とか、舊來のものを其の儘引き續で、しやにむに常時に當て箝めねばならぬと云ふ樣な、融通の利かない話ではない、又た九尺二間の裏店に住つても、大道露店に商賣をやつても、紋切形の左樣然らばで、眞面目くさつて威張り散せと云ふのでもない、要するに在來の禮式を土臺に、をちこち不都合な箇所だけは、あれこれと杓子鹽梅して、文明開化の當世向に修正し、それで以て平生練習することは、頗る必要な工夫である。

螢の話

橘村生

『ほたるこいこい山見てこい、
　行燈のひかりを一寸見てこい。』

『あら姉さん、とつて頂戴。』

『お待ちなさい、那樣に騒ぐと逃げて了ひます

よ。』

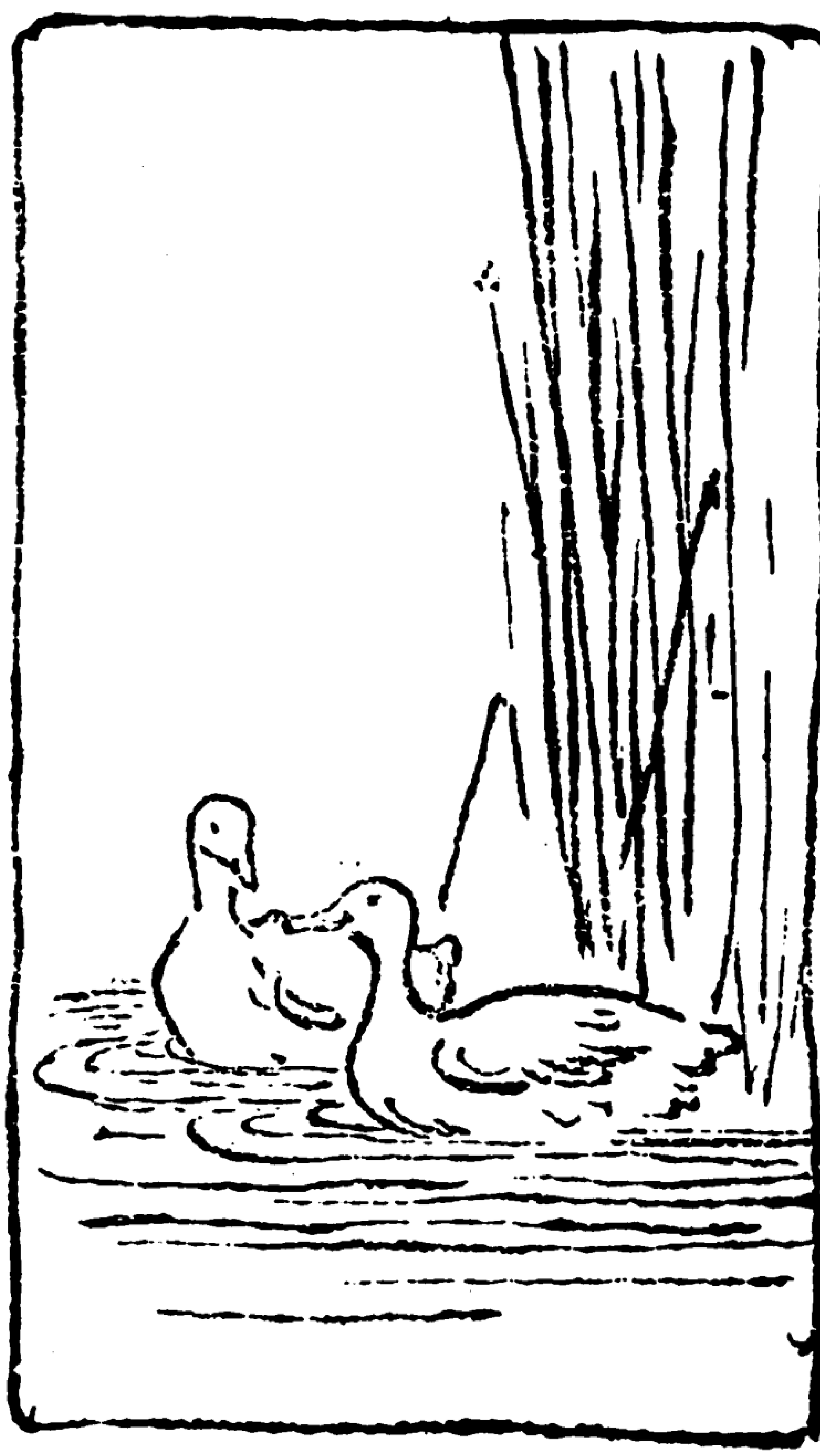
或る夏の夕べ、綾子は姉の文子と、文子のお友達の糸子とに手をひかれて、螢狩に來たのである。

團扇片手に『ほーたるこいこい』とやつて居ると、川添の草叢や、稻葉の陰から、段々空へ飛び上つて、果は星が散りみだるゝやう、水に映つて美くしい。

『姉さん、螢つて何處から湧くの！。』

と突然綾子は、此美景を見とれてゐる姉に聞いた、すると文子は。

『螢はね、水の中に居る蛆のやうな虫が羽化つてあんなになるのだよ。』と敎へると。



『草が腐つてできるんじや無くつて！。』

『あゝ。』

すると文子より年下の糸子は。

『文子さん、實際に草が腐つてゞきるんぢやなくつて。』と聞くのである。

『左樣ですとも、何で草が腐つて虫ができるものですか、虫は矢張虫のお母さんからできるのよ。』

『さう、だけど此間歌の本を見たら……えゝ何だつけ……さう〳〵、腐草化爲螢といふ題で、五月雨にをがやの軒の朽ぬれば、やがて螢ぞ宿に飛びかふ。といふ歌があ

つてよ。』

『さう、宜く覺えて居らつしやるのね、感心だわ、だけどそれは昔の人が虫からできるのを知らなかつたからだわ。』と蛆のやうな小虫から羽化ることを敎へて聞すのであつた。

綾子は其間『ほーたるこいこい』と云つて一人で馳け廻つて、やがて螢籠へ四五匹捕つたのを、嬉しさうに姉や糸子に示すのである。

『文子さん、貴姉は學問なさつたから、種々なことを知て居らつしやいますが、螢はなぜ彼やうにぴか／＼光を出すのでせう。』

『左樣ですね、私もよく知りませんけど、螢は一體光虫といつて、日本や支那や米國などに澤山出る虫で、體は黑く、首筋は赤く、又お腹の下は薄靑くなつて居まして、此うす靑いお腹の部分が、夜になると光るので、初め人は燐かと思つてをりましたら、近頃此は脂油のやうなもので、何んでも空氣に當ると光が發る性質のものだ、と云ふことを發見したさうです。夫ですから螢がお腹の處で呼吸をする度に、空氣があたつて光がでるので、未其詳しいことは學者先生方にも分らないさうですとさ。』

『左樣ですか、ほんとに貴姉は先生みたいね。』

『ホ……、夫ぢや譽めて頂いたお禮に尙一つお話しませうね。……綾ちやん、遠く離れる人ぢやありませんよ。糸子さん、もう少し歩きませう、歩きながらお話じませう。』と川添の堤を歩みながら。

『あれ御覽なさい、澤山螢が合戰して居ますから。』

と文子が指示す方を見れば、幾百だか知らない程の螢が、森の下の田圃で、入りみだれ飛びちがひ、

合しては離れ、離れては合し、星の如く散りては、月の如く凝り、萬字巴と飛び狂ふさまは、實に何とも言ひやうが無い奇觀であつた。

『糸子さん、何故あんなに合戰するか知つてゝ。』

『いゝえ、聞かせて頂戴。』

『あれはね、可笑なことです雄螢が雌螢を求めるので、一寸言つて見れば、螢には鳩や燕のやうな奥樣が極めて居ないので、自分勝手にその奥樣を求めやうとして爭ふのよ、オホヽ。』

『まあ。』

『美麗ね、姉さん。』

『えゝ。』

『私、あのまゝそつくり籠へ入れて持つてゆきたいわ。』と稚幼ないことを云ふので、二人はしたゝか笑はせられたのである。

すると遠くの方で男の子が。

『ほたーるの光までのーゆーき、
　文よむー月日重ねつゝー、
いつしか年も杉の戸をー、
　明けーてぞ今朝はわかれーゆくー。

と謡ひながら歸つて往くので、三人もやがて家路を心ざして。

（了）

裁縫

あや子

衣服改良、婦人服改正の聲は一時世人の耳を聾するばかりでありました、兩三年前には懸賞を以て其好案を募集する新聞社あり、着々實行にとりかかる學校などもありまして、此樣子で押行くならば、數年を出でずして、女流界に一大革新を見る事であらう、さすれば諸方に設立され居る所の裁

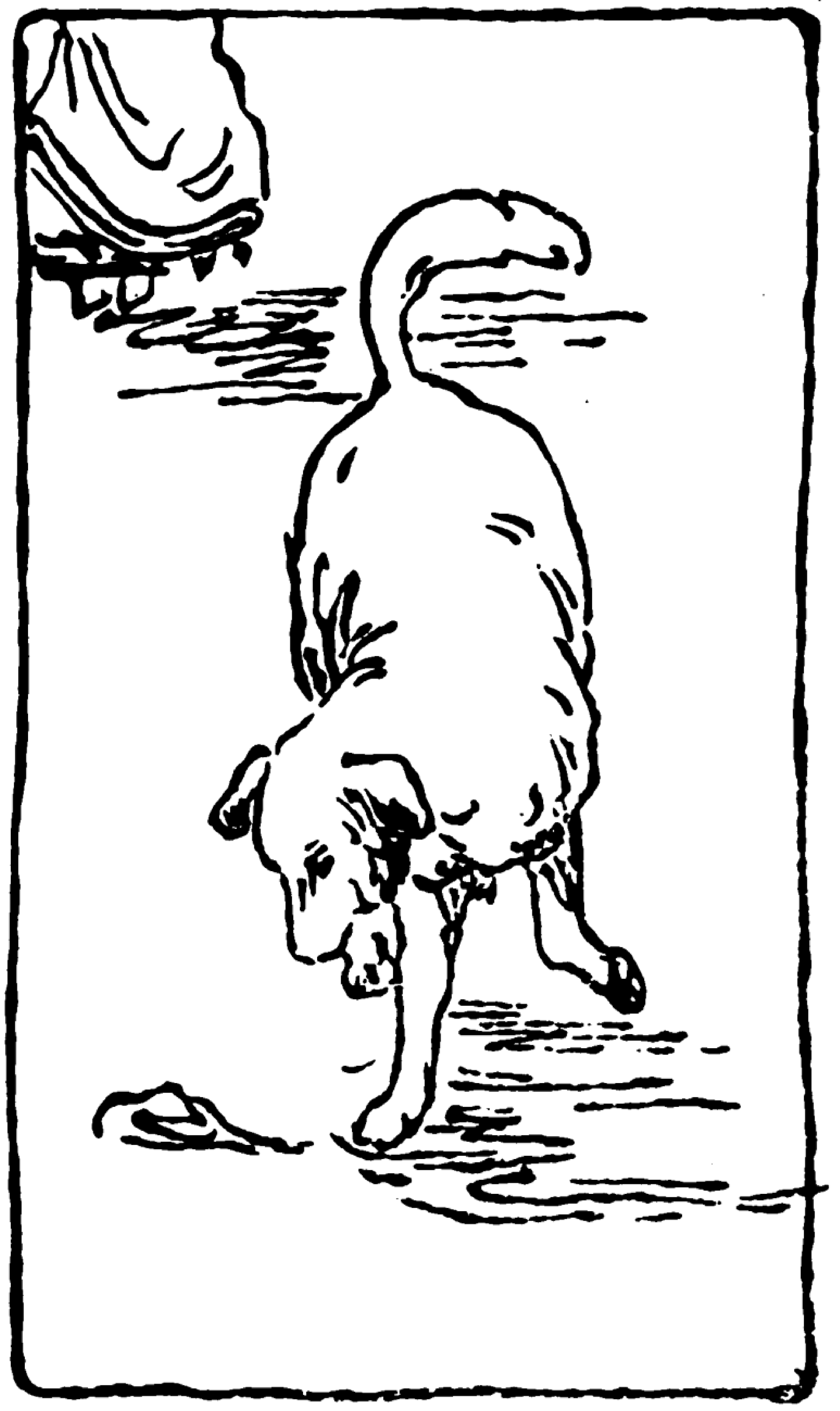
縫學校なども、大に其敎授法の面目を一新しなければなるまいと思ふやうでありました、然るにさしも高かりし聲も漸々うら枯て、次第〳〵に聞えずなりますと共に、折角實行をいそぎ居りました一部の學校なども、いつしか、舊態に復し終りまして、諸名稱の下に設けられつゝある、多くの裁縫學校は、依然舊式の和服裁縫のみなるにもかゝはらず、日一日と隆盛に向ふ有樣であります。

さらばと申して、衣服改良の必要はないか、在來の婦人服は、完全なものであるかと申すと、誰しも多少の異見を持たぬ者はなきやうであります、先づ衣裳と申す點よりするも、衛生上よりいふも到底多少の改良をしなければならぬやうでありますが、久しき歳月を經た舊慣と申すものは、容易に脱する事の出來ぬものであります。

改良と申す事は、申迄もない字の通りで、良き方に改めなければならぬものでありますが、扨年來の舊慣を見事破るべき新意匠には、諸方面より少しの欠隙もないやうになければ、到底實行を見る事は難いものであります、成程或點よりは改良の主旨に適ひて居るやうだが、また一方より見る時はいかにも不完全のそしりを免るゝ事の出來ぬ、といふやうでは、つまり實行は覺束ないのであります、衛生にもよく、輕壯、活潑にしてしかも優美になければなりませぬが、第一經濟の點に注意をしなければなりませぬ、在來の日本婦人服は隨分贅澤な事もありますが、仕立かへ染かへなどが自由に出來ますから、比較的經濟に出來て居るのであります、其長き袖、披きたる裾などは、最も改良家の非難する處でありますが、左程不體裁なものではありませぬ、尤亂暴に着、亂暴に歩めばこそ皮膚も現はるゝやうなもの、尋常の態度に

於きましては、さまでのものではありませぬ、或は日本婦人の不活潑なのは、第一衣服に起因するなど、申す御説も承りましたが、或はさやうな事もあるかしれませぬ、然し活潑も大抵程度のあるもので、精神上にこそ望ましきものですが、素行のあまりそれに過ぎましては、少しも女らしき優美の點のなきやうになりはすまいかと思はれます、餘り保守的の申しやうかもしれませぬが、其優美と申す點に於きましては、在來の日本服は餘り他に讓らないかと思はれます、尤も幅廣き帶を、胸高にしめる事などは衛生上宜敷ないかもしれませぬが、さればとて、西洋服のコセットを以て服部を固く攻め付くるもやはり宜敷はないと申すやうなもので一利一害は到底數のまぬがれぬのでありませう、當今の婦人服なども、極めて古くより行はれて居るかと申と、左樣ではありませぬ、上古より變遷に變遷して、遂に今日に及びましたので、今より顧れば全く似た形もないやうだと申てよろしき程であります、此變遷を重ねる内には、種々なる考案は多くの人によりてせられたものでありますから、帶なども廣くなり、狹くなり、また、丸ぐけとなり、平ぐけとなりまして、遂に今代の姿となりましたのでありますから、今とても猶大改革こそはなけれ流行として、多少の小變遷は、暫くもやむ時はありませぬ、此廣き帶なども衛生上にこそ彼是と申すもの丶、長き袖、披きたる裾には此帶に依りて調和の出來て居るのであります、其帶の結び樣など丶申すものは、實に甚しき變遷を經たものでありますが、近來では一般交通の便の開けた爲めでもありませうが、都鄙の別なく略一定して居ります、然し少しづ丶は常に變りつ丶あるので、彼帶揚を高く大きくして、なるべ

く大きく結ぶ事を愛でましたが、只今では帶揚などは殆ど用ゐやうな有樣となりまして、なるべく小さく、垂れを比較的長く結ぶ事が流行するやうであります、隨て自然幅も少しは狹く、普通七寸五分より八寸位迄にするやうであります、又帶眞などもなるべく厚からぬをよろこぶやうであります、地方によりましては、眞を一重にして、其れに小袖綿などを兩面にひきて用る處などもありますが、餘りよくありませぬ、やはり眞木綿は二重にして、眞綿のみを少しひきたる方がよろしい。



扨帶の仕立方は裁縫家のうちにても一の專門のやうになりて居りまして、隨分むづかしきものであります、其方法もいろ〳〵ありまして、並絎、一分絎、或は丸縫、割縫などさま〳〵にありますが、一分ぐけと申すは名の如くで、一分程の目になるべく糸の流れぬやう、くけ行くのであります、又丸縫と申は總丈の中央の處を、凡そ一尺程あけ置て、他を悉く縫ひ、眞をとぢ付けて後表へかへし、明け置きたる處をくけるので、此二樣は先づ普通の帶の仕立方であります。割縫と申すのは少し面倒ではありますが、繻珍とか厚板織とかの如き樣

機物ならば、其模樣は大抵は合ふやうに出來て居るものでありますから、布目を拾ふやうにして縫ふのであります、例へば博多織の如き緯の太き織物ならば、其ぬきの目を三つ進みて一つ退くといふ如くに、一針ぬきの返し縫にして、其縫目の引しまらぬやう注意をしつゝ縫ひ終らば、其縫目を左右に割りてよく〳〵、コテにてこかし猶其縫目の起き返らぬやう、兩側にかくしとぢを入るゝのであります、而して眞は普通の二重眞の如くせず、寸法を定めて、これを袋の如く輪にしてまづ一通り表に見えぬやう、隱しとぢを入れ、端より表にかへして、更にまた中より手を入れて、幾通りもかくしとぢを入るゝのであります、さすれば帶は眞と共に圓き筒の如きものとなりまして、必ずしも縫目を角とせずとも、くる〳〵とまはして結ぶ事が出來る爲め、其保ち方に至りましては、非常の相違があるものであります、而して其兩端は少し深く折り込むあらば、別段くけるにも及びませぬ。

總て帶の眞は表の幅よりひかへる事、凡そ一分半乃至二分にて、丈の方は表を正しく置きたまりのなきやうに下に伸べ置き、其上に眞をゆるく乘すれば、表よりは何程か長くなるものでありますが、それを適度と致すのであります、又片側物即ち腹合せ帶ならば、眞を含ませんとする側を、他の側より二分廣く縫ひます、かくして仕立上げたる時、適度よきやうになるのであります、猶伸縮多き質と、さらぬものとの合せ帶など假令へば、縮緬と繻子などの如きものに到りましては、大に手加減のあるものでありますが、到底文字の上に現しかねますから、よく〳〵總て前に述べたる如き心持を以て注意して仕立つるやうにしたいものです。

家庭料理

岡野知十

▲家庭と食肉

今日の家庭がどれほど肉食を用ゐて居ましようか、割烹講習に肉が課せられるといやな顔をなさる方が大分多い。支那料理課を開かうとして賛成が少なく、菓子科を開くには多數であつたのも事實である。支那料理には豚があるからでイヤとのわけであつた。

この頃麹町區のある小學校高等科一年級で教師の方が生徒にむかひ食味の質問をなされた。

教師『牛肉のすきな方は手をおあげなさい』

手をあげたものが二人であつた、

教師『豚のすきな方は手をおあげなさい。』

手をあげたのはたつたまへの二人のその片方の一人であッた。

教師『鷄のすきな方は手を』

首をかゝげながら半分ばかり手をあげたもの（左程熱心なすきとは見えぬ體）二十人ばかり。

教師『それでは牛乳をすきな方は手を』

全級一齊に勢ひよく手をあげた。

これは事實の事であります。牛乳をすきな子が牛肉をこのまぬとは不思議なはなしです。牛乳は大分普及して來たやうです。たゞ土鍋でわかすだけの事で小供の養ひに用ゐられるのでありましよう。しかし牛肉となると惣菜に用ゐられるのがまだ充分開けぬやうに見えます、ひとつは家の母が好まれぬ（一）と割烹の仕方が葱と煮るといふよりほかにはまだ用ゐられぬのと（二）さらに價

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

農學士田口晋吉著

米の經濟

(增訂再版出來)

菊判全一册

定價四拾五錢

郵税六錢

是れ空前の書

◉櫻花を賞し松柏を誇る本邦人にして未た曾て稻を歌はさるは遺憾の極みならずや本書は此要求に對へたる者その稻てふ一植物を捕へて彼が如何なる本性と歷史更に進で彼が如何なる活動をなしつゝあるかを發輝して些の遺憾なし流石は斯學に精通の聞えある田口農學士の著也▲由來米を食つて米を知らさる本邦人乞ふ只た一皿の美味を本書に更へよ

(本書目錄摘要)▲稻の語源▲稻の源産地▲稻の歷史▲稻作と氣候▲稻の種類▲米の收穫量▲米の化學的成分構造及品質▲米の用途▲世界に於ける米の供給國▲世界に於ける米の需要國▲本邦米産額及作付反別▲各國米の公評▲海外に於ける本邦米價格及其比較▲海外に於ける本邦米の位置▲同本邦米の改良策▲米國輸出額▲米價の大勢▲米價變動の原因▲近年に於ける米價騰貴▲外國米の輸入▲日本米の輸出▲米作田一反歩に對する生産費及收益▲米價騰貴と農民▲生産者と商人との關係▲農家の手を去りたる米穀價格の變動▲農家が米穀を賣出すことの最も多き期節及其價格▲防長米同業組合▲明治米價史慶長以來二百七十九年間の米價累年比較表

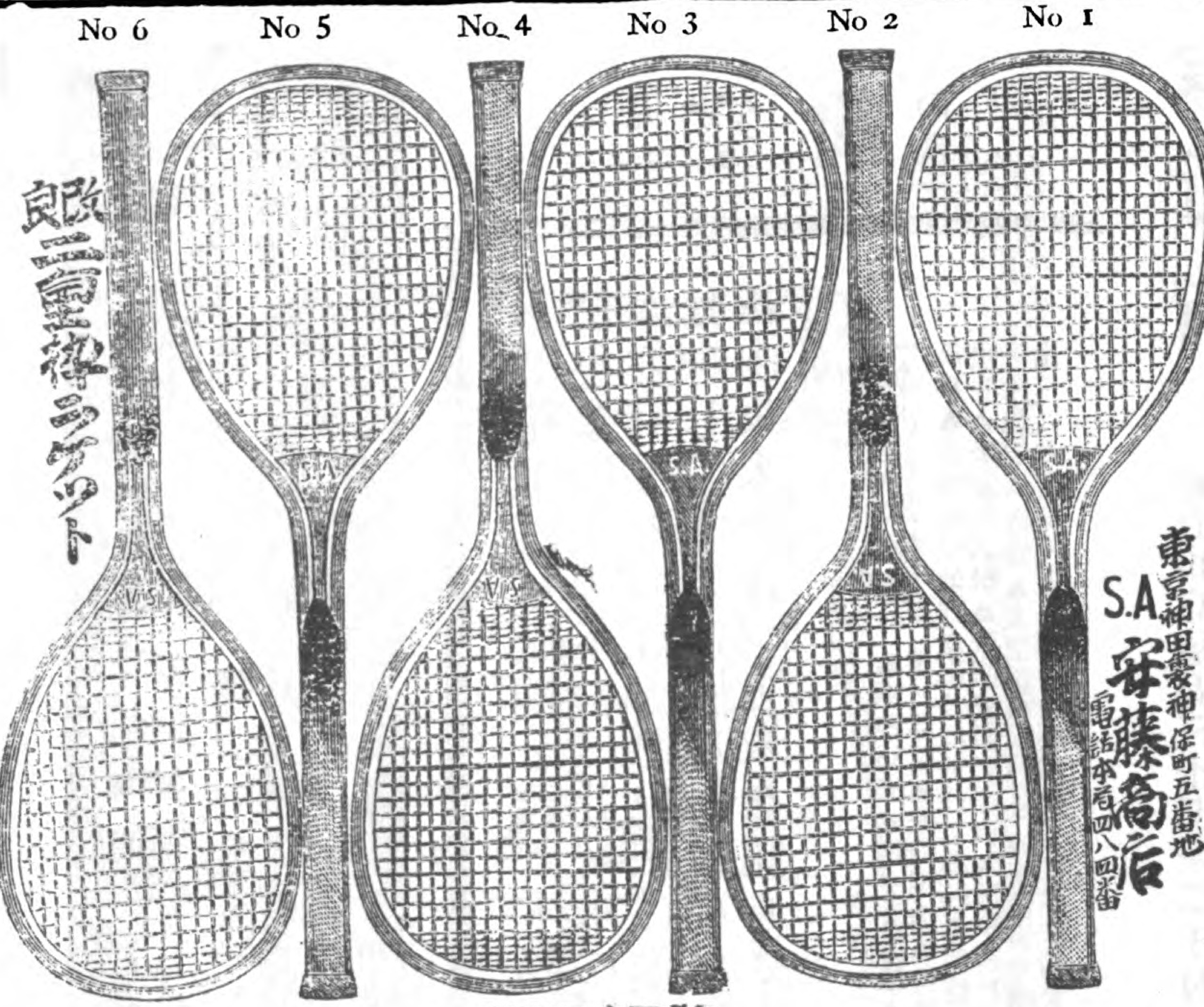
發行所

東京市京橋區三十間堀二丁目一番地

(電話新橋三六一六番)

大日本實業學會出版部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



諸學校用　体操器械

登錄商標

S.A.

安藤商店

改良二重枠ラケット

一號	四本	一三、五〇
二號	四本	一一、五〇
三號	四本	一〇、三〇
四號	四本	八、二〇
五號	四本	七、二〇
六號	四本	六、二〇
七號	四本	五、二五

普通二重枠ラケット

一號	四本	一三、〇〇
二號	四本	一一、二〇
三號	四本	九、八〇
四號	四本	七、四〇
五號	四本	六、七〇
六號	四本	五、七〇
七號	四本	四、七五

テニスネット

一號	長四間半 巾三尺五寸	一、七五
二號	長五間半 巾三尺五寸	二、三五
三號	長六間 巾三尺五寸	二、四五
四號	長七間 巾三尺五寸	二、九五

網張棒

上等	四點付	二、九〇
並等	三點付	一、五〇

最新形室内テニス

ラケット二本
ボール四ケ
ネット一張
網張棒二本
壹箱入 一四五

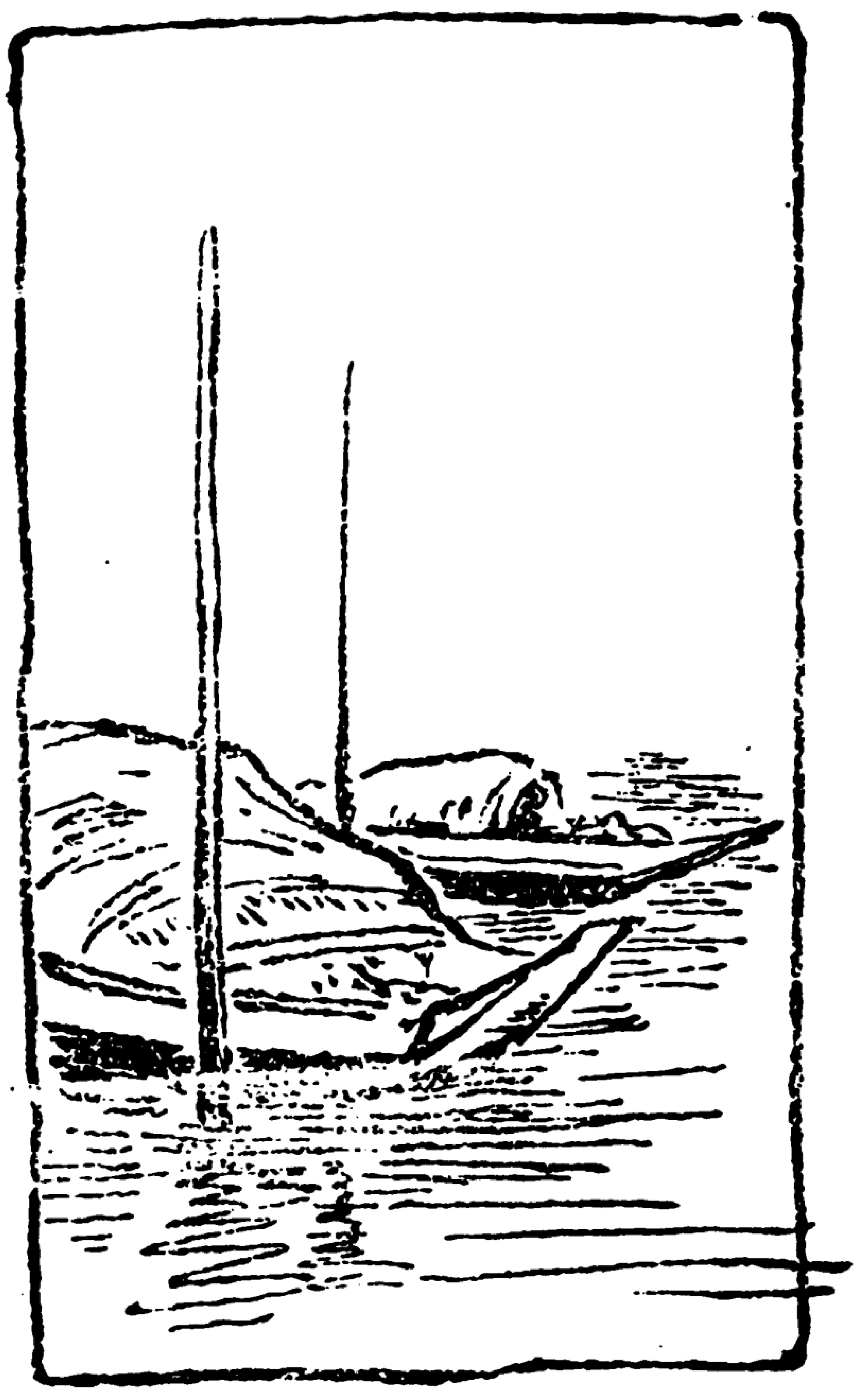
S.A. 電本局四八四 体操器械 遊戯品一切 東京神田 安藤商店

S.A. 電本局四八四 体操器械 遊戯品一切 東京神田 安藤商店

格が高い(三)もの丶様に思れるからでありましよう。

價格をいへば近來は魚とあまり違ひはありません、シチウ又はコロッケーの如きものにつくれば澤山出來ます、小供はよろこんで食ひます。たゞ葱と煮るからもの足らぬのです。コウして食なれると段々風味を覺えきらひであつた母もすきになるのです。惣菜として魚類よりも却て安いくらゐです。肴の樣に相場にくるひがありませんだけ、豫算がとり易いのです。

魚肉、菜食がわるいとはいひませぬ、各種とりあはすがよろしいが、しかし肉食も魚菜とおなじに家庭に用ゐられなければならぬ。それにはその割烹方を知るのがまづ必要なことでありましようと思ひます。



家の母、家の妻はひととほり簡易な調肉法に通ずる樣になさいまし、和洋とりませて二三種左にしるします。

▲コロッケイ

玉葱をきざみ、バタにて煎り、狐色になつたとき、牛肉をうすく切つて入れ、鹽、胡椒にて味をつけ置く。

別にジャガ薯をゆでつきくづし、バタと鷄卵のしろみと鹽、胡椒を加へて味をつけ、これをいくつ

にもわかち、まへの肉も同様にわくる、さて薯をてのひらへのせ饅頭をつくる様にならし、これにまへの肉をつゝみ、すこしながめに握り、メリケン粉へころがす、さて鷄卵の黄身（しろみは已に薯へまぜたり）に水少量を加へ、このときたるをまへのメリケン粉をつけし上に塗り、その上にパン粉をつけ、少時間冱きて落付しところを揚げる、油はヘット油をよく煮立て、その中に入れて揚げる。くづれぬやうにそッと新聞紙のうへにあける、油がきれよきためです。

牛肉百目にジャガ薯十個ぐらゐ、十人ほどに饗して十分であります。

▲鷄のスープ（附煮汁）

鷄肉百二十目をちひさく骨共にきり、水六合を入れ初めつよき火にかけると、滓が浮きあがるゆへ、これをすくひとり、それから米を大匙一抔入れ、あとはトロ火で四時間ぐらゐ煮て漉して塩にて味をつけ胡椒をふりて饗す。

これは西洋風のよきスープですが、日本料理の煮汁にも鷄の煮汁をつかふのがよろしうございます。鰹節は掻くのも手がかゝり、且うまくするにはよき節の一本もつかはなければならず。それよりは鷄の正肉をきり身にして、たぎり湯の中へ入れこれを布にて漉せばぎろ〳〵した油もなく、煮汁に用ゐて上等であります、碗の煮汁に用ゐてよろしうござゐます。

▲シチウ

まへのスープをとつたあとの肉を細にきり、さて別に玉葱細々とバタで煎り、葱の香しき匂ひの立つたとき、メリケン粉を入れ、スープ乃至水をくはへて薄葛ほどに煉り、これへまへのきざんだ鳥を入れ、ほかに、ニンジン、カブラ、ジヤガイモ

などゆで〻加へ三時間も煮る、鹽、胡椒にて味をつける。いそぐときは三十分ぐらゐ。

上等にはハムをうすくきつて一人前二片ぐらゐ入れゝば尙よろしい。が家庭にはそれにはおよばない。

▲ドラ煮

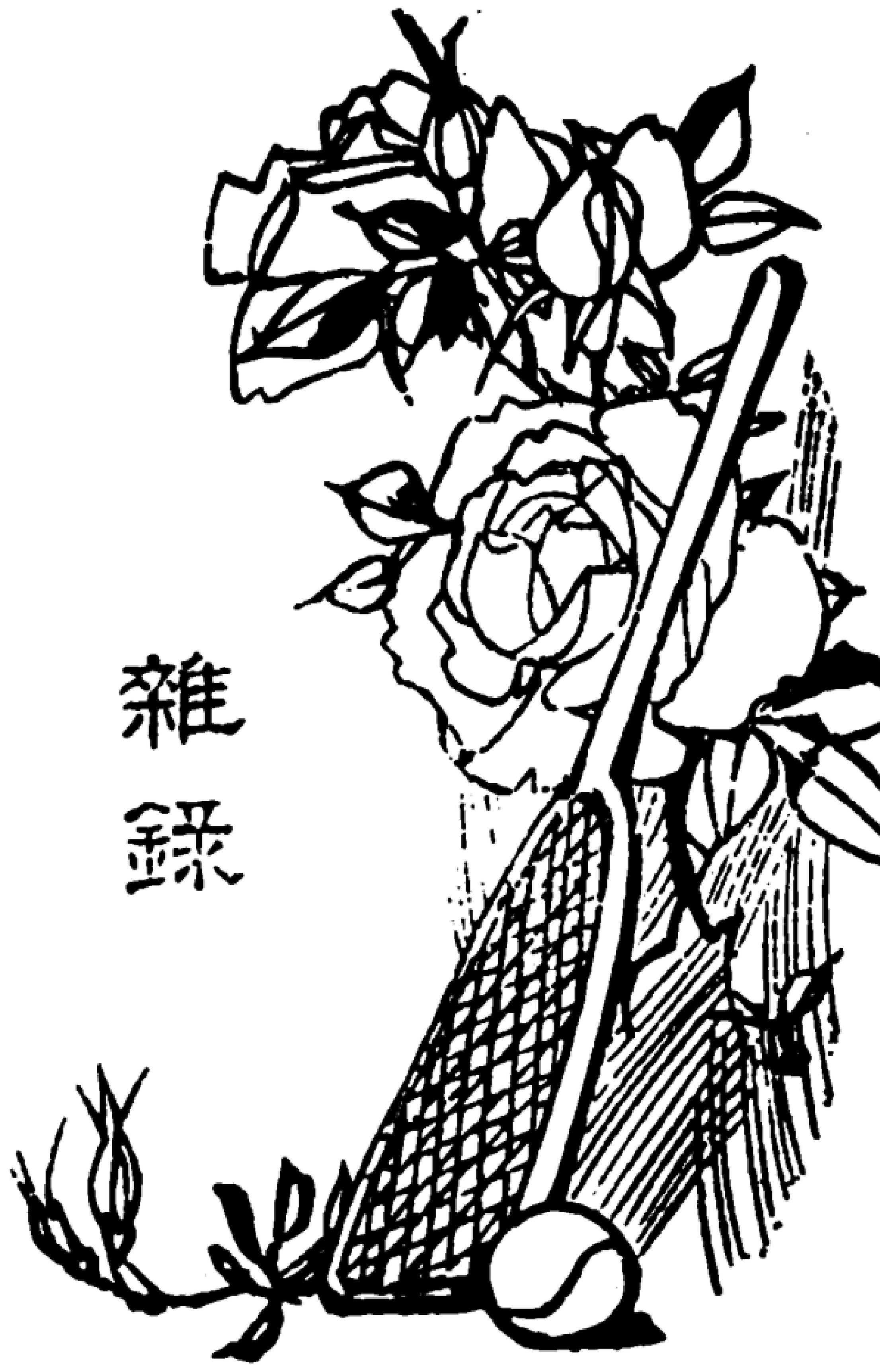
これは和洋折衷です。牛肉一斤に豚半斤加へよくたゝき摺りて、鹽、醤油、生酒、味醂、砂糖を加へ、饅頭形につくり、兩面を油にて燒きさて鍋に煮笊を入れ、右饅頭につくりし肉をこの中にうつが、鰹節汁、生酒、味醂、醤油等を加へて煮る、煮あつたとき皿にわけ、のこりの汁へ別に饂飩粉を水によく解、き之を加へどろ〳〵にして煮あげた肉の上にかけてすゝむ。

▲葛餅

葛餅は茶碗に葛一杯、砂糖一杯、水二杯の割合で解き、毛水嚢で漉し、火にかけてまづ半練にします、この半がへりの葛を適宜にまるめ、蒸籠に濡布巾をしき、その上にならべてむせば葛餅です。

これに餡を入れ、葛饅頭に作るには前記わり合の水を三杯にします、丸くするには手加減ひとつです、素人には柏餅形につくるのがよろしくござゐます。





雜錄

名婦の墳墓

内田茂文

伊達家の老女淺岡（本名は三澤初子）

淺岡の經歷は、史に傳に小說に戯曲に傳えられて人の能く知る所なり。墓は府下荏原郡中目黒村日蓮宗正覺寺に在り。墓石は五輪塔にて上に妙法蓮華經の五字を刻し、正面には淺岡の法名なる淨眼院殿了嶽日殿大姉を三行に刻して左の如く記せり

了嶽日殿
淨眼院殿
大姉淑靈

寺僧の傳ふる所に依れば、淺岡は貞享三年二月四日此地に沒すといふ。四五年前に淺岡が兩親の墳墓をも地中より堀出せり。

春日局

春日局が寛永二十二年九月廿四日卒して、麟祥院に葬られたる事は歷史の示す所なり。墓は同院本堂の左方土藏の内に存立せる、五輪の塔、即ち是れなり。法名を麟祥院了儀大姉と云ふ。同院は元報恩山天澤寺と云ひしを局の緣故に依りて寛永年中天澤山麟祥院と改稱せり。

烈女阿薩

阿薩は毛利家の臣、松田助七の女なり。彼が嘗て

仕ふる所の主君の爲め、不倶戴天の復讐を演じたる事は、坊間これを鏡山のお初と稱して演劇小説に傳へられて人口に膾炙す。而も彼が墳墓の地の詳かならず。世俗傳へ言ふ、牛込區通寺町獅子寺に鏡山お初の墓ありと、余、行きて之を掃ふ。墓石の正面に至恩了厚大姉と刻し、背面には梶原氏列女之墓と刻し右の側面には「若州家士山口次兵衛重遠妻梶原太郎左衞門正武女」左の側面には「安永九年庚子五月十日終享年四十」これを稱して阿薩の墓なりと言ふは恐らく誤傳なるべし。牛山復讐錄には阿薩が事を記す詳かなるが同書に左の文あり。

世傳フ牛籠保善寺、有二阿薩之墓一、余嘗テ訪レ之、則無レ有也、質ニ之ヲ寺僧及ヒ故老習レ事者一、或曰、初無レ有レ墓、蓋シ出二於謬傳一也、或曰昔者實ニ有レ墓、而今乃亡矣、或曰、百年之久遂失二其所在一耳、蓋シ其詳不レ可ニ得テ而知一、然阿薩之忠烈、豈可下以二墳墓之存否一爲中顯晦上者哉、云々

是に依て之を考ふれば世俗傳ふる所の獅子寺なるお薩の墓は益々その信ずべからざるを知るべし。

經濟と婦人

天風生

◎經濟と一口に云へば、大分やかましい問題の樣です、やれ、日本は經濟上危急存亡の地位にあるとか、或は、國の大根本は經濟上の强固なる土臺の上に置かねばならぬとか云ひて、いかにも政治家や實業家や、乃至は學者ならねば、口も出す事が出來ぬ樣な鹽梅です。

◎成程之は難かしい事には違ひがありません、だが、一歩退いて靜かに考へて見たなら、之れは只

雜錄

政治家や實業家のみの問題ではありません、確かに、現日本を經濟上に發達させる鑰は、婦人方が其半を有して居るのだと考へます。

◎隨分と、古へよりは、婦人方で豪い事業をなして國を富ませた人もあります、又職業の或種類は全く婦人方によりて獨占されたのもあります、然し私は、此樣な事は後にして、今、最も大切なる、又最も適切なる、且つ婦人の天職とすべき事に就て、御話したいと思ひます。

◎凡そ經濟の上で、直接に、富といふ事に、何が最も重要なる關係を爲して居るかと云へば、誰でもすぐに答へるでしよう、其は富を造り出す事と富を費ひやすといふ事の二つであると、此造り出だすといふ事は、經濟學でも生產と申し、費す事は、消費と申して居ります。

◎此造り出すといふ事に付ても、或は紡績とか或は生糸とか、皆婦人方によりて重もに造られるのです、然し此方面に於ては、婦人はどうしても男子に其勢力を讓らねばなりません、だが此造り出すといふ事よりも、猶一層、人間に直接の影響を與へ、且つ國家の經濟を整へる事は、富を費す方法即ち消費の方法であります。

◎婦人方は、實に此消費の方法といふ事には、殆ど全權を握つて居られるのです、即ち國家の經濟の半分を握つて居られるのです。

◎何處の家庭でも、其家族の衣服を見はからふたり、其食物を監督してるのは、男子でしようか、否、否、其は婦人方です、而して此等の事は、即ち一家に於ける支出の大部分ではありませんか、所謂之れが消費の大部分といふても差支はありますまい、然らば家を集めた國家の消費の大部分は亦婦人方の監督の下にあるといふ事が出來ます

◎無駄な消費を止めて、有益な消費をなし、且つ餘裕があるなら貯蓄する、然らば國家から、少し位な税をだせと云はれても、少しも困る事がない、かくすれば、國防も充實する、軍艦も増加する、世界を相手どりて、戰爭しても困難はしない、嗚呼婦人方の國家に勢力ある、實に驚くべきではありますまいか。

◎抑も、富を造りだすのは、何の爲めであるか其れは人間の慾望を滿足させんが爲めである、かゝる事は三歳の兒童でも知つてる事でしよう、然らば其慾望を滿足させるのには、如何したら宜しいでしよう、とりも直さず、富を費すといふ事によりて行はれるのです即ち消費によるのであります、ですから、之れを裏から見れば、物をつかう爲めに、物を造り出すのです。猶は一歩進めていへば、婦人方の監督によりて、甘く費ひやして貰いたい爲めに、種々な物を造らんとして働くのは男子なのです。



◎之れで、消費といふ事の觀念は、大體了解が出來たと思ひますが、以上の事から、すぐに消費の方法は、如何にせば最もよいかと、いふ事も判然するだろうと思ひます、

◎英吉利の經濟學者が、餘り富を造り出す事にのみ重きを置いて、之を使ふ人間を忘れた樣になつたので獨逸の學者は、之れを辨難して、今では人間といふ事に、非常に重きを置く樣になりました、随て消費といふ事も、大層よく研究されました序でゞすが、英吉利の經濟學者のホーセットといふ人は盲目で、此人の夫人が、常に夫の事業を助けて著述をさせ、且つ夫の死後、自分も有名な經濟學の著述をした事蹟があります、又ミルと云ふ大經濟學者の娘も、却々の經濟學者でした、英國の勞働者の會の發會式にも、同主義の人として、經濟學上の氣焔を吐いた樣です、又女權擴張論者の一人です、之れはほんの附録として申上げるのです。

◎扨て本題に立ち返つて、如何なる消費の方法がよいかと申すに、其は種々の難かしい議論もありますが、私は獨乙のホーワレンダー先生、若くは以太利のコッサ先生など丶同じ樣に、消費の觀念は、常に道德の觀念と伴ふべきものである、無駄な消費は不道德である、不道德な消費は、無駄な消費であると斷言するのに憚りません。

◎貧乏人の娘が、余り立派な扮裝をすれば、人が其背後から指をさして惡口を云ひませう、其は何んの爲めでせう、其立派な扮裝をすると云ふ事、並びに、かくの如くする目的が、不道德といふ事を包むからではありますまいか、凡ての事が、此例と同じ事であります。

◎昔し羅馬の滅びる前に、其人民は悉く無益の

遊に耽り、無益の裝飾を喜びました、カトーといふ政治家は、涙を呑んで、其滅亡の近きにゐるを豫言しました。案の如く、世界第一の强國も、敢へなく、北より來る野蠻人どもに落花微塵と蹂躙されました、之れ疑もなく、無駄な消費が結果したのではありませんか、此に至りて、無駄な消費は人間最大の惡と云ふても宜しいと思ひます。

◎然らば如何にせば有益な消費と云ふことが出來るか此問に答へるのは、譯もない事である。

◎身分相應な消費をしろといふ事が、第一であります、經濟學では、之を地位的慾望に對する消費と申します「分をまもれ」、之れ道德の命ずる處なるのみならず、經濟の要求する所でありまする。

◎又家族の健康といふ事に氣を付けて、無益有害なる食物、即ち菓子類の如きを減少して、有益美味なる食物を選ぶ事も大事でしよう、又被服に就いても、なるべく質樸の習慣を造る爲めに、絹布を避けて綿布にするのもいゝでしよう、之等は皆婦人方の注意と技倆の如何にある事と思ひます。

◎要は、不道德な消費と、身分不相應な消費を避けて、有益なる消費をする樣に注意する事であります。かくすれば貯蓄も出來、且つ國家の經濟も安固となる事が出來ます、嗚呼善良なる婦人は、實に國家の美なる天使といふべきであります。

東のたより

笠木鶯里

昨日けふとおもひし御わかれも、はや指なりかゞなふるばかりになり、空にたちまよふ雲のけしき木末を拂ふ風の音、さては西にかたぶく月のかげにつけ、なつかしき御身の、今頃はいかにますらん、相もかはらで御すこやかに、わたらせられ、學びやの千草の花のあせぬ色香にたちまじり、長閑けく安らけく暮したまふらんか。

あはれ過ぎつる日、行く水のかへらぬ大野川の渡頭にて、あかね

御わかれをなし侍りて、ゆめうつゝに馬車に乘れば、くさ〴〵の妄念胸にうかび、とゞめがたきに、やがて故里のかたへすぐるほどとて、菩提寺、鎭守の神、さては母の御墓、わが家なむど、心のうちに伏し拜み、ゆるされよ不孝の罪、まさきくゐませはらからよ、三とせの後には、目出度御目にかゝらんずらん。とはいひながら、三百里の海山を越ゐ、知らぬ他國にたゞひとり、うき辛酸をなめつくさむとする心の裡、嗚呼また誰れかあはれまむ。思ひに堪ゐで衝きかくる涙を嚙みしめ、凝乎と見やれど山物いはず水語らず、乘り合ひの人々はしきりに面白げに笑ひ興じ、心なき御者はいたづらに馬を叱してとく驅するのみ、あゝ此の時のわがこゝろの中御惻察をこそ願はしくはべれ。

油布山颪雨を送つて、波の音轄々と鳴りひゞき、物音すさまじき夕まぐれ、孤影蕭然船に乘りはべりぬ、陸のかたあるは通船の中ともしびふり照らして、御心つけられよ、さきくあれよと、名ごりをしげにいひのゝしるは、誰を送りの垂乳根がはらからと見ゆるにつけ、あゝ我もかくありなば如何ばかりなど、おもひめぐらせば、おのづから泪催ふさるゝにゐたへで、甲板より降り、船室の片隅、衣ひきかつぎ、さめ〴〵となきけるも、またなきあはれにぞはべる。



ほの〴〵と明けゆく豊後灘の景色、力なきうすあはき殘んの月、波にかたむけば、漁火ひとつまた一つ消ゐゆきて、夜の神は名も知らぬ島々、さては豫州の山々をおぼろげに殘しおき、靜々といづこをさしてか舞ひのぼれば、怪しの岬のはしより紅雲一帶のとばりをかゝげ黄金の涙の滌をいでゝ、朝の神は花やかに、見送るなんど、げに言の葉もおよばずなむ。海士がたくやの鹽烟、いたづらに、胸を焦し、沖の鷗にうき渉をかたらひ、消ゆる帆かげの後をおひ、島の明神に手向をなし、琴平の社をはるかに伏し拜み屋島の浦に源平の昔をしのび、淡路島といふにかよふ千鳥と眠じけむ、歌もおもひ出でられて、波のうきれの楫枕、汐垂衣きるにわびし。

かくて次ぎの朝、神戸の津に上陸し、汽車に搭じて、住吉の松のこかげをたどり、ちぬの浦曲を折れめぐり、蘆の葉のさはりもしげき浪華の津は、我が身のこゝちせられ西の都といふに、はや東のみやこの思はれつ、關が原にむかしの跡を弔らひ、鳴海潟にては古歌の句に心ときめき、清見三保の松原は、うたて夜なりしかば、そことも知らで、箱根の山中にあかつきの鳥をきゝぬれど、惜しや雨雲たなびきて富士は見ゑず、大磯小磯は心をくだく波の音のみきゝつ、横濱にては外つ國のおもひをなし、鈴が森の松のこずゑを眺めつゝ、ありしひまに、いつか幾久しく思ひ絶ゑざりし鳥が鳴く東の都にこそ着きはべりぬ。

ふるき友などおとづれて、すぎこしかたや身の行くすゑなど、かたみに物語るも、またあはれにこそ、上野の月、隅田のながれ、こゝ暫くは旅の心を慰めんやうもなかりき。

それにつけても、いよ〳〵なつかしく、したはしき御身のことのみ、おもひいでられ、夜な〳〵ゆめもやすからで、妻戸をもるる風のこゑ、軒端をめぐる雨のおと、いづれか心まよはざる、あはれ、辛き浮世の波風つれなく吹きあれて、玉の如く花のごとき乙女をして、孝と貞との巷に泣かしめ、たづきも知らぬ大海原にたゞひとりたゞよはすることの、さてもいたましさよ。

然りながら今更いふもせんなきことなれば、たゞ〳〵御こゝろ靜かに、すこやかにわたらせられ、今日より樂しきあすの日と、末久しく御くらしあそばされんことこそ、願はしくはべれ。なみだは身の藥にはさふらはず。

叶ふべきことならば、いくひさしくも御かたはらにはんべり、落つる泪を我が袖もて御ぬぐひまゐらせたくはゝべれど、心にまかせぬは世のならひ恨めしき限りにこそ。

まづはせめてもの思やりに旅路のありさま、御しらせ申さんとおとやさきなる亂れし水くきのあともて、かくなむきこゑはべる、

文字の讀方に就て

林　恒　山

文字の讀方は近頃痛く亂れて新聞や雜誌などに間違多き事は一々數へ切れぬ程なるが左まで八ケ間敷いふ程の事でもなく今更覺えぬとても濟むかも知れねど普通の文字の讀方位は覺えて居た方が宜しからうと思ふ特に婦人の嗜みとして一應心得て置く必要がある兎角婦人は僞字を用ゐる習慣があつて手紙などを見ると思はず噴飯する事が少くない夫れかと言つて餘り漢語めいた言葉ばかり並べ

雜錄

るのも感心はしないが普通の事をサラ〳〵と文字の誤も無く書下したのは奥床しい此頃童子門といふ書を見たるに初學の心得となるべき事多ければ其中より抄出し之に予の氣附きたる所をも加へて左に記すことゝした。

一、文字の意味によりて音の違ふ事

文字の意味により同一文字にて音の違ふ場合が澤山ある貿易とカヘルといふ意味の時はエキと讀むも容易とヤスイといふ意味の時はヰの音となる音樂といふ時もガクと讀めど好樂、逸樂などタノシムといふ時にはラクと讀まねばならぬ今音を違へて讀むべきものを擧ぐれば、

說(トキツケル)　避(サクル)　賈(アキンド)
著(ツク又キル)　覺(サメル)　畜(ヤシナフ)
藉(シク又カル)　耆(タシム)　數(カゾフル)
積(ツミタクハフ)　識(シルス)　暴(サラス)
乾(ホス又カワク)　惡(ニクム)　度(ハカル)
作(ナス又シハザ)　內(イルヽ)　還(メグル)
見(マミユル又アラハル)　畜(カヒオクコト)
食(メシ又ヤシナフ)　刺(サス)　炙(アブル)
數(シバシバ)　帥(ヒキユル)　齊(モノヰミ)
咽(ムセブ)　質(ニエ)　差(シナ)　殺(ソグ)
覆(オヽフ)　足(タス)　出(ダス)　景(カゲ)
抵(イタル)　亡(ナシ)　復(マタ)　射(イル)
溺(イバリ)　植(タツ)　適(ユク)　戲(アヽ)
假(イタル)　麗(ツク)　罷(ヤム)　副(ソフ)

此外伯と讀むは覇に同じく將率、句讀、齊衰など尚多し。

二　文字の形相似て誤り易き事

文字の形相似て誤り易きを魯魚焉馬の誤といふ此相似たる文字は至つて多けれど數々見るものを擧ぐれば、

己已巳　旦且　毋母　穴冗　易昜　亨享　宜宣
教執　詰詰　肓盲　祖祖　荼茶　戍戌　崇祟・
簞箪　褁裹　啄喙　析柝　晝畫　羸贏羸

三　文字の用ゐ方

文字の用ゐ方により音の違ふ事あり其時限りの讀み方あり人名地名などに多く又熟字にもあり殊に我邦の歷史地理には此類少くない今其一斑を擧ぐれば



皐陶（堯舜の時の名臣）　契（同）
妺喜（夏桀の愛女）　嫫母（古の婉女）
羅茷、鉏麑、蛾析（以上人名左傳）
酈食其、金日磾、曹大家（以上人名支那）
盟津、松江、澠池、契丹、突厥（以上地名支那）
從容、轃矜、冐絮、泛駕、驟雨、糊塗、孟浪、杜撰、矛盾、落魄、稱讚、賑給、樂府、茏茸、欸乃（アイダイと讀むべしとの說あり）下三連、天倪　沾々（以上熟字）
朝臣　宿禰　忌寸、村主、首、造、連、博士、按察使、檢非違使、根津守、東市正・右兵衛、少輔、縫殿助、（以上姓及び官職）

冷泉、松浦、正親町、談天門、郁芳門、弘徽殿

（以上地名及建物）

此外檢非違使椽を判官といふが如き我歷史上には固有の讀方あり又春宮をトウグウと讀むが如きは我官名の特種と言つてよい此外地方などを擧ぐれば際限がないから畧すとする。

四　文字の讀み誤り易きものある事

俗に田舍讀といつて文字の形によりて東から棟、同の音から桐と讀むが如く推量して讀めば大抵は當るものなり併し之が爲め誤るものもある其一斑を擧ぐれば、

揣摩、洒落、冤罪、懶惰、睚眦、稻穗、馬嘶、
謫遷、兵燹、棹尾、砧杵、睥睨、指嗾、嘲罵、
芟除、脆弱、褪色、捻髭、倜儻、培塿、兆域、
齠齔、翁媼、磔刑、頭髻、穿鞋、洗滌、覿面、
忌諱、汜濫、瀑布、肇始、乾涸、炊烟、貧臨

彼の行宮、行在、行燈、行脚などアンと讀むは宋音だといふ說がある禪僧の宋代に彼邦に往きて傳へたるものであらう。

五、和字和讀といふものある事

支那に無くつて我邦で造り出した文字がある之を和字といつて今日普通に使用されて居る

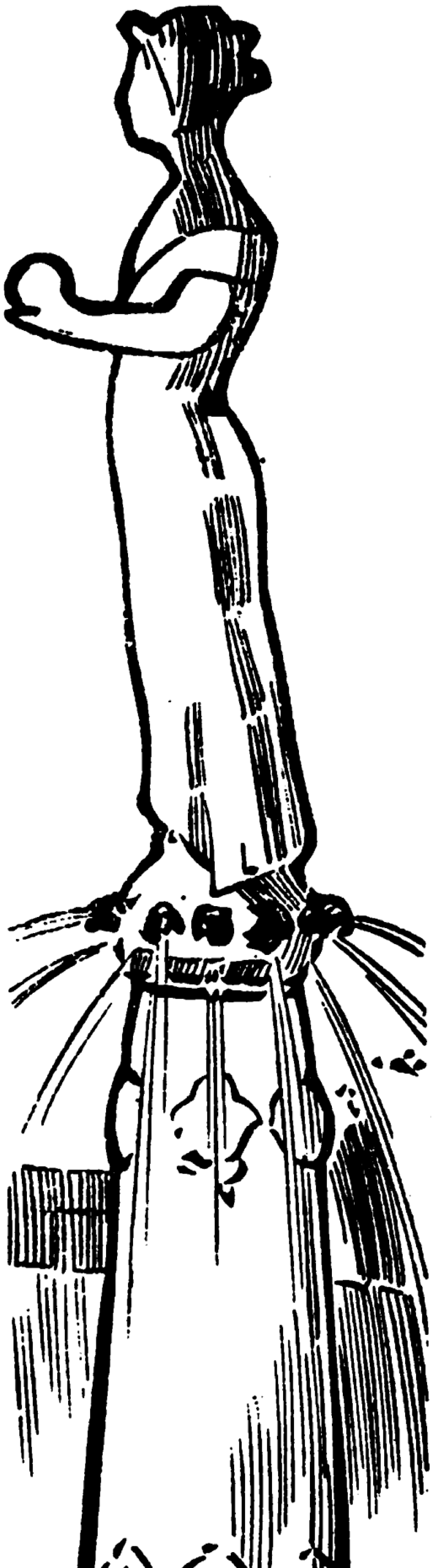
榊、鑓、裃、辻、畠、圦、峠、雫、颪、凩、梶、
扨、軈、遉、遖、躾、俤、迚、掟、込、閊、

此等尙は多く又支那になき意義の訓にて漢字を讀むものもある。

存、兼、嗜、誂、詰、給、令、揃、觸、忰、俵、

此等は漢字の音訓により他の意義にして同一若くは似よりたる詞に當てはめたるものなれど存には心得居る或は思ふの意なく兼には豫めの意なきも書簡文に存候又詩歌などの兼題等の如く使用の久しき怪しむものなきに至つたのである。

六　音訓とを連ねて讀むものある事
熟字に音と訓とを連ねて讀むは如何にも不都合にて天地をアマチ日月をヒゲッとは讀めぬ理屈なれど最早習慣の久しき一向怪しまぬのみならず却つて斯く讀まねばならぬやうにおつて居る
　不樣、不似合、日月、出立、結納
七　人名書名等に讀來りのものある事
支那の人名にて讀來りのものは
　煬帝、鄭玄、皇侃、孔穎達、杜子美、陳子昂
支那の書名及び篇題にては多くは呉音にて
　孝經、詩經、周禮、禮記、公羊傳、淮南子
　貞觀政要、通鑑、文獻通考、檀弓、月令、
併し八佾はハチイッとは讀まず衞靈公もエイノレイクとは讀まずして斯く漢音にて讀み來りたるものもあり
八　上の字音により下の字音の轉ずる事
上の字音により下の字音の轉ずるを連聲といひ我邦の言葉には此例頗る多し今漢語により其例を擧ぐれば
　文王武王といつて武王とはいはぬ
　妙音觀音といつて妙音とはいはぬ
　元和、天和、三位、親愛、云々、出來
　東方、西方といつて南方北方といひ
　二百、三百といひ一百といひ六百といふ（此一は漢音にてイチといはず六の如きは下の音によりて上の音の轉じたるものなり）
斯る文字の讀方に就き尚はいふべき事は多いが餘り長くなるから又折を見てとして今は此に止むる事としやう。



大阪 博覧會見物

水主青眼

千紫萬紅といつても猶は遙かに形容の不足を感ずる程であるから、三府、四十餘縣から集まつた名産や、名物を記さうとすれば、品物附丈けでも、二十頁や、三十頁、の紙上には塡らない位のものである开でクダ々々しい事は一切省略して小走りに工業館から美術館を素通りすると思召せ。

工業館

入口を這入ると、光彩赫奕として、陳列されて居るのが、絹絲織物、友仙帶地であつて、婦人連中には尤も目の着き易いものであるから、老たると、若きとを問はず、浮かり立留つて見とれて居らるゝ方が多い、さて館門扉の左右には紅白紫紅の旗を釣下げて、新潟、栃木、岐阜、大分、岡山、愛知、山形

群馬など各劣らじと意匠を凝らして飾り立てゝ居る間に、或は蝶々、或は島田、或は束髪などで、白襟紋附とか、例の蝦茶又は紫の袴とか、それ〴〵頭髪に相應した服を被て居る可愛らしい（勿論可愛らしくないのもある）、年頃の看守婦人が、厚化粧の口紅赤く、其處此處に控へて居るので、場内の光景も一層引立ちて見ゆると思はれる、見上れば、群馬縣と大書したる門内の正面に當り、金地の大衝立籠花いけには椿と猫柳とを挿て、姿見の大鏡を立てた前に、花の顔、柳の腰、芳紀三五の令孃が、盛飾して文金島田に立たれて其傍に四五歳位の可愛い小兒を拉れて居る、此の活人形は、婦人計りでない男子の目にも能く留まるのである、此の美人に引込まれて、序でに見らるゝのが、群馬の今野某の糸織大島（代價五六圓）で、それとは正反對に、美人の爲めに光を失うて、大概の人に見落さるゝのは、たゞ白いとばかり見ゆる宮城縣の輕目羽二重などである。

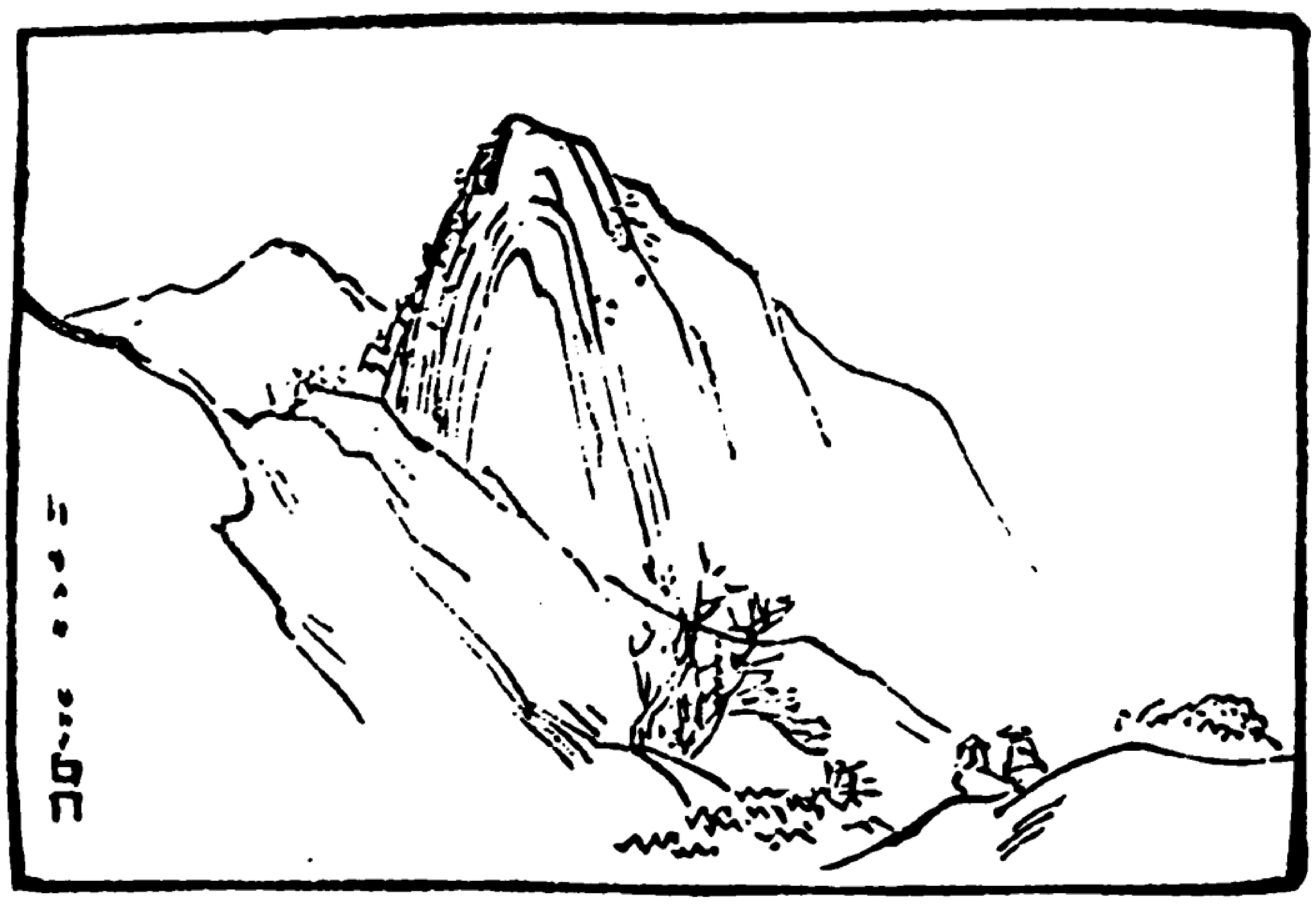
それから幾廻りして、紫式部に扮裝せた生人形の控へて居る處に出て、右に折れると舞臺は全く變つて、醬油の陳列場となるので、鹽辛い顔をして遁るやうに通つて、愛知縣の門に入ると、金色の大瓢簞の下に、千成瓢簞が四方八方に生えて居て、全で瓢簞簞飛沫を見るやうであるのに、その傍に備えてある蓄音機からは、嚠喨たる音樂を奏でるから、誰れも暫時は立留らざるを得ない。その横側には、花簪や、香水が、如何にも見事に飾り立てゝ、女子供を嬉しがらせる、次は南無阿彌陀佛の佛壇、次は名古屋美人を標本としたうつくしい〳〵生人形を挿んで盆提燈が吊してあるので、生者必滅諸行無常の理を示した樣な思がして、お可笑く感ずる。それから奈良縣に入ると奇麗な朱塗物がある。東京金工

雜錄

協會の出品には、金の指輪に、最上等の帶留、女持の金鎖などが、サア〳〵早く買つて下さいと言つて居るから、婦人連中の物思はし氣に立留つて居るも強ち無理とは云ふべからずである。京都洋服商組合の硝子の中には、首のないフロックコートが十四五許も並んで居て、氣味が惡い心持がするが、京都人形陳列塲に來ると、派手で高等な黒縮緬裾模樣の着物を着た女人形が立つて居るので、誰れでも見ぼれがする。兵庫縣出品の緋絨の鎧は華麗であつて、昔の若武者に擐せて見たいと思ふ心が起る。その下に黒ん坊が箱の中からあらはれて、西瓜を喰つたり、煙草を呑むだりする自動人形といふ一寸面白い玩具があるので、見物人が自づと群がつて居る。

館内の左の突當りの東京府出品塲に行くと、白木屋呉服店の陳列に縮緬の長襦袢がある。松の大木に一羽の蟬が止つて居る處を、草鞋脚絆の木葉天狗が、密と後から蟬を掴まうとして居る圖案であつて、染具合、地具合もよく出來て居るから、婦人としては見遁すことの出來ない品物である。次の名古屋の部には、流石に有松絞りの出品が多い。安藤某の繡潰見送り一枚八十圓といふのは、竹の中に二羽の白鶴が歩行して居るところであつて、出來上りも先づ上等と見受けらるゝ。水谷某の改良友禪鹽瀬羽二重織四枚屛風(代百八十圓)は下繪が松の下に雌雄の鷄が雛を伴れて遊んで居るところで、圖案には非難すべき點はあるが、兎に角引立つて見ゆる。歩を移して大阪府に入ると、立派な休憩所を設けて、正面に姿見の大鏡、前に圓卓を並べて有るのは、堺の段通組合である。京都府の陳列塲に行くと、六百五十圓と銘打つて、松林の月を描いた天鵞絨友禪の屛風を始め、四枚折の刺繡屛風、波間の鷲(八百圓)壁

かけ刺繡秋景瀧の圖（千六百圓）など其他高價の品が甚だ多いので、大概な人はたゞ其の價格表を見て驚かざるを得ない。



美術館

美術とはいふもの丶本館に陳列されてあるのは、純美術品ではなくて美術工藝品である。則ち金工、漆工、陶器七寶玻璃類、染織刺繡類、製版印刷及寫眞類等であつて、中には工業館の陳列品と紛ふものが少なくない。

染織刺繡物は、種々あるが、工業館で見て來たものと、餘り變化がない樣であるか、らそれは省略して、日本畫と、油繪と、彫塑物とを少少見ることにしやう。

寺崎廣業氏の瀧口横笛は、世間に名高い丈けの價値がある、瀧口入道の品格が、武士の名殘を留めないのが缺點であるといふ人もあるが、世を棄てた人としては、先づこんなものであらうと思はるゝ。尾竹國觀氏の夜陣の景は、松明の火焰と、周圍との反射とに注意が周到して居て、如何にも凄涼の思がする。橋本雅邦氏の瀟湘八景は、世間に定評のある作品であるが、畫題が風塵を脫して居るので、着想もまた

全く世俗の外に逸出して居る樣に見受けられた。何しろ傑出した逸品に相違ない。其他竹内栖鳳氏の古城趾、林琴石氏の春秋二景、高島北海氏の夏山雨景、山元春擧氏の孤猿叫雪など見るに足るべしである。

花鳥では川端玉章氏の躑躅、荒木寛畝氏の月夜寒梅、今尾景年氏の櫻花に雉子を三佳作と某新聞記者はいふたが、成程此評は正鵠を誤らないものと予も見たのである。



植村松園氏の京美人は三人の姉妹が立つて書物を見て居るところで、上の姉は丸髷で、黑の紋付、中のは草色の衣裳で島田、末の妹は新蝶々に桃色の振袖であつて、孰れ劣らぬ桃櫻の中でも、一番の妹は最も美しくして情がある。美人畫では

先づ之が巨擘であらう。洋畫は寧ろ甚だ寥寂を感ぜざるを得ないが、隨つて油繪と來ては、二三の逸作と見るべきもの、外は皆目觀るに足るものは無いと思ふ。この中にあつて和田英作氏の「こだま」は確に苦心の籠て居る跡が見へる。これ同じ和田氏の薄暮と題する風景畫は、天色と樹色との配合が甘く出來て居る。岡田三郎助氏の裸體畫(三



は裸體の少女が樹前に口を開き耳に兩手を當てて立つて居て、その背後に奧深き深林の趣を示した圖であつて、少女の貌の無邪氣なるところなどは、云ふに云はれぬ趣がある。是れが先づ油繪中の白眉であらう。

枚）の中では讀書と題してあるのが一番佳作と思はれる。

彫塑物も餘り振うて居るとは思はれぬが、木彫では足立碧圃氏の田家豐收は、農夫の形も整うて、彫刻も精巧である、山崎朝雲氏の海邊の小兒もよく出來て居る。鑄像では、沼田一雅氏の原型、山本龍乘氏の鑄造にかゝる象虎奮闘は、秀逸というてよいと思ふ。牙彫では、村田吉五郎氏の農婦が床几に腰かけて、小兒を擁し、箸を執つて食する狀を刻みたるは、殆んど眞に迫つて居て、最も巧みに出來て居る。

予が眼に映つた博覽會見物の大略は、先づ此なものである、出品物の批評、陳列排置の整否、部局の區別などにつきては、かゝることに趣味乏しき予の素人眼にも多少論じて見たいとのないではないが、笑を專門家に招くの恐れは兎も角もとして、讀者諸嬢に厭倦を來すことを恐れるから、こゝに筆を擱くことゝするのである。幸に諒恕せられんことを切望に堪へない。（をはり）

因に記す、鐵道作業局では、先日から博覽會見物の爲めに特に土曜日毎に觀覽滊車といふのを出すことになつて、車賃も大割引を行ふて僅かに八圓で往復し得らるゝことになつた。土曜日の午後六時新橋發の急行列車に乘りて、翌朝大阪に着いて其日に博覽會を見物して、午後の七時十分に大阪驛から乘車すると、月曜日の午前九時三十分には新橋驛に歸着するのであるから、日曜一日を費やせば、何の苦もなく、博覽會を見物することが出來る。至極便利の方法である。

又た國光社發兌の第五回内國勸業博覽會重要品物產案内といふ書は、博覽會の沿革、組織、前回との比較などを詳に記した冊子であるから博覽會のことを知りたいといふ大方に、此の書籍を紹介して置く。



小說

不緣（上）

幸田露伴

男女の緣ほど不思議なるは無ければ、古よりこれを神業と申して、出雲の御計ひと、今に云ひ傳へたるも道理なり。こゝに柳の姿、櫻の顏、取り交せて往來織るが如き都の錦町わたりを、日毎に通ふそれ〳〵の女生徒多きが中に、色の白さが先づ眼に立ちて、其町に居つき地主の店のかゝり立派に、生計の豊さは、暖簾名から知るゝ福徳屋の萬兵衞といへる呉服屋の一人息子に思ひ染められたるがありけり。マルコニが骨を折るまでも無く、眼づかひの無線電信は口より巧に、初戀の花ものいはぬ思を語りて、男の情の淺からぬも、彼方に通じ、女の心の無下につれなからぬも此方に解りければ、息子は終に堪へかねて、むかし吸ふた乳から以來甘いものに極まつた母親に、是非にわれをと、人無きを伺ひて云

ひ出しぬ。よいとも〳〵、何樣で貰はねばならぬ嫁、其方の氣に入つたを迎へて遣つて、澤山孝行して貰ひましよと、白髮多の小な髷に合點〳〵させて、母親早速此事を取り次げば、流石は此の子の親ほどある萬兵衛、今こそ親父氣質の四角ばつた蒲團にぎちりと坐つて、膝も崩さずに朝夕を送り居れど、前前にはさつさ浮いた〳〵の水の瓢簞、取り止まらぬ戀に狂つた事もある譯知りの果とて、我儘千萬なと、野暮らしう頭でなしにはせず、兎も角も先方の身元を洗ひ性質を見定めて、可否はそれからの沙汰と、出入のもの〻中、浮世のあれこれに耳の長い卯之助といふ男を賴んで、いろ〳〵と探らせけるに、齡は丁度二十歳、敎育はあり、性質はおとなしく、容貌はあの通り十人並勝れて、身體に何の難も無く、親は士族出にして血統正しく、當時中通りの官員樣、當人兄弟多ければ支度は十分とは行くまじけれど、其代り望み人あらば、少も早く緣づけたく思ひ居る樣子は、十七八を嫁入り盛りと心得た古風の母親が、あせり氣味になつて帶に短く襷に長き緣談のそれ〳〵を聞耳立つるにても知るべしとの事なり。いよいよ其言葉に間違ひ無くて、あばたも笑窪に云ひ做す媒妁口の交らずば、迎へ取るに露異存無し、いづれ相當の人を賴みて、表立つて云ひ込ます事とせう、との父の詞は母の口より息子の耳へ傳はつて、十のもの七分は出來たつもりの萬吉の悅び、隱しても現る〻顏の笑のあどけ無く、風やはらかに心よき青葉若葉の昨日今日、我が世樂しと待ち暮しぬ。

（中）

取れさうで取れぬ風船球の紅く美しきを追ひかけて、心も空に手を擧げながら走り行く中、あしもとの溝にばかりと落ちて、ハッと曉天の夢を覺まし、口惜しがりしあらましを女房に語れば、女房はよくも聞かで笑みながら、それはあなたが慾過ぎと糠悦びをなさるといふ瑞相、福德屋の嫁取りさへ極まれば、身元洗ひを仕た手柄に大分の禮が貰へる筈、なんぞと身勝手な算用を仕て居らるゝが、大方それが無駄働きにでもなるのでござりませうと云ふ。馬鹿な事ぬかすな、あんな好い嫁さんがまた有らうか、それ



に昨日聞いた話も彼の嫁さんに箔の付く事、今夜にも行つて話せば、物の鑑定自慢をなさる萬兵衛さんが、それは見上げた氣象と乘り出して貰ひたがるは知れた事と、卯之助一言の下に女房をやりこめて、其夜は歩も輕く福德屋を訪ひぬ。遠慮されぬ間柄の、茶の間まで通されて出し殼茶を呑ませられても、金の無い身の習ひの口惜しとも思はで、却つて隔てがましくされぬを悦びながら、時候の挨拶など一ト通り仕て後、御聞きなされませ、かういふ事がござりまする、先達てから御話しの彼の方樣の孃樣に就きまして、いやもう感じ入つた御噂を伺ひました、つい四五日前の日曜に、同じ學校の御友達の某さまと

か仰やる華族様の御姫様が、其の御下屋敷へ仲の好い同級の方々ばかり七八人御招びなされて、一日御遊びなされました時の事でござりましたそうな、何がさて結構な御屋敷の事、御泉水は岸の岩組おもしろく古びて、靜かな水の面天行く雲の影を浸し、芝生は廣々としておのづからなる緑の毛氈を敷いたやうに奇麗なれば、一人として涼園に落付いて座る方も無く、皆蝶を追ふやら草を摘むやらで、池を廻はり、芝生を駈けたり、後には見るものも無いのに誰憚ることも無い餘り、まだ若い人たちの氣も爽やかに冴え渡つて、振りの袂に島田髷といふ年頃には似合は無い隱れん坊の遊びがはじまり、お蝶さんは花塀の陰に潜み、熊子さんは築山の彼方に逃げ込むといふやうな譯で、變り裏のバッとした裾を蹴かへして忙てゝ走るお孃様もあれば、ピンで留めた束髮の飾りを樹の枝へ引掛けて時ならぬ花を緑葉の中に咲かせたも知らいで駈け出す御姫様もあつて、今を盛りの美しい方々が媚き立つて無邪氣に騒がるゝ折節、某子様とやらが鬼になられし時、四人ばかりの孃様方一ト團塊になつて、何處か好い隱れ場もあれかしと、遙に人眼の屆かぬ御庭の隅の方に行かれしに、と見れば椎の老木の蔭暗く生茂りたる下に茅葺の小なる堂めきたるものありて、何の神様を祀れるか知らねど、いづれ稲荷かなんどを、御本體は名のみの事、まことは景色の付合はせを仕て風趣を取らうために勸請したるらしく見えましたので、偃木を見つけし頼朝の思ひに、皆々顔を見合はせて笑を含み、狐戸引き開けて結構な衣物の汚るゝをも顧ずに靴や草履のまゝ中へ入れば、後より入りし人、此戸を明けて置ては隱れたる甲斐無しと、僅に日の光の射す程を殘して後戸を引き、話聲もひそ〳〵と薄暗き中にて、よもや此處を見つけらるゝ事はあるまいなどゝ

小語き合ふ時しも、奥の方に居た孃樣きやつといふ聲を立てゝ、傍の孃樣にしがみ着き玉ふに、何事かと見れば青大將といふ蛇の二尺に近きが、かねて此處を己が棲所と爲し居たるに、俄に人の氣人の聲さては薫々菜、麝香なんどの香さへするに心迷ひしてや這ひ出でたるにて、鎌首を擡げて人々の前へと狼狽進むに、戸近き人は戸を開けやうとしても魂魄落付かねば引明けかねて無益に力を入れて焦慮るばかり其他は心も身に添はで、足を爪立て肩を窄めて、たゞ〳〵驚き怯えたさうでございまするがこれは其筈でございまする。御話は此處でございまする。彼の方樣の御孃樣も、其時の御連中の内でございましたさうなが、何と偉いではござりませんか、些も御慌てなさらないで、執り鎭めて蛇の狀態を熟と御覽じた上、突然御振袖をふわりと掛けて其の頭といふところを袖ぐるみに御攫みなされ、同時に左の手でもまた袖に纏めて其尾をお取りになり、さあ押へましたから怖いことはござりませぬ、其戸を御開けなされて下さりませ、外へ棄てゝ遣らうと存じまする、と物靜に仰おつたので、やう〳〵戸口の方が戸をお明けになると、悠々と其堂を御出になつて、四圍を見回してから、物陰の草叢の中へ御棄てにおつたので、御朋友の方々も初めて息を御吐きになつたさうでございます



る。それで隱れ遊びは其限になつて仕舞ひましたさうなが、それからといふものは彼の方様の孃様の沈勇の御有りなさる御噂といふものは、すばらしい事でござりまするさうな、何と偉い事では御ざいませぬか、と長々しく語れば、萬兵衛感心するかと思ひのほか、不興氣に談を聞き居しが、それでは彼の娘は田舍に育つた人か、と問ふ。いゑ東京でばかり御育ちになつた方、と答ふれば、何かは知らず、福德屋の顔はいよ〳〵冴えざりき。

（下）

出來かゝりし緣談は七分にして破れぬ。福德屋の主人は何といひても承知せず、別にこれといふ瑕は無けれど、彼の娘が人情に遠きは氣に入らず、蛇も怖がらぬやうなものを我が子の嫁には厭な事なり、と云ひ張れば、此親にして此子あり、息子も其の話を聞いてより何と無く戀を冷まして、貰つて欲しとも云ひ張らねば、卯之助一人の骨折損とはなりしが、棄つる神あれば拾ふ神ある諺の通り、かやう〳〵の話より出來た相談の破れたりと卯之助の獨語きしより、其事世にひろがりて端無く華族出の若き武官の耳に入り、氏素性は兎に角、其の氣象こそ賴もしけれ、是非に〳〵と望まれて、其娘今は何爵夫人と尊ばれて幸福に月日を過し居玉ふに及びぬ。知る人ぞ知る緣不緣の物語り、吉も凶も神業ぞといふことの例に此事を人に語り傳へぬ。

（をはり）



文林

待時鳥　久我建通

はとゝぎす鳴べき時をさだめねば
うはの空にもまちわたるかな

松有歎聲　鍋島直大

眞つるのやどりし松にふくかせは
つねに千年のこゑたてつなり

山寺子規　津輕承昭

寺もりとかたる折しもくらまやま
のきば近くもなくほとゝぎす

田家螢　竹屋光昭

早苗とるしづはかへりしあせ道に
うなゐ子さわきほたるおふ也

筍　宮地巖夫

わさことに園の竹の子おひそひて
數もしられすなりにけるかな

辨内侍　北郷久政

くすの木のわか葉枯にし後にこそ
君かみさをはあらはれにけれ

竹徑通幽處　芝葛鎭

一すぢの通ひぢみえてくれたけの
うきよをよそにすむ人やたれ

水族館　小出粲

奥山にうみもみる世となりにけり
たつのみやこのうから聚めて

螢透簾　千葉胤明

燈火もいまだかゝげぬゆふやみに

文林

をすのと近くはたるとひかふ

松下躑躅　遠山英一

みとりしく野中の松のしたかげに
咲けるつゝじのうるはしき哉

月涼沙　鍋島榮子

打よする波にぬれつゝまさごぢの
つきのかけふむ夜半ぞ涼しき

千代野尼　南郷柳子

わかの水たゝへし桶のそこぬけて
まことの法のそこいをやしる

百合　本多芳子

ませの内にせたけも延て美はしく
咲そめにけりひめ百合のはな

水道　小池道子

わらかねの土の下ひにひかれきて
都にすめるたまかはのみつ

芍藥　保科節子

日のもとに咲出ながらいかなれば
えびす草てふ名にはおふらむ

夏夜雨　佐藤艶子

音たてゝひと村さめのすぎしより
すゞしくなりし閨のうちかな

潮干狩　田中瀧子

足もとにいつる小貝はおほけれと
をしくも汐のみちてきにけり

樵路躑躅　中村禮子

よき花はすくなかりけり柴ひとの
絶すかよへるみちのつゝしは

張良　小川直子

かけはしを焼すてゝこそ中なかに
危ふきみちもわたしえにけむ

夏海　服部磯子

おりたちて夏わすれ貝ひろふ子の
たもとすゞしくうらかせぞ吹



六月一日兼題

樞密顧問官正三位子爵黑田清綱先生撰

（門人山岡超舟子評）

雨後蟬

天

三河國幡豆郡平坂町石川みの方　石川代志子

夕たちのすきしこすゑになくせみを
またふるあめとおもひけるかな

評　白雨一過して、蔚蒼たる綠林を漏るゝ蟬の聲、耳朶に逼りて、再び猛雨沛然たる心地す、實景愛すべし。（超舟）

熊本市光琳寺町　日高かず子

夕たちのはるゝかたよりなきそめて
たかねにさわくせみのこゑかな

評　原作三四句（なきたてゝたかねにつゝく）とあり共に耳障にして詩致を害ふ事大方ならず、能く能く味ふべし。（超舟）

人

下谷區谷中清水町十九番地　河合象子

あめ晴しくものはやしのつゆちりて
なごりすゞしくせみそなくなる

評　言葉花やかにして、言ひまはし凡ならず、歌に老いたるものと云ふべし。（超舟）
以上の三子には先生より特に賜はりし直筆の短册一葉づゝを呈す。（超舟再）

甲

東京　三上誠子

雨はれてつゆのたまちるまさのはに
またもしぐるゝせみのこゑかな

評　うつくしき言ひまはしかな。（超舟）

東京　山本茂子

歌の庭

ゆふたちのはれゆくあとのまつ風に
すゝしさそふせみのもろこゑ

評　趣巧おもしろし。(超舟)

三河　永井さい子

さらにまたしくれそめけり夕たちに
しはしをやみしせみのもろこゑ

評　實景うつしえて妙。(超舟)

美濃　吉村せむ子

夕たちのすぎにしあとのこすゑより
すゞしくおつるせみのもろこゑ

評　一讀、おのづから涼味を覺ゆ。(超舟)

秋田　三浦ふさ子

むらさめの露もかわかぬこすゑより
なきたつせみのこゑそすゝしき

評　原作五句(こゑそにぎほふ)とあり、蟬の聲は賑がしきものにして、にぎほふと言ひては聞にがたし、又一二句に照應せず。(超舟)

三河　本多きさ子

ゆふたちのはれゆく山のまつかせに
たくひてすゝしせみのもろこゑ

評　なだらかにして能く調へり。(超舟)

東京　柴田露子

夕だちのひとむらすぎし木すゑより
みだれておつるせみのもろごゑ

評　原作三句(すぎもりに)とあり、蟬は元來雲雀の如く空中に啼くものにあらざれども、かくては冲天より老杉の樹頭に其の聲おつるかと思はれて苦るし。(超舟)

日向　紀藤榮子

なく蟬のこゑもすゝしくきこゆなり
ゆふたち晴れしもりのしたかけ

評　驟雨を樹陰に避くる折りしも、あとなく晴れて己が頭上の梢に啼ける蟬の聲、涼益々深し。(超舟)

大和　栗山たか子

むらさめのはれしなごりの露ちりて
こすゑすゝしくせみそなくなる

評　原作五句(せみのなくなり)とありて力弱き心地せらる。(超舟)

栃木　川中子てつ子

ひとしきりふる夕だちのあめはれて

なくねすゞしきせみのもろごゑ

評　思想はあたらしからねど流調なるをよろこぶ。（越舟）

乙

あつさをはらひなかして夕たちの　肥後　田代綾子
すきにしまつにせみそなくなる

なつの日のあつさなかしゝ夕たちの　肥後　田代艶子
はれますゝしくせみそなくなる

ふる雨のはれてすゝしきゆふかせに　肥後　吉弘周子
またもしくろゝせみのもろこゑ

こすゑにはあめのなこりの露みねて　茨城　原田みつ子
ゆふかけやまにせみのなくなり

雨はれてつゆうちはらふゆふかせに　東京　安井きやう子
こゑもみたれてせみそなくなる

夕たちのなこりのつゆはなくゝせみの　讃岐　大山豊子
こゑにこほれてすゝしかりけり

ゆふたちのなこりのつゆになく蟬の　東京　三好珍子
こゑもしくろゝもりのしたかけ

むらさめの晴てつゆちるならはやし　東京　金原玉城子
しくろゝせみのこゑそすゝしき

かきくもり神なりさわくゆふたちの　栃木　川邊秋子
はれゆくあとにひくらしのなく

雨はれしゝつくのもりにひとしきり　埼玉　横田秋子
こすゑにゆするせみのこゑかな

雨はれてつゆもまたひぬこすゑより　伊豫　小松千代子
しくろゝものはせみのもろこゑ

むらさめのつゆを命とたのみつゝ　横須賀　上田雪子
樹たちにうたふ日くらしのこゑ

たちよれは涼しかりけりゆふたちの　日向　紀藤のぶ子
晴れてせみなくにはのまつかけ

むらさめの晴れたる庭のこすゑより　和泉　福原華子
すゝしくおつるせみのこゑ〳〵

あめはれてゆふひのこれる山まつの　東京　田中よし子
こすゑにたかきせみのこゑかな

ゆふたちのはろゝこすゑの涼しさを　東京　田中ちゑ子
あつさにかへすせみのこゑかな

ゆふたちの雨はあとなく晴れゆきて　横濱　大山あき子
木の間すゝしきせみのこゑかな

雨はれてつゆもまたひぬきりのはに　東京　原三幸子
またひとしくれせみそなくなる

ゆふたちのひとむらすきし露ちりて　武藏　松本さく子
こすゑすゝしくせみそなくなる

なく蟬もゆふたちあめにとたねして　大阪　桝田益子
はれてのゝちにこゑのきこゆる

雨のおとにしはしとたねし木々の蟬　東京　雨森みつ子
はれてすゝしくなきまさるかな

雨はれてすゝしさのこる木々にまた　東京　雨森つる子
あつさおほゆるせみのこゑかな

さみたるゝ軒のたまみつおとやみて　埼玉　前野嘉賀子
あつさもよほすせみのもろこゑ

雨はるゝにはのわか葉のつゆちりて　東京　椎野瀧子
せみのこゑさへすゝしかりけり

秋の庭

さみだれはあとなくはれてなく蟬の　こゑもすゞしくきこえけるかな　北見　中川伊代子

むらさめのすきゆくあとになく蟬の　こゑもすゞしきなつのゆふくれ　東京　椎野鋭子

ひとしきり夕たちすきてまつかせに　おとをあらそふせみのこゑかな　札幌　澤鈴子

雨はれてこすゑはるかになくせみの　こゑよりおつる木々のしたつゆ　下總　ます子

夕たちのなこりのゆつにぬれつゝも　はたうつりしてせみそなくなる　尾張　後藤信子

山のはのこすゑすきゆくゆふたちの　はれてしくろゝせみのもろこゑ　東京　川村きよ子

ゆふ立のなこりのつゆにそてぬれて　せみのねすゞしもりのしたかけ　東京　積山鏡子

夕たちはあとなくはれて木のまより　すゞしくきこゆせみのもろこゑ　東京　柏田靜子

夏やまの木々のむらさめ晴るれとも　なほもしくろゝせみのこゑかな　長野　山本直枝子

あまつ日は玉ともちりてわかはもろ　せみのなくれはさやけかりけり　京都　坪内りき子

むらさめのかたへはれゆく森かけに　いり日すゞしくせみのなくなる　東京　椎野ぬき子

かた枝はひかけなからにむらさめの　はろゝおそしとせみのなくなり　秋田　佐藤かつ子

夕たちのふるまやいかにひそみけむ　かしましきまでせみの鳴くなる　東京　石野敏子

雨すきし木々のしつくもなくせみの　東京　山本梓子

村さめのふるきやしろのもりかけに　こゑよりしけきかたなかのもり　福井　平田そう子

ひとしきりとたえしものをむら雨の　はれてすゞしくせみそなくなる　松山　上原のぶ子

夕たちのはれてこすゑになくせみの　はるればまさるせみのこゑかな　茨城　中里げん子

夕たちのはれゆくもりのこすゑより　こゑきくときそすゞしかりける　東京　戸塚鐵子

夕たちの晴れゆくもりのしたつゆに　ひときはたてるせみのもろこゑ　下野　菅田篠子

あめはれて岡邊の松になくせみの　なくれすゞしきせみのもろこゑ　壬生　菅沼德子

夕たちのはれてすゞしきわかにはに　こゑにあつさをわすれけるかな　栃木　森田みと子

みつはさすきゝのこすゑに聞ゆなり　なきしきるなり日くらしのこゑ　東京　荒井藹武子

夕たちのなこりのかせにつゆちりて　あめよりのちのせみのもろこゑ　小野末子

木すゑすゞしきせみのこゑかな

丙

雨はれしやなきのかけなすゞしけけに　ひとこゑせみのなきいでにけり　上總　高石登代子

雨はれてみつはのつゆのもろやまに　こゑもしめりてせみそなくなる　東京　杉田繁子

あめすきしもりのしづくに立ぬれて　きけはすゞしきせみのもろこゑ　三河　服部正子

日くらしに蟬のなくれもあかぬまて　三河　宇津野代幸子

あめのゝちせのやまそすゝしき

雨はれて木すゑすゝしくおちくるは　のきばのやまのせみのもろこゑ　肥後　佐々小季子

よもすからをやみなき雨はれわたる　あさのすゝしきせみのこゑかな　肥後　佐々有鄰子

ゆふたちの杉まつかえにかせふきて　すゝしくおつるひくらしのこゑ　下野　川邊美喜子

雨はれてはかせかろしとゆふひかけ　かけろふやまにせみのなくらん　埼玉　横田音羽子

夕たちは尾の上にはれてたかさこの　まつかせさそふせみのもろこゑ　清國　稲田猴子

五月雨はくまなくはれてこのゆふへ　こゑもすゝしくせみそなくなる　東京　林　環子

ひとしきり竹むらさわくゆふたちの　こすゑにのこるせみのもろこゑ　秋田　三浦さわ子

ふる雨にかけさへ見えすなりにした　またもなきたつせみのもろこゑ　東京　松村あさ子

むらさめのをり〳〵すきの森かけに　こゝちよくきくひくらしのこゑ　三河　河合ぬひ子

あめはれてさすか夕日もすゝしけに　せみのこゑするもりのしたかけ　三河　服部萬子

むら雨のはるれは木々のこすゑより　すゝしけになくせみのこゑかな　山口　田村多豆子

村さめの名こりのつゆのこすゑには　せみもすゝしきこゑに鳴くなり　東京　藤田いく子

ゆふたちの雨ふるのちにすゝしくも　こすゑになけるせみのもろこゑ　安藝　和住千鶴子

夕たちのすきしこすゑにすゝしくも　つゆもつせみのこゑそおちくる　埼玉　前野ふさ子

こさめやみくれゆく里のもりかけに　日かけのとけくひくらしのなく　東京　後藤ちか子

あめはれて葉山のまつになくせみの　こゑもすゝしきゆふくれのそら　東京　安井あや子

ゆふたちのなこりの露をちふさにて　はゝそのもりにせみのなくらむ　鳥取　大塚信子

夕たちの晴れゆくかせにつゆちりて　すゝしくおつるせみのこゑ〳〵　東京　戸塚ふみ子

雨はれてすゝしきなつのあさとてに　いさましときくせみのもろこゑ　東京　川村まつ子

夕たちのはれゆくあとのやまかけに　こゑすゝしくも日くらしのなく　東京　川瀬たき子

涼しくもきこえくる哉しはかくれに　あめをやりたるせみのゆふこゑ　東京　内田きみ子

夕たちのなこりのかせにせみのこゑ　ふきおくるさへすゝしかりけり　東京　内田とく子

雨はれてゆふひまはゆきにしやまの　こすゑゆすりてせみのなくなり　東京　吾妻ちか子

ゆふたちの過にしあとのこかけより　すゝしけになくうつせみのこゑ　本郷　山口季子

あめはるゝこすゑのわか葉風すきて　つゆとみたるゝせみのもろこゑ　東京　椎野秀子

ひとしきり雫もとたえしむらさめの　はれてすゝきせみのこゑ〳〵　丹後　木村義子

夕たちのすきゆくあめのあしよりも　はやくしくるゝせみのこゑかな　肥後　仁保菫華

夕たちのなこりのつゆをみにしめて　横濱　岩橋花子

こだちかくれにうつせみのなく

かせわたるにはの若葉のつゆちりて　長野　小泉みつし子
こゑもすゝしくはつせみのなく

むらさめの露もまたひぬ木ゝの上に　三河　石川たき子
すゝしさそふるせみのこゑ〳〵

ひとしきり雨にあらひしにはまつの　東京　北島功子
こすゑにすゝしせみのもろこゑ

夕たちのなこりのつゆのおきあまる　神奈川　森田棠留子
こすゑすゝしきせみのもろこゑ

夕たちのはれまゝちねてなくせみの　栃木　青木たま子
こゑよりはるゝゆふくれのそら

あめやみてたまなす露のうるはしく　信州　小林よし子
すゝしさまさるせみのこゑかな

夕たちのなこりはつゆのわかはより　播磨　本多宜子
こほれてすゝしせみのもろこゑ

あめはれし木々のこすゑの露をしも　但馬　田尻保代子
ちりしくまてのせみのこゑかな

夕たちにしはしとたねしせみのこゑ　東京　山口すま子
はれてひとしほなきまさるかな

木すゑよりおちてこほれて夕たちの　山口　村上操子
しつくにぬるゝせみのこゑかな

ひとしきりすきゆく峰のゆふたちの　東京　高谷いち子
あとよりつゝくせみのこゑ〳〵

五月雨ののきはをもるゝおとたねて　三河　石川ますす子
さやかにもきくせみのこゑかな

ゆふかせにあめの名殘のつゆ散りて　東京　高谷華子
さすかにすゝし日くらしのこゑ

夕たちのはれてすゝしくなくせみの　札幌　山田ふみ子
羽かせすゝしきころもてのもり

雨すきてゆふ日まはゆくさしぬれは　陸前　前田河千年子
ゆたけきみよとせみもうたへり

夕たちのすきのこすゑにつゆちりて　下野　菅根春子
こゑかしましくせみそなくなる

あめはれて若葉かくれに鳴くせみの　東京　荒井幾久子
こゑかしましきゆふくれのそら

雨やとりいつこにせしか知られとも　栃木　岩間きよみ子
はれてうれしと來なく日くらし

かしましときゝてしせみのもろ聲も　若松　川邊柳子
いまはすゝしきゆふたちのあと

夕たちのあとの木たちをふくかせに　大阪　日原花子
なみうつせみのこゑのすゝしさ

夕たちのすきもりちかくうつせみの　若松　會田滋子
ぬれてかつつゆに鳴きしきるなり

初夏野外に遊ふ

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

天

熊本市光琳寺町　日高かず子

さみだれそめぬまにとちぎりおきける友の三人四人若葉の露涼しき朝戸出を驚かし、今日なむとそそのかすに、あはたゝしけれど、ねくたれ髪かい

つくろひ、ぬきかへし衣手かろく立出ぬ。隔つるもののなき空さやかに晴れて吹風いと涼しう、山畑に麥かる賤の男、麓田の早苗に青き波たちたる、いづれ夏の景色ならぬはなく、氣も心もすが〲しうなりもてゆくに、折ふしの移りかはるは四方のけしきのみにもあらずかし、急がぬ道の面白く、卯の花咲ける垣根に立寄り、杜若にほふ池にやすらひ、みやび人あらば、かつ〲言の葉も殘し行かんをせんなしなど打興しつゝ、いつしか志す野邊に來にけり。限りもしらぬと見しは霞のわざなりしが、向ふの里までつゞきたる遠きものから、呼べは答へもしつべきさまなりや、ぬき殘されしつばなのほにいで、蕨のひろごりて昨日の姿もなし茂りに茂る百草の同じみとりなるは、千種にはふ秋ぞうたかはるゝ、これや薄ならんいな萩なめり荊萱にこそと、とり〲いひのゝしるに、いづれとも分きかたう、しるしつけてほに出ん秋まつべしと用なきこといふも折に合ひてはいとをかし。

あさみ草のやさしく咲ける、鬼とは誰か名づけしならん、されど花に葉にとげ持ちたるは、容うるはしき少女の針包むにも似て自ら折もやらぬそかし、姫百合撫子の花もかなと、草かき分けぬれど時早ければ甲斐なくて「露ながら今宵は此處に宿りせん、一本匂へ床夏の花」と口すさめど、拙なければ示さてやみぬ。まして花なとさそひ出づべきかは、名もしらぬ草根こちて花のありやなしやと問はんとすれど、里の子も歸りてあらず、長き日も、いつしか暮れんとするにおどろき、家路たどりぬ、いてうつし植ゑん草の庭もせに咲こはる秋は已れも世にはひ出でまほしうなむ。

地

神田區駿河臺南甲賀町八番地　金原玉城子

夏のけしきに、いりたつまゝに、きのふの花も、あとをとゞめず、霞も雲も、なごりなう、晴わたりたる、みどりの、そらのかぎりなきにつゞきたる、廣き野邊の、にひ桑はたけの風、そこはかとなく、なつかしうかをりて、いとをかしきあした

になん」かたまもちたるをとめのこ〻かしこにむれゐて摘めり」なにともきてわかぬほどにうたひあるはむつましげに語りあふもほのかにきこゆ」もし蝴蝶にも身をかへたらましかば、なかにいりても、あそばましを、老たる身のさしましらはんも、はしたなくて、たちはなれたる、芝生に所をしめて、たづさへたる籠のうちより、くさ〴〵とり出して、香をる木のめもになどして、心やりにのみつ〻長きひの暮ゆくさへわすれてやまとにからにずしあそふに、ちとせのよはひもけふはのばへたらむこ〻ろせられてくれなはのへにいでなん月と〻もにあひやどりやせましとさへおもはる。

人

東京牛込區新小川町二ノ四　近藤はな子

十歩にたらぬ庭ながら、ところせきまで生ひはひこりて、風そよぐなる草々の、さすがに霞の衣ぬぎやりし野邊の、此頃思ひうかばれつ。

都の塵をふりわけて、此の日水無月の末つかた、友垣うちつれだちて、そめあまる青葉の蔭、若葉の床に、一日を夢みんとこそいでたちにけれ。

細川邸の黒垣づたひに、女子大學の規摸うちあはぎ見つ〻、いつしか里の細路にふみ入りぬ。

昨日を夢みて忍ひなくらん鶯の、葉櫻の影に來なくらめと近づけば、さにあらで軒かたふきし賤が伏屋の南の窓より、しづ心なく洩れくるなりけり足もとに細くながる〻里川の、清きにうつる殘んの董蒲英公の、やつれし姿いとあはれに、並たてる小山のうちわたす緑の帳をもれて鈴の音きこゆるなどゆかしともゆかし。

蝶の身ならねど、丘の上に上りてはくだり、下りては野にいでつ、思ひのま〻にそこはかとなくさまよひにけり。

路ふみまよひては菜畑にいでま、蝶おひかけてはいさ〻小川に陰をおとしつ、此の野彼の原、みななつかしみ、あかでさまよふたのしさよ。

やがて足のおもきを覺へたれば、とある丘の上にもゆる如き草の床にやすらひぬ、穂に出でたる麥

畑の、目もはるかにうちつゞきて波うつごと風にそよぐめり。

龍をゑがきてたちのぼる某會社のけぶりいさましう、いみじき匠もなどゑがきうべしやは、下行くやさしの柴笛の音は、里の子のすさびにやあるらん、いとあいらし、青葉をならす坂の追風、こゝちよくまして「リボン」にふれてひらひらとひるがへる、云はん方なくうれし。

しばし此のうるはしき天地に心うごかされて、友みな言葉もなかりき。

あれ御覽ぜよと指さし給ふは八重子の君！

畫がき給ひ歌思ひたまふは金子の君！

妾はひとり夏の野の、今更めきてなつかしさに、いはすかたらず恍惚の境に辿入りぬ。

〰〰〰〰〰〰〰

以下原稿投着順

長崎　八尾いへ子

露も霧もへだてぬ空の景色のなかしきた、たゞに過さんは本意なければ、心合へる友とち二人三人そゝのかし、野邊のあたりすゞろ歩きす。道の行手には、時鳥のかけにかくるらんといへる卯の花も、そこかしこに匂ひそめ、花橘のまたつぼみなるがなつかしきに、薄緑の若葉かくれに、白々と見ゆたるいはん方なし、麥のはや色付そめたるを、やがて利鎌もて賤が刈り取る樣もなかし、苗代には、豊かに水をたゝへ、彼方此方田働ける男の子、秋の田のみを祈る歌もふし面白う聞ゆて、見る物聞く物、何れも豊なる御代の樣ならぬはなし。此あたりにはすむ人や少なかりけん、若菜の葉もいたうひろごりたるか、澤に見ゆれと、今は手ふるゝ人もなきそわりなき、來ん春は姿ここそきてつまめ友と語ふ、人も時おくれぬ間に、學の業いそしまずば、徒に老のみ行て、世に用ゐらるべうもあらず、此若菜にても知らるゝをとむらきもの心ふりおこしつつ、行々てひろやかなる野邊に出つれば、かたへには霞の衣きて花かさしゝあたりと思はれぬ迄、木々の瑞枝さしかはしたる斗りの、綠の若葉匂ひ出たり、花の時已れのみ、之空の色ときそひたる、花の梢に春の名殘をかりて、結へる藤浪のゆかしきに、一もと二もと山吹のいはぬ色をのこしゝ背子がきる紅そめのと歌はれし、躑躅の咲おくれたるもあはれなり。生茂る若竹の中に、鶯の老聲になきたるは、あかぬ心地すれと、初音待得し程の聲ときけはまたいひしらずかし。さて日も山の端近う傾きつれは、いさがへらん興もすこさは中々ならんといへは、何かはさいそかん、やがて、夕月もぼのめくへし、かへさは螢も見はやさん、夏はよるとさへいはずや、興は今なかばにこそと、友のいへるに心付て、淸少納言の四季の調も思ひ出られぬ、兎角する程に、黃昏近うなりて弓張月の面白き影いらんとするを、山の端にげよといへば、又友の螢見んには、聞こそよけれとあらかひけり、かくいち早く繰り出る言の葉の鋒先には、あらそふへくもあらず、女の似つかはしからすと、いらへんすへをなみ、頭に手もおかるゝよ。今はとて足はやめければ、かはそひの柳村、篠原より、むらがり出たる螢の、暗もてらさんはかりなるは、遊び暮しゝかひにて、こゝ

さりかたう覺ゆれど、螢狩は又更にこそと契りて家にかへりぬ。

散の庭

東京　後藤ちか子

袂輕く吹く九十の春風も暮れゆきて、五月の空となりはてぬ、あたら踰る月日のいそがるゝを、おもはゞ、人命のはかなきもうたていみじ、一日の休日、空しく時のまの煙りとなしはてんも心うしいでや野べの遊び、心のけなげ增もやせむと思ふものから、友がり急き出で、やがてうち揃ひ野べ近かく出でゝけり。

春のなごりうせしにあられど、あやしき色香にあこがるゝ風情とこりて極目千里、綠あやなす夏ぞめの空、心ゆたかなる、遠く眺める野田も山田もつゆなきあまる玉苗の青波よするさますが瑞穗の國とたゝへらるゝも、げに理なれ、里人の丹誠おもひやられ、心あはれにうごかさる、なはてたどりて小川の堤に出づ、里のうないら、あやしの唄なとものしつゝ、草かるもいとなかし、堤に沿うてほどゆくに、くちかゝる村橋のいとあやしう渡せり、岸うつ水の音、苔むす岩れに、とびこふ蝶とんぼ、またなくながし。

川うち越ゐて山の端近くたどりて行く程に、人村もやう／＼遠しとや、おぼしきほどは、松杉あまた生ひ立ちて、ひるもなくらきところ、木のまなもれて古びたるあやしの寺に、讀經の聲の聞ゐければ、心うちよされ門戸によるに、門つたひの籬の破れまより本殿見ゆ。ひたぶるの世すて人しきりと、經に餘念なかりしがいつしか卷はつき、おくまりの閨さして立ちさりぬ、あはれ何ことはりのありつらめ、かくは世をはかみて、心ほそく山寺にかきこもり、佛につかうまつるこそ、つれ／＼もなし心の濁りもきよざる心地すれ。といにしへのひじり仰せられしも、げにさるものぞかし、うち見ゆる庭面の、古池のほとり四季をそへある灌木のなかに、この頃の空ぞ、われしがほに咲ける、撫子花、あやめ、あるは花菖蒲などみやびになかし、林たどりに、おうさきるまを、さすらうて、西山にたゆたへる白雲の黄ばむ頃、家路にかゝり、かくて宵のまに／＼に日記かいつけぬ。

東京　山本梓子

ぬぎかへし單衣の心もかろう思ひたちて、野へのけしき見むとて出でぬ。曉方まで降し雨の名殘なくはれて、遠山まゆのみとりいとあざやかに、見渡され、かたへの岡の楢柏、さてはいにしやよひ此下陰に、ひれもすくらし、野中の櫻も、なへて若葉のこちたくさしたるに、雨に一入染られたれは、みとりしたゝるはかり、心地いとすかすかし、朝日のかけ花やかに楕のしつくにも草はの露にもきらめきて、玉かさしたるやうなり、そこはかとなう、道なき草をふみ分けて、またさまよへは、姫百合の淸き姿も、なでしこのゆかしき花もまたさきやらて、あさみとかやなつかしからぬ名の、花のみぞ多かる、時鳥のこゑもきかれは、家にゆきて何を將らむ、なと、口つさみつゝ卯の花もやと、求むれは、こゝなりとおほしき所に、いさゝかちりかひて、枝はみな折りつくされつ、心うや、今一と日二日の、早からましかはと、思ふにも、如何なる人の、郭公のこゑ、たつれありくとて、行きしかへさの、車につけて、もていにけんと、れたきものから、ゆかしき心地のせられてなん。

家つともなつのゝ草の袂には、たゝしら露の玉そつゝめるとそかへりて後に、かきつけぬ。

横濱　大山あき子

櫻咲きぬとうち騷き。吹く風に心づかひせしも、昨日と去り、おとつひと過さゆき。今は名殘りなく、散りはてゝ、青葉のみぞ茂りあひぬ。今日しも古ぬのこぬぎ捨て、衣かへしたるに、ゑも旨はれず。心地よきまゝ、近きあたりそゝろ歩みを運びしに、衣の薄きに足の運ひも輕やに、久保山のほとりになん來にける。木の

聞ごしに左りてをながむれは、横濱の町々、一目に見わ渉りて、喧しさも思ひやられぬ。僕の町をへだゝりし此所は、物靜かさも一しほにて、藪鶯の老をかこつも唯ならず閑なされぬ。麦の穂の出揃ひたる、畑の畔をつたひつゝ行く折しも、待とも聞得ぬ、時鳥の聲もうれしく、行々てお三の森となん呼べる、日枝神社の境内にいたり、社にぬかづきて身の幸を祈り、池のあたりへ歩みよれば、あまたの蛙聲さまざまに、競ひなくもいとおもしろく、しばしたゝずみてありたるに、塒を急くからすの友呼ひかはす聲に驚き、

思はずもそゞろあるきて夏の日の
なかばを野邊にあそび暮しぬ

などかこちつゝ家にかへりぬ。

東京　山口琴子

きのふけふは、夏にいりたちしと、いへどまだうら霞そらにのこりて、うかれごころも、しづまらぬころとて、野べあそびせんとおなじ心の友とち、いでたつ、さるは、老たるものゝ、かたちはくち木のやうに、見ゆられど、心には花にもたはるゝばかりにて、もゝ草のしげれるうへにひさごとり出して、こゝろ／＼にくみかはしつゝ、もうたひなどす、

夏草の露をたつねてとふてふと
ともにたはれて野へあそびせり

いと／＼ながきひもくれなんことのをしゝおもへど、やどかすひともなき野べとて、家路にいそぎけり。

東京　石野敏子

櫻色は、染にしきぬを、ぬぎかへてけるけふは、秋もいとかろくなりぬるまゝに、心も夏めきて、若葉のかげしたしうなりにたるなりしもひごろむつびし友の、ゆくりなくも、とひきてそゝのかすにいとうれしくていざとて立出ぬ、ふりはへてこしがひもありてきのふまで霞こめたりと見し野べは、はやくもかはりて、晴わたるそらの、色にかよへる綠りの果もなき野べに、しろうはた紅ないろへたるは、佛の座といへる草なるべし。たをやかなるをとめがむつまじげに語りあひ／＼葛引もありあるはかたま持て、新桑摘もあなり。陰くろうなるまで茂り合たる、若葉の下に、ほのかに見ゆる、淨水のあたりに、ねをびれたらんやうなる蛙の聲きこゆるは、暮に／＼春のかたみともおぼゆて、あはれなり、こなたの高き岡に只ひとせのつゝじ、今をさかりににほひ出たるもいとをかしうて、これをしもけふの家づとにせばやと、かたみにかざして、よそひなどする折しも、きゝつけたる、郭公いとしのびやかなるに、

夏のきてまつといふなる郭公
はやくもきゝしけふのうれしさ

こゝかしこさまよひて、あかぬひとびと野へにくらしたるもをかしうなん

東京　杉田繁子

若葉の頃、茂りあひて、ふみよむ窓も、いとくらくあるも、たどたどしき、をりしも、したしき友の、ふりはへきたりて、そゝのかすまゝに、そゞろあるきせばやと、うれしくて出たつ」きのふ見し、色のかげもなく、水持に、そよぐ風のすゞしくて、心のゆくまゝに、廣き野に出たり、麥生のなかより、雲雀の高くまひのぼりて、消の道の草の露をかざして、ちいさき花の咲たるなど、をかしく見ゆ」ゆくての森に、いたれば松にまとひて、藤の花のしなびも長くて、風になびたるなと見ゆ、おくれて咲たる、つゝじの花に色あひて、にほへるが、いとうつくしうて、繪にもかゝまほしうおぼゆれば、草をしとねに、しばしやすらふほどに、はる

かあなたにて、田植歌の、聲しければ、見やるに男をみなの、あつまりて千町の小田に、苗とるにてぞありける」秋のみのりもいかばかりかと、今よりたのもしくおぼへて

ふく風もかろき袂をひるがへし
こゝろもそらにあそふけふかな

いとこゝちよくて、夕くれまでもかへるさわするばかりになん。

東京　柴田露子

おのづから、籬となりし竹の一むら、漸々、枝別れ行く淺緑の、卷葉の上を、折から雨の名殘の風、渡るよと見る見る、廣ごりたるをかしさに、書讀みさして立ち出づれば、あな、すが〳〵し、昨日迄霞の衣に匂ひて立ちし、は山しげ山、いつのひまに、卯の花重ね裝ひけん、花の香こめし野邊の面は、又も同じ緑になりはてぬ。親き友とかたみに摘みし、菫たんぽゝ、今將、あとゝふもをかしく、とり殘されて、恨み顔なりし母子草、青やかに茂り合ひたるもいとあはれなりや、春を流せし小川の水に、杜若のゆかりの色うつらふあたり、やゝ大きうなれる鮎子の見えがくれするあるは、こてふの羽袖輕げに飛びまかひたる、さすがに春の形見と覺えてなつかし。

ひろごりたるは憎しと云はるれど、やがて、涼しき陰つくるらむと思へば、樂しきものをと、柳の下に佇む程、家路を急ぐ、うなゐ等が草笛に、驚かされて、ふと心付けば、待つとしもなき影の露をゆすりてこぼれいでぬ。

和泉　福原菫子

きのふの花はいづこ、野邊はみどりの小草のみ、萌え出でゝ、なつかしかりし春の花も、一夜のゆめと消えうせて、只あぜ道に、そこはかと、白雲とみまがふ許りに、卯の花の咲きみだれたるあはれ、まては小田の蛙の、むらがり鳴きつゞくこゑなどして、しかすがに夏の景色なるぞをかしき。

信濃　小林よし子

花にわかれし蝶にはあられど、夏野に花たづねんとて、妹のやさしき唱歌につれてこゝかしこ、只見る稻田の青う、みずほの國の名もげにや、ゆく〳〵一ツの坂邊には、ひらかぬいちごしげりて名も知らぬ草さへ、見當りぬ。ふし面白ううたふ小川は、すゞしく流るゝきしに、あやめの花のあだかも小鳥のとぶ如く、土手にそひたる、うの花白う、雪とも見えつ、たもとにふくむ、風清く空よりたれしとも思ゆる、柳の大木の枝しだれて、なびくすゞしさに、やをら土手に腰かくれは、妹の、青空高うのぼる、ひばりに和して歌うたひつ、やがてはゆびさして、あれは蜂よ、と、云ふもをかし、かなたの林のかげゝ、太き農夫の聲すれば、又あひだには、乙女の唱歌すゞやかに、小犬も散歩にいでたるにか、山は高く遠くそびえ、清き空氣、いづれ造化の神の心づくしにいでたるものにや、かゝるたのしき野邊に、一日くらさば、心の花も咲くらん、常にもちたきは、今日の心にこそ。など思ひて、をちこちながむれば、前なる畑に、花におくれし蝶二つ。

肥後　佐々有鄰子

今日は四月の神祭する日とはなりぬ。日影も初夏のけしきをみせて。松の木末になく蝉のこゑ耳をすまし。空の色もなにとなう。すゞしさをもよふして。郭公のはつねをもらし。鶯のこゑ老ぼけてきゝぐるしきに。谷の蛙のあらそひがほに啼かはしぬ。をりしも日曜日なればと。學友二三名。袂をつられて。いざ〳〵とそゝのかされ。託摩野さして出かけつ。手ひく童もあり。馬に水かはんと。鹿瀬川の汀にたゝずむ少女もあり。いと〳〵をもしろき野べのけしきやと一人がいへば

赤もすそひきてかはべにたつをとめ

あゆごつらんとうかれかほなる

とかたへよりこゑのきこゑつ。ふりかへり行けば。白髮の老翁なり。是も野遊の興をそへて今日の紀念とはなりぬ。

備後　枝　ゆ　き　子

雲か霞かと、あやまたれし花は、いつしか散り果てゝ、青葉しげれる、かげなつかしき、夏の初となりぬれば、野山にしげれるみどりの色の、一向に深くなりゆくぞ、床しけれ、かく勢だちたる景を、ふりすてゝ内にのみ、引きこもりたらむには、如何に惜しき限りなるらむ、花子の君をも、誘ひ合して、みどりしたゝらむ田舍の野邊に一日を、暮さばやと一夜の内に思ひ定めて、明ぐるをそしと起き出でゝ、彼の君の住び給ふ花の菴に杖ひきて、しか〳〵と音なふに、心地よく同意し給ひければ、午前の八時前と云ふに、立ち出でぬ。やうやうに、町をば出でゝ田舍の小路をたどれば、草葉に宿る露の、しづくの、日の影にてらされて、足のふるまゝにほろ〳〵と、貫き止めぬ黃金玉を、轉ばすもをかし、あるは小蝶のいみじう早起したるが、草葉にやどる、白露を吸はむとてにや、彼方此方と、とびかふ其すがたの、いと愛らしう、さながら黃金の世界に住ふてふ、天つ乙女のすがたに、似通ひけるとかくする程に此村にても、名ある廣莫たる野邊に出でにけり、こは小高き丘にしあれば、さして、目をさへぎる者とてはなく、目の及ぶ限りは綠深き麥の苗、筋目正しく打ち連なり、其間を流れ淸き小濟の彼方此方に走り、はるか彼方の、山のはに、紫だちたる薄雲の、美はしくかゝり、其が麓なる、山家には、細き烟のいとかすかに、上るなど、畏くも　仁德天皇の、高き屋に上りて見れはと、詠じ給ひし、事など思ひ浮べて、そゞろ昔しの床しうてなむ、ありける折しも、彼方より里のわらべの三つ四つつどひたるが、かたみに、何やらむ、いと奇しき草の芽を、味よげに、食ひ居る不思議さに、そが名をとへば、之は山竹てふものにて、我が里には、好んで食するものぞかし、御身試に食ひ給へと妾に呈するいぢらしさ、あな有難やと受取りて、御身等は、此者のありかを知り給ふか、もし然らむには、願はくは其處迄導き給へと曰へば、承知せしならむ、笑をたゞゐて、妾等を導きける、其路次一つの川にぞ出會しける、其水の淸さは、さながら鏡の面の如く之れに架せる丸木橋など、なまめかしう、いと仙境めきたり、里の子等は、ものともせで、此橋をば渡り終ひたれど、妾等は未だ見し事もなきものにしあれば、況して渡りし事もなかりき、されば、とやせん、かくやせんと、ためらひけれど、他に橋とてはなきとの事故、いでや、渡らむものをと、花子の君と妾とは、四つばひとなりて、橋渡りする折ふし、下にやどれる影は、如何に、可笑を以て、妾等が心を、打つらむ、やう〳〵に渡り終ひて、歩を進むれば、彼方にて、田畑たがやす若者供の、かたみに笑ひのゝしるは、今橋渡りせし妾等を、見てならむと、何んとなう、恥かしうてなむ、かくて、里の子等に、導かれて、其地にとつきぬれば、山竹のいと多く、さながら筍の、處せましと生ひ居る樣に似たりける、妹なんどの土産にせむものをと、餘念なく、折りつゝありし折ふし、日の影もやう〳〵西の山邊に歸路を急ぎ、塒に歸る鳥の音、いとかまびすしく遠寺の鐘の音、夕風につれて耳にひゞき、此淸らかなる綠の野邊は、今しも夕暮の幕に、つゝまれむとす、あな美はしの田舍の野邊の夕景よな、妾が心は、暫しが程は、美てふ理想の爲に打たれ、人事不省の如かりき、折ふし吹く夕風の、さつと一陣妾が面をかすめぬ、此れに氣づきて、彼方を見れば山のは近くかゝれる明星の輝々として、さながら歸路をうながすに似たりければ、花子の君と共に愛を割きて、我家にと歸りぬ、あな、面白の野邊の遊びよな、中々此日の樂しさは、昔の

業こもらさん術もなし、さはあれ此の樂しかりし野邊の遊びなすてなかむは、いと口惜しき限なれば、拙き文にも耻ぢず、物記しゝて、後の樂しみにもし、或は田舍の遊びを知り給はぬ都人に示すになむ。

秋の園

廣島　和住千鶴

日ごろ降りしきりたるさみだれのけさはしも名ごりなう晴れゝ池の邊のうちかをりて、いとも心地よきに、ほとゝぎすの一聲たかく名のりいでだり、菖の根の長きひれもす、つれ〴〵なるまゝ、はらからと共にたち出でぬ。みわたせば、野づら一面青麥の濤らんばかり、綠のなみうちよせつゝ、その度毎に、穗末のさら〳〵とすれなる音のさながら夏の始を告ぐるに似たり、歩み〳〵て、やう〳〵水きよき揖保の流に出づ、此川や、源を宍粟郡に發し、流の程三十里にて、網干の海に注ぐとかや。鮎を名產とすといふ。されば、そのながれのとき事、言ふべうもあらず、向ふかなたの山べには、綠なす木々のひまより、紅ふかう染めいだしたるさつきの、うるはしきが、とき流にうつろひて、山も流るゝやと怪まれけり。瀬々にせかるゝ川水の飛びては玉となり、散りては雪となり、ねならぬながめあ、かず眺むるうちに、渡し舟はいでぬそのさま、こなたの岸よりあなたの岸べに電線やうのものをば、人の背の高き程になし双方に結べり、船人はこれを持ちつゝ巧に彼岸に達するなり、そもこの行、みづから數を探らんとして、先づわれら箇中の人となりけらし、陸に上り芝生の道を辿りつゝ山路にわけ入れば、そこかしこ、つゝじの赤き白きとり〴〵に、そのひまを青葉にて彩りたるさま、げに野べは錦のしとねしきつめるが如し、いさゝ小川さゞれ石に、淸水のさゝやきつゝ、流るゝ涼しかりけるすがた見て、心の雲もはれつるよ、ゆかりの藤のなつかしくさき匂ふかなたより、草刈童の二人みたり語らひつゝ、こなたをさして來るもうれし、かくてなほもさつきのうるしきをめでうの花影を辿り老鶯の聲らやと深山にわけ入りしが、やう〳〵にして、廣やかなる谷間の野邊に出でぬ。せきあへぬ息をば、小川のましみづにていやし。しばし休らひて又たち出でゆき〳〵て晝なほ暗き夏木立に來りぬ。さみしさに箱根八里の歌など口ずさみつゝやがて曽我庄村に出ぬ。しるべなき身のこゝろ安くたゞ歩みて村を出で、みどりしたゝる青葉の山と細谷川のひまを縫ふが如く行きて元の渡し場に來りぬ。舟に打のりて向ひを見れば、入りのこれる夕日は、今しも、新宮富士の松の一もとを照して、いとあざやかに今日の終を告げぬ。

北海道　中川伊代子

打つゞく此頃の日和に、今日は野遊にものせばやと、したしき友三人四人打つれて立出ぬ、さて唱歌などうたひつゝ行くほどに、いときよらかなる芝生あり、しばらく其所にやすらひて、四方をながむるに彼方のひろき畑には黃金をしきたらん如きなたねの花美はしくをちこちの山々はみどりの色こくすゞしけなり、名は知られどいと愛らしき小鳥のさへづるも面白や、かくて一日たのしく遊びくらし理科の材料にもと多くの草花をつみて、又の日をちぎりて家にかへりぬ。

日向　紀藤榮子

朝嵐花の跡訪ひて春は何處に去るらむ、哀れ、花は根に鳥は古巣に歸るてふ、今日此頃の野山の景色も春の名殘りを止むらむ。遠く山々に薄絹の上着、打ち掛けたらむが如く見ゆるは、また消え殘る霞にや譲らめ。實に今朝ぬぎかへる夏衣の只々ひとへに嬉しきは、東なる花の都に學の業をいそしみて恙なく、錦着て古郷に歸るてふ譬に漏れず、五年ふり歸り來ませし、我が友澄子ら君の訪ひ給ひしなればなり。其かみ綠の黑髮を春風に打ちなびかせつゝ、紅の小袖ひるがへし、蝶を追ひ花に戯むれ、夏は涼しき夕まぐれ、門の澤邊に螢狩りなし、幼な馴染の時の言など思ひめぐらせば、梓弓引きて歸へらん古の、春の遊びや夏の野の、まゝごと成したる其折りのをなど、數へ來て見れば、今夏過ぎし昔の古事

を卷き返へしし〳〵操り返へすになむ有りける、實に夏とし云へば心の中も何となうすがゞしう覺ゆるものから、閨の妻戸押し開け見れば、庭前の木々の梢もいつしか青葉茂りて、垣根の卯の花はさながら、殘んの雪かと許りあやまたれ、四方の山野の眺めのいと妙へなるに心引かされ、君と二人草の庵を立ち出でゝ綠床しき野道へと辿り行きぬ、見れば哀れ、昨日迄もゆかりの色に麗しう咲きほこりし菫の花も、哀れやうつろひ安き紫の色褪せ行きしぞ哀れなる。或はいとう小川の流れ淸きに、胡蝶のむくろ流れ行くなど、いとほしき春の別れの惜しまれて、敢果き浮世のまゝならぬを歎らふ中に、そよ〳〵と吹き來る風のねも云はれず、蟬の羽袖にそゞろ寒きものからきびす返へして家路の方へと辿り初めぬ。

ほとゝぎす初音床しくきこゆなり
青葉がくれの夏の夜の月

信濃　内山　けさを子

何くの里も夏初めて、日毎々々に深み行く綠の美はしう、春におくれてひとり櫻の、深山に匂ひぬるも、いと床ししくあやしき臓の一つ屋に、細う高く烟の立ちのぼるなど、何れの人のわび住居にやいとなつかしく、うばが松風の琴の音きゝたし、思へばまひくる胡蝶に袖ひかれて、山吹の淸げなる藤のおぼつかなきさま、あるは山つゝじの時しり顏なる、何れも思ひ捨てがたき花の濱花をおぼろにかすみこめぬ、滔々と流るゝ高瀨川は氣高き信濃富士の帶ならめ、さゞ波もよせくる方の眺をば師の君の道びきによりて此ほとりに蕾ばんたづさへて、學びにしもはや一年の昔になりぬ。花鳥の香はしき三濟路、床しき川中島もみな二の川の末なれや、牛ひく童べの菅笠かすめて、雲間にかくるゝ雲雀の聲知るや知らずや、つゝみの柳笑みゝたるゝなり、たのしき野べの一と日も暮れて、裾野の村里にははや燈の光にうつり初め、さへわたりたる月はまがきの卯の花に、我家路をてらしつゝ。

秋の庭

七月以後 女鑑兼題豫告

歌

七月	一日	山家夏
	十五日	水鶏
八月	一日	海邊螢
	十五日	朝顔
九月	一日	初秋虫
	十五日	殘暑

文

七月	一日	雨窓書を讀む
	十五日	杜鵑を聞きて
八月	一日	海水浴日記（三日間）
	十五日	歸省
九月	一日	思ひを記して女鑑に贈る
	十五日	山家に月を観て記す

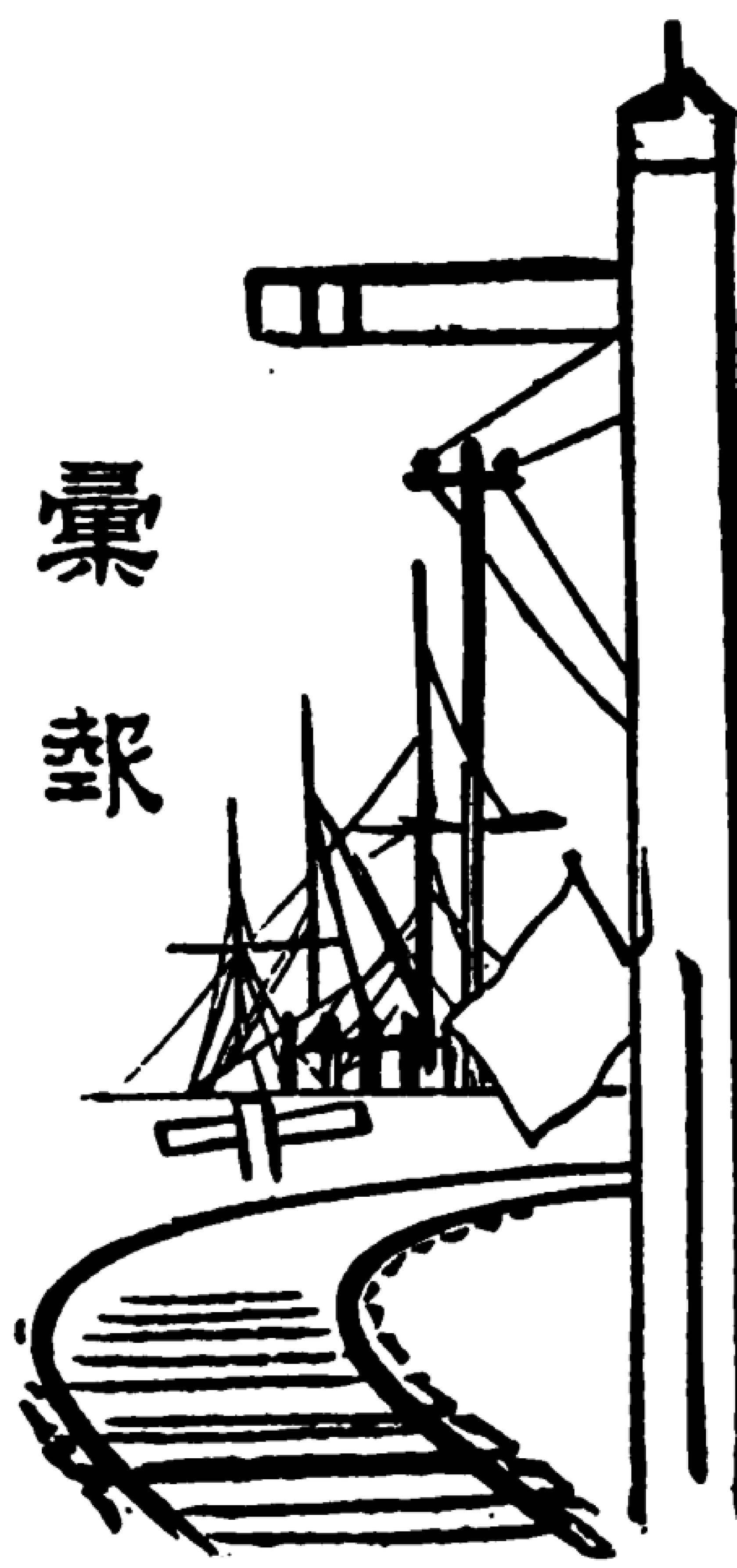
注意

一 歌は題毎に用紙を別にし一題には一人一首若くは二首を限りとす上句に**一音の漢字**一字入れ其他は悉く**平假名**又は**一音の漢字**にて認むべし

一 文は毎行**十五字詰二十行**以内を限りとす必ず**楷書**を用ゐ字體は**鮮明**ならむことを要す

一 其他從前の投稿心得を熟讀詳知せらるべし

彙報



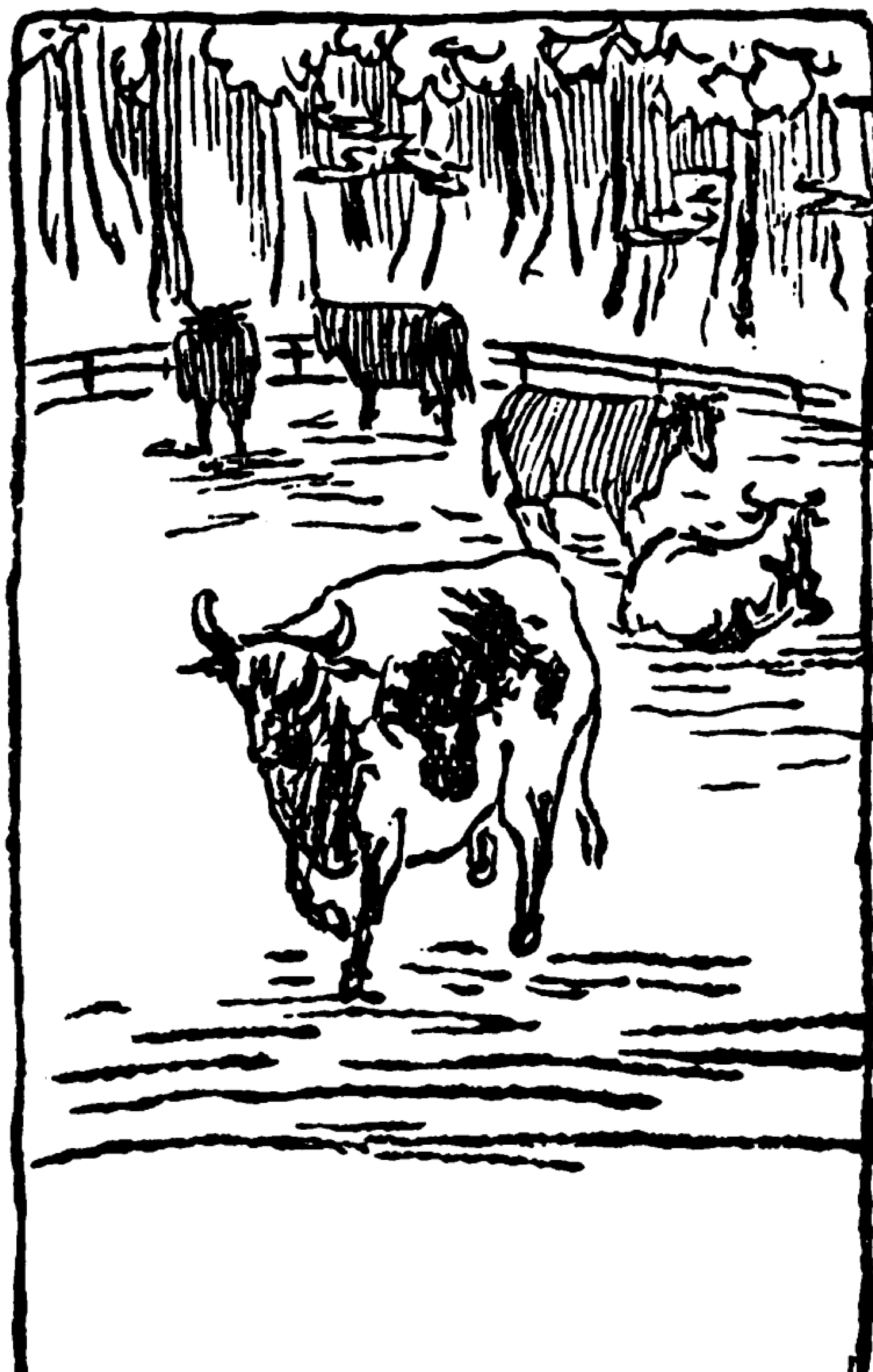
○名譽の指環

日本赤十字社愛媛支部にては豫て婦人社員の増募中なりしに其の結果頗る良好にして總數二千四百餘人に達し全國各支部中第一位を占むるの盛況を呈せしかば客月初旬總裁閑院宮殿下の臨場を仰ぎ副社長小澤男爵常議員鍋島侯爵等を招待して盛大なる總會を開きたるが其際支部より總會紀念として一般婦人社員に銀製指環を贈りたるに偶々鍋島侯爵夫人は其旅館に出入せる社員某女の嵌め居たる右の指環を見て紀念なることを知りしより之を閑院宮殿下の御聽に達し吉川同支部幹事より御覽に供したるに同殿下にも殊の外御賞美あらせられ五個丈御土産として東京へ御持歸らせらるゝこととなり内一個は御手づから御用相成り又侯爵夫人も支部に請ひて自身先づ之を嵌め尚數個を土産として持歸り篤志看護婦人會總裁に渡らせらるゝ小松大宮妃殿下にも献納したりといふ

○和洋折衷の新式婚禮

麹町區有樂町神宮奉齋會内に設けある禮法會の新式婚禮は其後續々申込の者あり殊に在來の式の如き煩無き爲陸海軍士官にて新式に據る者多き由なるが此新式婚禮に就ては醫學博士高木兼寛氏最初より贊成盡力する所あり同氏の媒介にて此式に據りし婚禮二三組ありし程なるが今回洋行より歸りし同氏令息喜寛氏が日鐵會社常務取締役有島

氏令嬢しま子を迎るに付き去月廿一日午後五時有樂町の同會に於て矢張此新式を以て盛んなる結婚式を擧げたる模樣を聞くに式は座禮と立禮の二つあれども立禮を用ひ高木博士及夫人は何れも洋服新婦しま子嬢は淡紅の洋服にて手に白薔薇の花束を提げ之に續いて介添ともいふべき瀨脇ドクトル令嬢高木博士令嬢、媒酌人園田孝吉氏令嬢何れも一對の雪白の洋裝にて手に手に花薔薇を盛れる花籠を提げ設けの式場に入りまづ神前に神饌を供し篠田奉齊會々長式の主禮として祭詞を讀み、續いて園田媒酌人進んで誓詞



を讀み了ると共に新郎新婦神前に禮拜し酌人卯野令嬢二人白絹緋の袴の對服裝にて神酒を酌み堅め杯を交して指輪を交換し此に式を終り別席に於て親類杯ありしが其間僅に二十分なるも優美にして莊重なる事古式に見る可らず神々しき社殿の庭前に薔薇の幽香の薫じ渡れるも時にあひて淨々しき中に立てる盛裝の處女は天女の如く和洋を折衷せし新式結婚の美もこゝに見るべく慥に新婚禮式の典型を殘せしものなり

○東京女藝學校　四谷區麴町十二丁目なる同校は井上行信福井學園諸氏の設立にて專ら中流社會

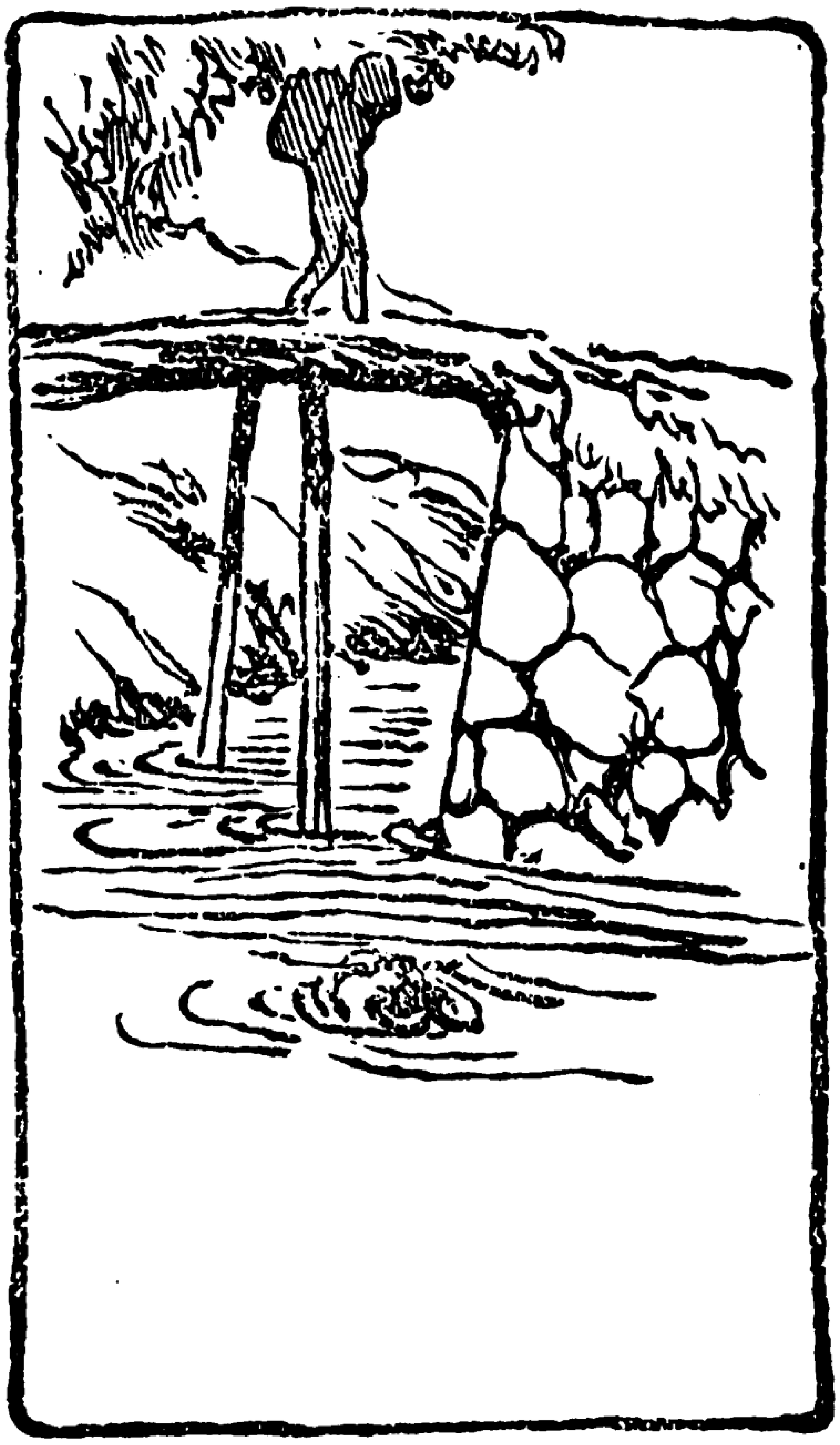
の女子に適切なる學術及び技藝を敎授するの目的にて去る四月より開校せしが今回更に夜學科を設け廣く生徒を募集中なりといふ

○暹羅留學生の着京　今回暹羅皇后陛下より派遣せられたる同國留學生八名は去廿日午後二時二十六分新橋停車塲に着し稻垣公使井口女子高等師範學校敎授等に迎へられ麻布の暹羅公使館に入れり男生四名中二名は皇帝陛下の甥に當らせらるゝ親王他の二名は貴族の子息にして年齢は何れも十五歳より十八歳迄の青年なり又女生四名も各位置ある人々の令孃にして年齢十四歳乃至十五歳なりと云ふ女生徒の方は我國に於ける美術的工藝傳習の目的にして男生には學業進歩の狀況により自己の選擇する專門の學を修めしむる筈なるが孰れも將來有望の學生なりと右は菊池文相の周旋により女生は高嶺女子高等師範學校長男生は高楠外國語學校長が敎育及び監督を爲すことになり居れりと云ふ

○山登萬和氏逝く　山田流琴曲の名手山登萬和氏は先頃より肺患にて療養中の處此程胃癌を併發せし爲め遂に藥石の効なく去月廿四日夜十一時頃享年五十一歳にて不歸の客となりしは斯道の爲め惜むべし其作曲中地久節、民の賑ひ、千代の榮、四季の詠、新年の雪、如月、朧月夜、鐘の音、祇王、近江八景、四季の榮、松上の鶴、阿古屋の松、菊水、須磨の嵐等世に知られしもの多し

○老貞婦（元敎員の妻）　鴛鴦の契りは夢の如く義理人情は紙の如く澆季の世ながらいと賴母しき老婦をぞ發見したれ、埼玉縣入間郡水谷村大字水子二百九番地關野彌吉郞（七十）といふは同村小學校の開校以來殆んど二十餘年間も敎職に身を委ねゐたる者なるが去る二十九年より疾病に罹りて退職するの

止むなきに至り現時に及びては起居も自由ならざる有様にて妻お榮(三十七)はいと健氣にも朝夕これを介抱し不淨物の始末より何くれと痒い處に手の屆くばかりに心を盡すこと八年一日の如く未だ嘗て倦怠の色を現はしたる事なく忠實しく立働らくの故を以て單に水子の貞婦と稱し鄕黨間の推重する處となり居れるにも拘はらず男女四人の子寶のうち長女お澤は他へ嫁し長男膳吉郎三男茂十郎の二人は素行修まらず老父の病さへ顧みざる有樣にて二男由猪之助のみが多少の補助をなし居れりとは如何にも嘆はしき次第なり



されどこのお榮の貞操なる事は既に其筋の知る處となり知事に上申したれば不日授賞の沙汰あるべき筈なりといふ、何れにしても近頃稀有の貞婦にあらずや

◎浦和在の孝女　埼玉縣北足立郡浦和町在谷田村大字大矢場八十一番地守屋喜助(五十八)は長女おきせ(二十一)が三歳の折に眼病を患ひ遂に治療の効もなく兩眼盲て耕耘にも從ひかぬる始末となりしより已むなく其後は慣ぬ按摩を業とし細くも煙を立居るうち同女が九歳のとき女房を失ひたるに喜助は大に力を落とし其日の稼も以前の如く心に任せず

鬱々として日を送るをおきせは小さき胸に種々思ひ悩みしが幼心にも堅く心を決し盲目の父を勞はりながら近所の驅走りなどをして僅かに賃錢を貰ひて生計の助けとなし稍長ずるに及びて近隣の機屋へ絲繰などに通ひ日々十錢に充たぬ金を貰ひてかつ〳〵生計を營み居り遊び盛りの年齢も黒くなりて働き通すまでに身心を勞し十餘年來一日も鎭守の祭りにさへ赴きしことなく心を盡して實父に仕へしが其の優しき心根を村内の人々も深く感じて折々金品を惠みて之を勵ましつゝあるを同村の受持巡査が聞知り奇特の孝女と右の趣を浦和署へ上申に及びたるより更に同署よりは其筋へ具申の手續中なりといふ

○貞婦松永たき出發す　和蘭公使館の旗竿より墜落し身體不自由となりたる夫松永瀧藏に對して四ケ年間貞節の限りを盡し尙は病夫を腕車に乘せて岐阜縣まで輓き行かんとせる貞婦おたきの身の上は前號に掲げたるが同女は附近慈善家の盡力に依りて少からぬ金員を受け其他各新聞社に集りたる惠與金をも送られしかば愈々去廿四日午後出發して岐阜縣羽栗郡淺井村の整骨醫淺井萬兵衞方へ赴きしといふ

○瑣談　鳩山春子夫人は當世女ハイカラの隊長とまで指さるゝもかの白粉禁止論には反對であると即ち其意見に西洋婦人は本來色白き性質なるにも拘らず猶白粉を用ひて容姿を粧ひ老ゆるに隨つて注意を怠らぬ是は彼の婦人が美を愛する風からである然るに我婦人は色の黒い方でありながら白粉を塗飾せぬとは殆んど其身の婦人たるを忘れたのである勿論從來の如く粗惡で有害で皮膚を害する樣なものを而かも濃厚に用ゆる樣なことは衞生上にも容姿の上にも宜しくない事であるが實質の

可きものを適度に用ゆることにしたら決して有害となる筈はない故に私は益々適度に其塗飾を奨勵したく思ふので殊に女學生などが髪も紊し衣服も調へず剰さへ白くもない顔を日に曝して得意がる如きは大の嫌ですと蓋し春子夫人は客年歐米を漫遊して以來其思想が和製ハイカラと異なりキッ粋のハイカラとなつて居るとの嘩がある▲下田歌子女史嘗て「我邦の女子教育には一貫せる理想がなく單に歐米の皮相を學んだるもので社會との調和を缺き虛飾に流れて實用に適しない之が改新の急は今日に迫つてる」と云つたが女史の風采は如何にも才子肌で辯舌爽かに五十に近き齡しても尚四十餘にしか見えない殊に其質實なる衣服を纏うて平然たる處は其境遇が教育界にあるためであらう



▲歐米では婦人にして生涯結婚せず政治にまれ慈善にまれ教育にまれ社會的事業に從事するものがある而かも其人々は性格態度少しも普通婦人と異ならざるに我邦にて未婚者か或は寡婦人で社會の事業に身を投じたる人は其性格も態度も何か荒々しく其腦髓が異常である即ち奥村五百子女史もあの通りであるが影山英子女史や

故中島湘煙女史が政治に奔走する時も世人の知る通りであるではないか又今日慈善事業の發起人などは多く此類である是は日本婦人の特色である然し餘り褒めた特色とは云へない（大阪朝日新聞）

◎チエムバレイン氏夫人　英皇帝は殖民大臣チエムバレインの夫人にハイベリー伯爵夫人の爵位を授けらるべしとの風說目下倫敦に於て傳へらるるがチエムバレインが總ての事に關し如何にして其夫人の判斷と才能とに依賴するかは曩に南阿より倫敦に歸來したるとき倫敦市の歡迎の辭に答へたる所にても明瞭に知らるゝなり其詞に曰く市長が余と余の妻の名とを連ねて南阿の業を成就せしめたるものなりと語られたるは正當なり余が個人にして余の妻に負ふ所のものに關しては今之を語る時間を有せず然れども國家の事に關しては余の妻が南阿の經營に就きて國民より幾分感謝の意を表せらるべき價値を有すと信ず而して余の妻の親切と同情とは余の力に能はざりし多くの友人を得たることあり云々と

◎人の壽命は次第に延長す　獨逸ボン大學のフルーゲル敎授は此程人の平均生存年限は絶えず增加するものなりとのことを講演して、維納の醫學界に於ては大に注意を惹くに至れる由なるが敎授の說明する所に據ればミユニツヒに於て登錄せられたる死亡者の三分の一はビール暴飲の結果として、心臟病を起したるものにして煙草の害より原因したるもの少なからずと又敎授の調査したる百歲以上の人四十人の中喫煙の癖ある者は僅に一名にして殆んど總ては酒を過飮せざる者なりと尙又敎授は死を恐れ或は死に就きて考ふるは極めて惡しきことにして人は常に長命ならんとする考を抱かざるべからず非常なる勤勉家にして老年に及び

閑生涯を送るものは概して長命なりと云ひ獨逸には千八百七十一年に百歳以上の男子百四十七人女子二百八十七人ありしが千九百年には男子五人女子三十人あるのみなりしと述べたる由なり

○結婚を種に詐欺を働く　去月二十一日紐育に於て逮捕せられたるファイロングと云ふ男は紐育及びフィラデルフィアの諸新聞に「曾て一回も面會したることなき貴婦人と結婚して直ちに離縁を求むることを承諾せらるゝ方は下名へ申込まれたし此貴婦人は人の妻たるに於ては莫大なる資産を讓り受け得るより至急に結婚を望むものにして結婚者には報酬として二萬弗を與ふべし希望者は貴婦人の寫眞を得る實費として一弗を添へて申込まれよ」と記せる廣告を掲げ五千人の馬鹿者より金圓を詐き取りたるなりと云ふ

○久後澤子

さは子は天保四年十二月を以て武州秩父郡大宮在に生れ、十六歳の時江戸町奉行某に奉仕し十九歳幕臣久後正兵衛に嫁す、正兵衛の實弟に鐵三郎なるものあり、幼より讀を好み壯年に至り熱心の餘り遂に病を生じ、精神亂れ人事を辨へざること十一年の久しきに及びけるに、澤子は伉儷後日尚淺きも、そを介抱して、湯藥は云ふも更なり、日々衣服の破を繕ひ穢を洗ひ、且つ二便の始末に至る迄自ら扱ふに心行かざるくまもなし、斯すると十有一年一日の如しといふ、されば近隣の人々其能く永年の勞に堪ゆるを感賞しければ、澤子は世の子を思ふ親のかゝる子をしも殘してみまかりし心は如何ならん、そを思へばかばかりの勞は何の物かはと語りしといふ。其熱誠見るべきなり澤子三男二女を擧げしが夫、正兵衛幾千もなくして

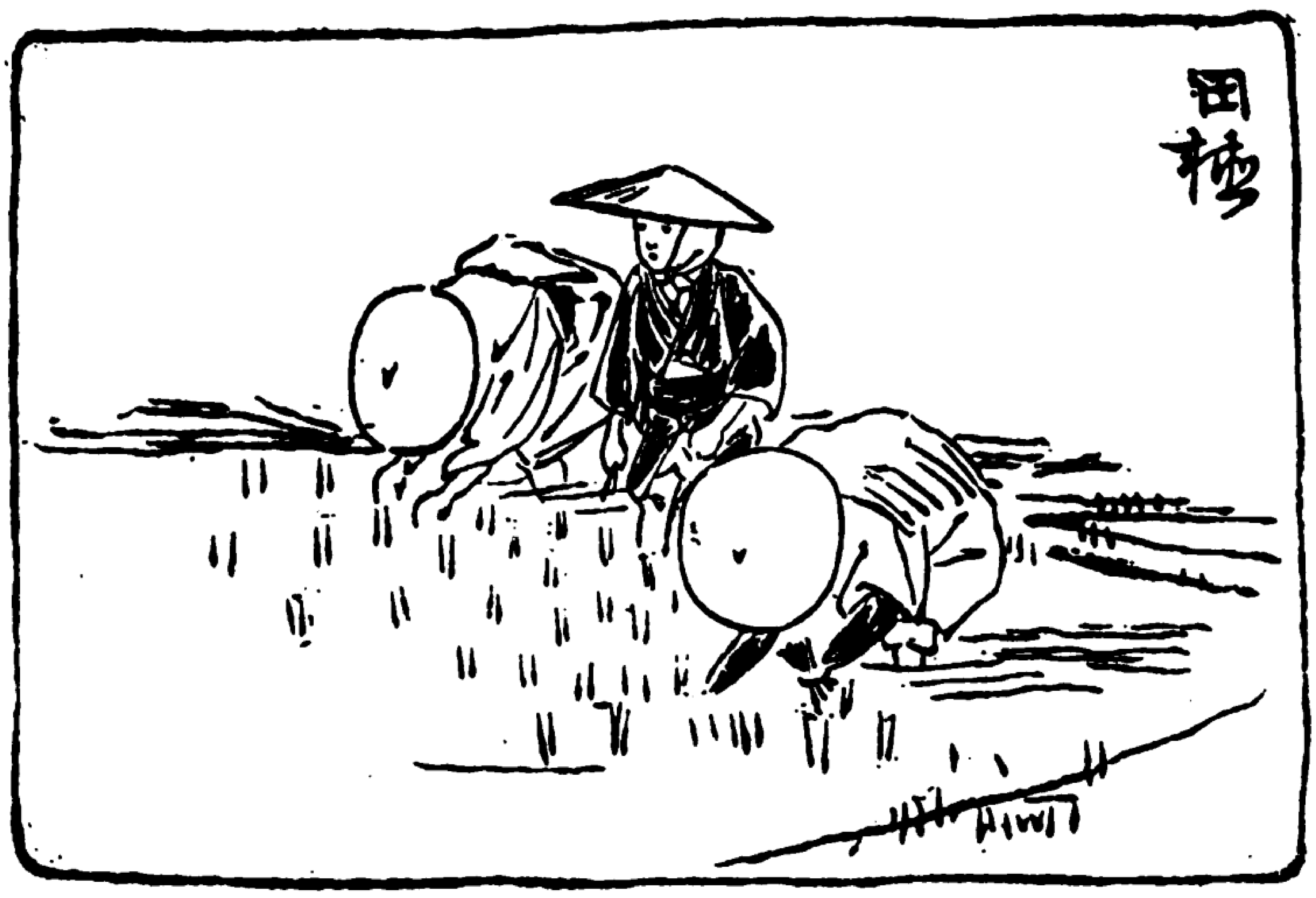
病に伏せり。澤子は寢食を廢し、藥餌に身を委ぬと雖も病勢日に添ひ月に進み、遂に重き枕を上げ兼ぬるに至たれり、正兵衛澤子に謂つて曰く命は天なり。如何ともすべからざれど、我身無からん後は多くの幼兒を如何にすべき唯之のみ黃泉の障なり、御身心よはくては叶ふまじ、身を大切にして能く遺子を保育し呉れよと、澤子聞いて骨も碎け心も消へん許にて何と答ん術も知らず。今は醫藥も効なし、神佛に祈請を込むるに外ならずと朝には水垢離をなし、夕には百度をふみ、火食を絶ち鹽味を忌むこと七日に至りぬ。されど定命如何ともしがたく夫は遂に四十二歳にしてみまかりぬ之れ明治二年十二月の事なり、時に澤子年三十七。十五歳なる女子を始めとして幼兒五人あり、堅く夫の言を守りて之を敎養し、家の爲め子の爲め身を犧牲にして立働き、且つ常に祖先の恩惠を忘れず、田地家屋、日用の物品に至る迄、祖先の遺さ失はざらんことを力め、又勤儉にして苟且にも奢侈の行なく、人の爲に力を盡せしこと數ふるに暇あらず、加之力の及ぶ限りは調へ行かんとて、家の破損屋根の繕ひ、其他何くれとなく勞を取れり、斯くして一日の怠なかりければ近隣の人々みな其の德を賞せぬは無かりしといふ。明治三十六年一月一日逝去す、享年七十歳なりき。アヽ此の澤子の如きは、今日の世稀れに見るところの節婦なれば、その大略を記して貴社に投ず、幸に收錄し玉はゞ、本懷の至りにこそ。

（澤鈴子記す）

○等持院の緣起（口繪寫眞參照）　等持院は西京衣笠山の麓にあり、足利家代々の菩提所にして將軍尊氏以下の墓あり尊氏始後醍醐天皇の殊遇を受け

ながら之に叛き參らせ數度の合戰あり官軍利なくして天皇には吉野山に潜幸あらせ給ひ、同所にて御腦重らせ給ひ終に劍を按して崩御ありぬ。此事を傳へ聞ける尊氏流石に冥罰の程恐ろしくや思ひけむ南朝後村上天皇の興國二年、北朝光明天皇曆應四年後醍醐天皇御菩提の爲めに此寺を創立し夢窓國師を以て之が開基とはなせり。斯の如く朝廷に由緒ある寺なれば其御取扱振都て五大本山に准せられ、足利家滅亡の後豊臣徳川兩家の崇敬總て先例に準據せられたる由

當山の堂宇度々回祿の災に罹りしかば慶長十一年には豊臣秀頼再興あり片桐且元



建築のことを奉行し其棟札今に存在す。此伽藍文化五年烏有に歸し文政元年建造ありしが、本堂一宇は元和二年福島正則の建立せしもの幸に現存せり。

當山に安置せる足利將軍歷代の木像は將軍薨去の際ごとに彫造せしものと傳ふれども舊記燒失して其何人の作なるやを詳かにせず、

嘗て文久年間諸方の浪士等多く京都に集まりて尊王攘夷の説を唱えし折柄浪士等一夜當山に亂入し尊氏義詮義滿三人の木像の首を斬り取りて之を三條の大橋に梟せることあり、其後首を元の如く繼ぎ修繕を加へたれば舊觀に復しぬ、本號に揭げたる尊

氏の像も當時斬首の厄を蒙れるものなり、同寺には足利時代の遺物什寳多く且つ其庭園は衣笠山を主山にとりこみ義政の好により相阿彌の作爲せしものにて洛西名園の一に數へらる、西京に遊ぶ者は必ず一覽すべきなり。

○和歌の石版　本號に掲載せし和歌短冊は舊水戸藩の家老戸田忠太夫(名は忠敞)の詠歌にして過般皇后陛下京都へ行啓の折其嫡孫戸田忠正氏より御覽に供へしに忝なくも御叡賞あらせられ遊春野の歌特に勝れたりとの御詞を賜はりしと承はる、今同氏より其眞蹟を寄送せられたれば石版に附して同好に頒つことはなしぬ。(本誌第九號參看)

○新刊批評

◎社會問題　佛國博士リギヨル氏の著すところにして序論を分ちて(一)本書の目的(二)社會主義傳播の理由(三)社會論者の辭柄口實(四)資本主は皆罪惡者なるかの四章と爲し本論には社會主義の志望、企業、畫策結論には社會問題の解決ありて僅々百ページに滿たさる小冊子なれども含畜穩健にて勁拔なれば以て世の輕佻者流を戒むるに足るべし、掉尾の言の曰く

社會經濟界の改良に於て眞面目なる實効を奏せんと欲せば先つ第一社會凡ての階級に於ける道德的改良を以て開始せさるべからず

と、又た曰く

吾等の本書に論述したる主義言論は現社會の要求と危急とを達觀明斷するに最も好個の位置に立てる羅馬の一老翁より假り來れるものなり

と、其の旨義とするところ、淵源するところ、又以て知るべきなり

◎天人論　著者は萬朝社の黑岩周六氏、物質宇宙、人生、道德、靈魂、宗敎論の六章に分ち穰々秩序的に論述したれば哲學や科學に素養なき人と雖も猶ほ其旨趣の大體を窺ふを得べし文章精錬にして苦澁の痕なきは流石に涙香氏の筆なりといふべし要するに著述界に於ける近來の巨作なり

●女子作法 女子割烹 夏季講習會廣告

官私各女學校教員及該教員志望者並に本學科研究志望者の爲に八月一日より凡十日間女子作法及女子割烹夏季講習會を開設す（會場東京市神田區一ツ橋通町帝國教育會內）志望者は講習すべき學科及住所氏名を記して來七月二十五日迄に大日本禮節學會內夏季講習會事務所へ申込むべし

大日本禮節學會

第一回女子作法講習會要項

學科　本年三月文部省訓令高等女學校作法要目により故實故禮に拘泥せず日常卑近の學科を講習す

○座作進退○應對○受授進撤○實習及心得○寢食服裝○訪問迎接○通信贈答○饗應公會○吉凶慶吊○忌服等の心得及實習

講師　日本式（帝室流）　徳川式（小笠原流）　軍人式（伊勢流）　明治式（臣民流）　禮節講師石井泰次郎君

大日本割烹學會

第一回女子割烹講習會要項

學科　泰西割烹學校教授法に由て日常卑近の各種料理法を講習す

講師　料理師範　八世　石井治兵衛君　石井泰次郎君

一證明書　希望者には出席の度數を驗して授與す

一講習料　左の割合に由て前納すべし（作法割烹午前午後二科とす）

○一學科を講習する者金貳圓　二學科を講習する者金參圓五拾錢

但本會第一回講習會員及割烹會々員は特に講習料五分の一を減ず

○婚禮式講習會

女子作法教員及同志望者にして婚禮式及式用技藝品を研究する者の爲に八月十三日より七日間婚禮式講習會を開設す志望者は來八月五迄に申込まるべし

○婚禮式講習會要項

學科

○普通婚禮式實習及心得○高等婚禮式心得○婚禮床飾○結納式（品物包形熨斗包水引結方實習）○婚禮進物（諸包形銚子女蝶男蝶折形瓶子蝶花形等實物）進物（諸包形飾方雛形及實物）雜用（金銀包末廣包等）一式實習

本會講師が撰定せる明治式及舊時の作法專門教師の奥許として傳へたる古式に依て實地應用を主として講習す

講習料　金參圓（會員は講習料五分の一を減ず）

明治三十六年六月

東京市京橋區鈴木町十一番地

大日本禮節學會內

夏季講習會事務所

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

五月十日 第拾五號 發行

毎月一回發行 壹部金貳拾錢 郵税壹錢



東京築地 株式會社 國光社 發行 ◎全國に賣捌所あり

塚原澁柿著　飯沼珠城畫

山崎合戰

菊版　洋裝美本
定價金參拾九錢
郵稅金　六　錢

毛利征伐、高松水攻、中國引返、山崎大合戰、是れ我神州空前絕後の英雄豊臣秀吉があらん限りの智惠と力とを振ひし花も實もある大戰爭なり。之を例の戰鬪小說に獨特の妙ある塚原澁柿先生が江戶紫の粹且つ高尙にして押出よく、色も艶も古今獨步の彩筆を執て敍述されたるものなれば、猿面重瞳の羽柴筑前、虎頷狼顧の惟任將軍を始め敵には吉川小早川齋藤四王天味方には堀尾蜂須賀加藤木村の豪傑ども入り代り立代り眼前に來て各自得意の技倆を演するが如く、雲漠々、霧殷々、砲火閃き、劍光迸る。舞臺一轉すれば衣冠束帶の豊臣秀吉悠然として現れ來る、實に是れ山崎大合戰のパノラマ、大德寺燒香塲の活動寫眞。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
（電話新橋特八八番　電話新橋二六九三番）
發兌元　株式會社　國光社

登録商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫器附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい



●ねり製 定價（大壜二十錢 小壜十二錢）
水製 定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）



ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は　歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の　新成踏體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せす御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●緑、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
鑵詰六錢五厘　袋入壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舗
東京東兩國
横網町一丁目
伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十六年五月一日發行
毎月二回一日十五日發行
第拾參年第九號
明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

（東京築地株式會社國光社印刷所印刷）